

市川橋遺跡第96次調査 発掘調査報告書

— 伏石地区的調査成果 —

令和4年3月

多賀城市教育委員会

市川橋遺跡第96次調査 発掘調査報告書

— 伏石地区の調査成果 —

令和4年3月

多賀城市教育委員会





卷頭写真図版 3



卷頭写真図版 4



卷頭写真図版 5



卷頭写真図版 6



卷頭写真図版 7



二彩陶器 小盃 蓋 (R-68) S = 1/1
SD3697 第1層出土



二彩陶器 甌 S = 1/2
昭和56年度 第1次調査 III区出土



須恵器短頸蓋 蓋 (R-548) Non Skale
SK3705 第1層出土



須恵器 短頸蓋 (R-548)
Non Skale

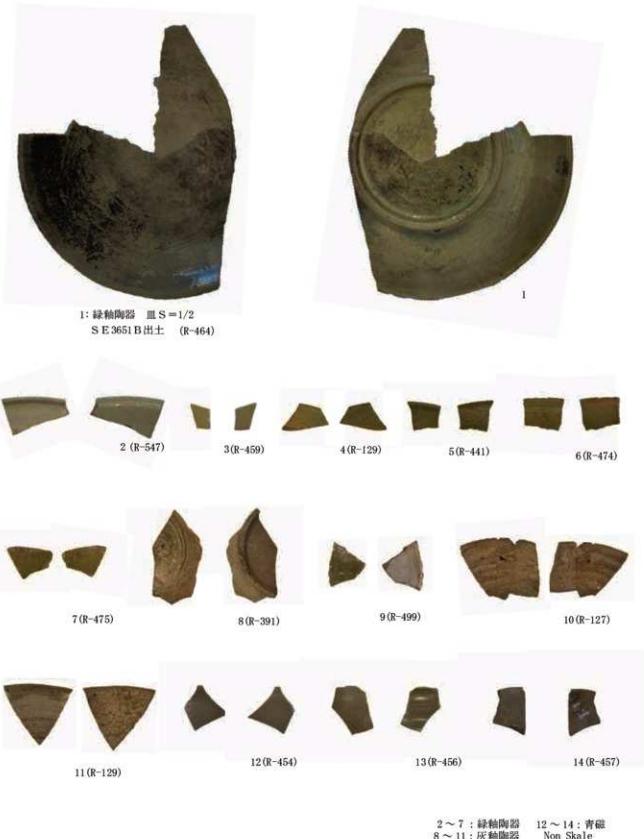


「萬升」銘墨書き器 (R-374) S = 1/2
SD3650 A出土



須恵器 円面視 (R-411)
裏面「占口」へラ描き

卷頭写真図版 8



卷頭写真図版 9



卷頭写真図版 10



上段 保存処理前
下段 保存処理後
(PEG50%含浸後、真空凍結乾燥法による保存処理)

1a ~ 1d: S X3623 池状遺構第2層出土
舟形木製品 (W60)

卷頭写真図版 11

上段 保存処理前
下段 保存処理後
(PEG50%含浸後、真空凍結乾燥法による保存処理)

1a ~ 1d: S X3623 池状遺構第2層出土
舟形木製品 (W71)

卷頭写真図版 12



1a ~ 1d: S X3623 池状造構第2層出土 蕎麥状木製品 (W58)
 2a ~ 2d: S X3623 池状造構第2層出土 蕎麥状木製品 (W57)
 3a ~ 3d: S X3623 池状造構第2層出土 蕎麥状木製品 (W59)
 4a ~ 4d: S X3623 池状造構第2層出土 蕎麥状木製品 (W56)

左2列 保存処理前
 右2列 保存処理後
 (PEG50%含浸後、真空凍結乾燥法による保存処理)

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附石跡をはじめ、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在し、それらは市域の約3割にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。

近年は、西部地区を中心に宅地造成工事や個人住宅建築工事などによる発掘調査件数が増加傾向にありますが、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成29年度から平成31年度にかけて、受託事業として実施した市川橋遺跡伏石地区的発掘調査成果を収録したものです。中でも多賀城南面に広がる平安時代のまち並みのうち、多賀城跡に程近い区画の様相が明らかとなり、園池を伴う邸宅跡や古代の仏教に関する遺物を発見したことは、当時の生活空間や信仰を考える上で、大変重要な成果となりました。

広大な遺跡範囲に対しますと、調査面積はごくわずかですが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

令和4年3月

多賀城市教育委員会
 教育長 麻生川 敦

多賀城市文化財調査報告書第151集 正誤表

頁	行	誤	正
卷頭写真回覧10	-	SE3645井戸跡付内堆積土	SE3645井戸跡側内堆積土
49	18	側内堆積土	側内堆積土
87	29 30	SB3692・3657・3658・3659・3626・3673・ 3625・3632・3673・3672・3679・3681	SB3692・3657・3658・3659・3626・ 3625・3632・3673・3672・3679・3681
95	20	SB3692・3657・3658・3659・3626	SB3692・3657・3658・3659・3626・3627・ 3625
99	19	如来・菩薩立像に	如来・菩薩立像等に

お詫びして訂正いたします。

例 言

- 1 本書は、平成29年度から31年度にかけて行った発掘調査受託事業である市川橋遺跡第9次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査から整理作業、報告書作成までの担当は以下のとおりである。
【発掘調査】武田健市（主幹 当時） 千葉孝弥（副主幹 当時） 関健吾（研究員） 小原駿平（技術） 李スルチヨロン（調査員） 茂泉光雄（調査員） 名取健一（調査員） 鈴木隆政（調査員）
【整理作業】小原駿平
- 3 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 4 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については東に約3m、南に約1mの補正をかけている。
- 5 掘引中の高さは、標高値を示している。
- 6 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
- 7 本書の編集・執筆は小原駿平が、図版作成等は遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は丹野修太・桑折肇・高橋伶奈・神山晶子が行った。
- 8 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

調 査 要 項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 麻生川 敦
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 伊藤 文昭
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター
- 4 調査協力者 斯モリ工業株式会社
- 5 調査従事者 萩澤靖章 石川俊英 大木夫大 小原一成 杉山祐一 丹野修太 村松稔
相沢義雄 清井知也 阿部純一 阿部信夫 板橋仁志 伊藤茂 上村博 氏家雅夫 内田節子 大泉清吉
大沢昌子 大山明洋 同澤一清 尾形潤 小川勝彦 奥田美雪 奥山妙子 小貴芳彦 小野寺浩 角田恵一
糟川良谷 加藤勝二 加藤浩 加藤義宏 門脇公貴 菅野実 菊地清喜 工藤純子 工藤正好 桑折肇
桑折一博 小松まり 斎光也 西條金三 斎藤義治 佐々木直正 佐々木正則 佐々木正範
佐藤今朝子 佐藤長次 佐藤俊博 佐藤衛 佐藤道子 佐藤みゆき 佐藤由紀子 佐藤良雄 清瀬きよ子
島村純一 清水泰昌 菅原正義 鈴木道徳 鈴木慶子 須田英敏 関内久子 漢戸口弘行 漢戸崎修
高橋明子 高橋清明 高橋正行 高橋由美子 武田進 竹本裕昭 但野順子 谷川斬 戸枝瑞恵 土佐実
中島弘 兵庫真貴子 梨本八代 二木松由紀 浜浦英秋 濱田茂樹 半谷正明 平坂謙章 平坂孝志
藤田恵子 藤田敏郎 古瀬律子 保坂優一 本田雄一 幕田裕子 増子清治 三浦侑士 三上嘉昭
村上喜代子 山田由男 山本耕文 横川律男 棚山和雄 米倉幸恵
- 6 整理従事者 阿部麻衣子 有路尚子 石組勇子 内海美由紀 浦山紀以子 奥田美雪 加藤京子 川名直子
菊池かね 佐々木美直 佐々木宣子 佐藤里美 佐藤ゆかり 高橋明子 滝野じし
千葉貴久江 千葉栄美 長瀬真貴子 秦千尋 堀川紀子 宮城ひとみ 村上恵

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
S B : 挖立柱建物跡 SD : 溝跡 SE : 井戸跡 SI : 積穴建物跡 SK : 土坑
ピット（P）: 柱穴及び小穴 SX : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II」（多賀城市教育委員会 2003）に従った。詳細は下記のとおりである。
 - (1) 土師器坏
A類: ロクロ調整を行わないもの
B類: ロクロ調整を行ったもの
 - B I類: ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
 - B II類: ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
 - B III類: ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
 - B IV類: ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
 - B V類: ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
 - B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する
- (2) 土師器甕
A類: ロクロ調整を行わないもの B類: ロクロ調整を行ったもの
- (3) 須恵器坏
I類: ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
II類: ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
III類: ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
IV類: ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
V類: ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
 - I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。
- 3 本文中に用いている「灰白色火山灰」とは、東北地方に広く降下した広域火山灰である。その降下年代に関しては、915年とする説（町田洋「火山灰とテフラ」日本第四紀学会編『日本第四紀地図』1987年、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」）『中川久夫教授退官記念地質学論文集』、1991年）と、907年から934年の間とする説（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』、1998年）に見解が分かれている。前者は「扶桑略記」（裏書）延喜十五年（915）7月13日条の「出羽国宮上、雨灰高二寸、諸郡農桑枯損之由」の記事を火山灰降下記事とする理解である。後者はこの火山灰が、907年伐採の木材を使用している秋田県払田柵跡外郭線C期角材列の存続中に降下していることから907年を上限とし、承平4年（934）に焼失した陸夷安守寺七重塔（『日本紀略』同年閏正月15日条）の焼失層に覆われていることから934年を下限とする説である。近年、915年説を評価するものも見られる（小口雅史「古代東北の広域テフラをめぐる諸問題－十和田aと白頭山（長白山）を中心に－」篠山晴生編『日本律令制の展開』吉川弘文館、2003年）。本書では、これらの研究成果をもとに、10世紀前葉に降下したものと理解する。

目 次

巻頭写真図版

序文

例言

調査要項

凡例

目次

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地と地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	4
第3章 調査成果	
第1節 基本構序	5
第2節 発見した遺構と遺物	13
(1)道路跡	13
(2)溝跡	14
(3)塗り柱建物跡	21
(4)堅い建物跡	47
(5)井戸跡	49
(6)畠跡	64
(7)土坑・その他の遺構	65
第4章 総括	
第1節 遺構の変遷	86
第2節 道路跡の変遷	90
第3節 S-X3623池状遺構について	94
第4節 特殊遺物	99
(1)仏教関連遺物	99
(2)施釉陶器・磁器	102
(3)陶器	104
第5節まとめ	106

参考文献

写真図版

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地と地理的環境

多賀城市的地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川が境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉一塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤も確認できる。

市内には、40を超える遺跡群が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡群が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、古代に陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

こうした遺跡群のうち、今回調査地は市川橋遺跡に該当する。遺跡の範囲は東西約1.4km、南北約1.6kmに及び、砂押川左岸の丘陵地から沖積地へと移行する低地上に立地する。遺跡は旧石器時代から近世まで断続的に営まれているが、一般的には古墳時代～奈良・平安時代を中心とした遺跡として知られている。多賀城跡南面の広い範囲を占めており、前述した山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

第2節 歴史的環境

市川橋遺跡では、これまで弥生時代中期頃の遺物包含層や古墳時代の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

以下、各時代ごとの遺跡概要について述べる。

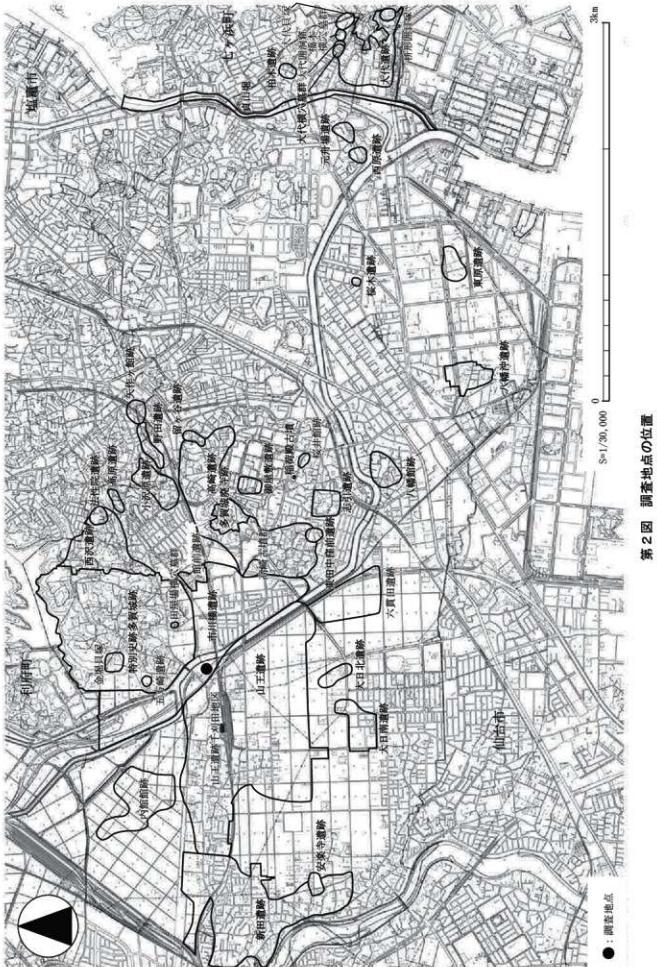
(1)弥生時代

近接する多賀城跡五万崎地区から、弥生時代中期の樹形円筒式と十三塙式の土器・石包丁が出土しており、この付近に集落の存在が想定される（宮城県多賀城跡調査研究所1978）。

宮城県教育委員会による山王遺跡八幡地区の調査や、市川橋遺跡伏石地区的調査においても、樹形円筒式



第1図 多賀城市の位置



期の遺物包含層が検出されている（宮城県教育委員会1994・2009）ほか、山王遺跡八幡地区J区（多賀城市教育委員会1997）では弥生時代の水田跡を発見している。

これまでの近辺の調査では竪穴住居などは発見されていないものの、沖積地の微高地上に当たる山王遺跡八幡地区内に、弥生時代中期頃の集落の存在が想定される。

（2）古墳時代

古墳時代前期には、本遺跡の北から東の丘陵上や西側の自然堤防上に位置する山王遺跡で、集落や水田跡などが確認されている。中期になると山王遺跡東町浦・西町浦地区、同八幡地区などで竪穴建物跡が発見されており、自然堤防上に集落の存在が確認されている。後期になると山王遺跡八幡地区旧河川から柄香炉やト骨等、祭祀や信仰に関わる遺物が発見されており、区画施設の存在等と併せて、この地域の基幹的集落とみられている（宮城県教育委員会1994）。一方、当期の古墳としては横穴式石室を持つ稱殿古墳や田屋場横穴墓群が當まれており、山王・市川橋遺跡で発見された集落の居住者が、造営に関わったとみられている（宮城県多賀城跡調査研究所1986・2002）。

（3）奈良時代

神亀元年(724)には、本遺跡北側の丘陵上に多賀城が築かれる。一边670～1000m程の不整形方の外郭線の内部のほぼ中央に庁が置かれた。

山王遺跡八幡地区や同伏石地区では7世紀末～8世紀前半に大規模な区画溝を持つ集落が成立し、漆作業関連遺物や鍛冶関連遺物が出土しているほか、市内東部では高崎遺跡などで奈良時代の竪穴建物が多数発見されている（宮城県教育委員会1997・2009・2018etc.）。

（4）平安時代

多賀城内で実務官衙施設の拡充が起こるとともに、南面一帯の広い範囲で多数の遺構がみられるようになる。特に本遺跡や山王遺跡では、幅23mの南北大路や幅12mの東西大路を中心に、東西・南北の小路によって区画された約1町四方の方格地割が施行されている。

このまち並みは「古代地方都市」と位置付けられ、東西大路沿いの区画には「国司の館」など上級官人の邸宅が立ち並び、離れた区画には下級官人のほか多賀城に関わる人々の居住地であったとみられている。建物の多くが掘立柱建物であり、貿易陶器や石帶、陶硯の出土量など、一般集落から隔絶した特殊な空間であり、多賀城の整備・充実と連動して拡大した閑闊遺跡群と考えられる。

今回の計画地では、特別史跡公有地化に伴う代替地計画案作成等を目的として、昭和56・57・平成4年度に遺構確認・事前調査で古代の遺構・遺物を発見しているほか、近接する宮城県調査では、方格地割を構成する道路網のうち北2a西3道路交差点や、唐櫃を転用した井戸跡を発見している（多賀城市教育委員会1982・1983、宮城県教育委員会2009）。また、砂押川を挟んで東側に当たる城南地区では、南北大路や運河や、運河を横断する橋脚の他、木簡を含む出土文字資料、平安時代初期の横笛や祭祀遺物、10世紀～11世紀頃の刀・壺鑑等を発見している（多賀城市教育委員会2001・2003・2004）。

（5）中世

仙台市宮城野区岩切から本市西部にかけての地域は、中世の遺跡が密集することが長年の発掘調査から明らかになっており、また「奥大道」という鎌倉からの幹線道路と、海へと通じる主要な河川であった冠川（七北田川）が交差するなど、水陸交通の要所であり、町場や市場も存在したと考えられている。

山王遺跡では山王・西町浦・三千刈地区や、今回調査区に隣接する八幡・伏石地区で、12世紀から16世紀にかけての屋敷が発見され、留守氏と関わる上級武士の屋敷と考えられている。

第2章 調査に至る経緯と経過

本件は、市川字伏石地内における宅地造成工事に伴う本発掘調査である。平成29年2月、開発事業者より当該区における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、2m未満の盛土を行ったのち、幅5~6mの道路及び防災用調整池を構築するものである。

本地区では、昭和56・57年度に第1・2次調査を、平成4年度に第10次調査を実施しており、各調査区で奈良・平安時代の遺構を確認していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。

このため、本発掘調査にかかる費用及び期間を積算するための試掘・確認調査を実施する方針で協議を進め、平成29年9月20日に発掘調査の依頼・承諾書の提出を受け、同年10月2日から11月21日にかけて、費用積算のための確認調査を行った（多賀城市教育委員会2018）。

確認調査（市川橋遺跡第95次調査）はT1からT7の7つのトレーニングを設定して調査を実施し、各トレーニングで極めて遺構密度が高い状況を確認した。遺構の種別は道路跡、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、小溝群などであり、施釉陶器類を含む古代の遺物を多数発見した。

第95次調査の成果を基に費用及び期間の積算を行い、平成30年2月26日から表土掘削を開始した。調査区は便宜上A~G区7つに分割した（第3図）。南半部に当たるA~D区の調査を先行して開始した。平面図作成作業では電子平板と手実測を併用し、断面図作成は手実測で行った。

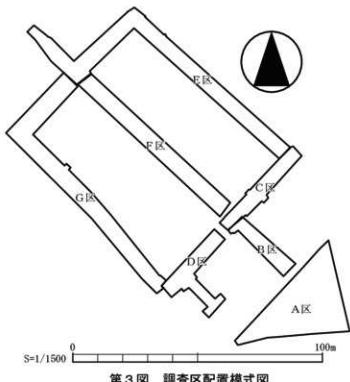
調査の結果、A区北東部、B区、C区南西部において、確認調査では認識されなかった古代の遺構確認面（III層上面）を確認した。特にA区・B区では古代の掘立柱建物の重複が著しく、調査体制や天候不良などの悪条件が重なり、当初の調査計画を大幅に変更せざるを得なくなってしまった。

同年9月頃から北半部のE~G区の調査に着手したが、側板を有する井戸跡や竪穴建物など調査に時間を要する遺構が多数発見された。

北半部の様相がある程度明確になった段階で、調査計画変更の具体的な内容についてセンター内で精査を行い、事業者との協議を経て調査期間の延長に至った。

令和元年6月には、鉤形圍式期の遺物包含層の有無を確認するため、調査区内の4箇所に試掘トレーニングを設定して深掘りをかけたものの、今次調査区では当該期の包含層を確認することは出来なかつた。

その後、令和元年8月9日には機材の撤収及び埋め戻しを行い、現地作業の一切を完了した。



第3図 調査区配置模式図

第3章 調査成果

第1節 基本層序（第4図）

古代の遺構は、現地表面から約20~50cmの深さで検出しており、B区及びC区ではIII層上面で平安時代の遺構を確認した。その他の区画ではIV層が第1遺構確認面となる。調査区の旧地形は北側から南側に向かって傾斜していることから、南側のみIII層が残存したものと考えられる。また、近接地の調査から、下層に弥生時代の遺物包含層の存在が想定されたことから、数か所の試掘トレーニングを設けたが、今回の調査では当該期の包含層を確認することは出来なかつた。

I層：表土層で、厚さは約30~50cmである。現代の耕作土。

II層：古代の最終堆積層。黒色粘質土(10YR2/1)であり、道路側溝等一部の遺構の上層に10~20cm程度残存する。

IIIa層：褐灰色(10YR4/1)の粘土層で、厚さは約10~15cmある。A区北東部及びB区、C区西半部南側にのみ堆積する。灰白色火山灰以前の堆積層。B区及びC区の一部では、この層の上面が古代の第1遺構確認面となる。

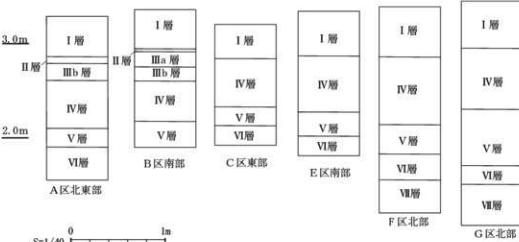
IIIb層：褐灰色(10YR5/1)のシルト層で、厚さは約10~15cmある。A区北東部及びB区にのみ堆積する。焼土及び炭化物を多く含む。

IV層：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細砂層で、厚さは約10~20cmである。この層の上面が古墳時代～古代の遺構確認面である

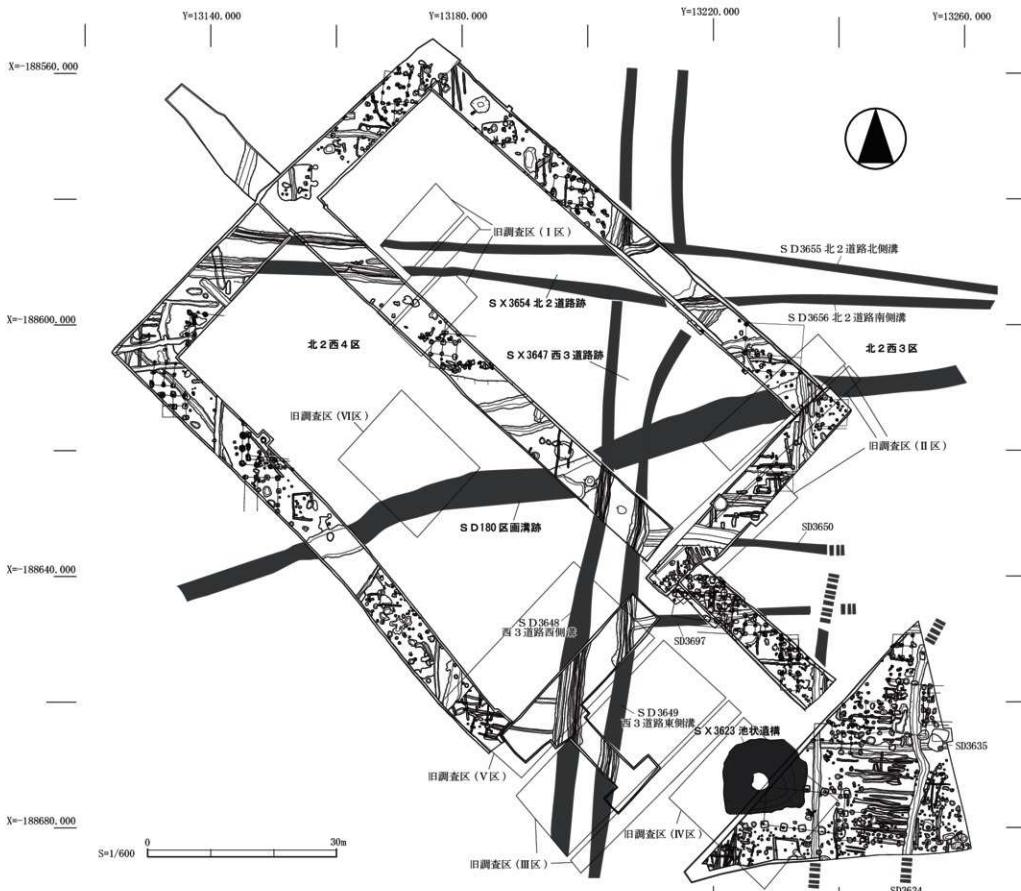
V層：淡黄色細砂(5Y8/3)で、厚さは約20~40cmである。

VI層：灰オーリーブ色粘質土(7.5Y6/2)で、厚さは約20~30cmである。

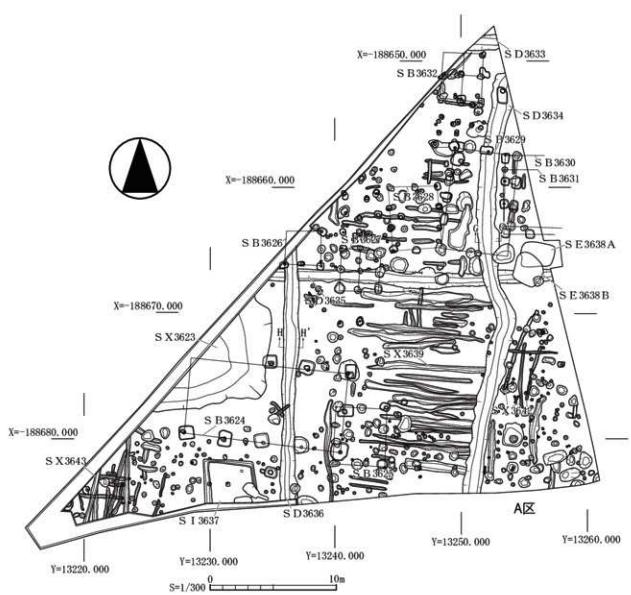
VII層：淡黄色細砂(5Y8/3)で、厚さは約30~40cmである。



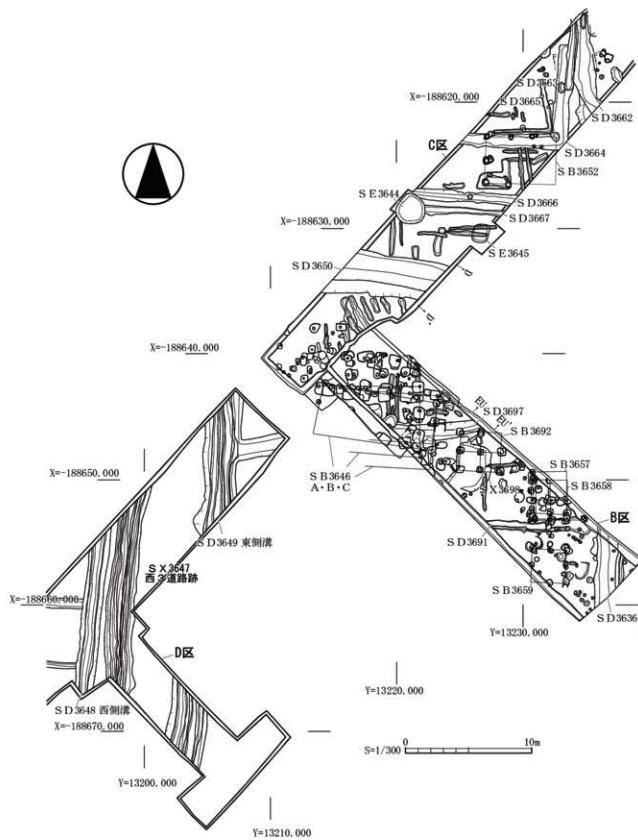
第4図 層序模式図



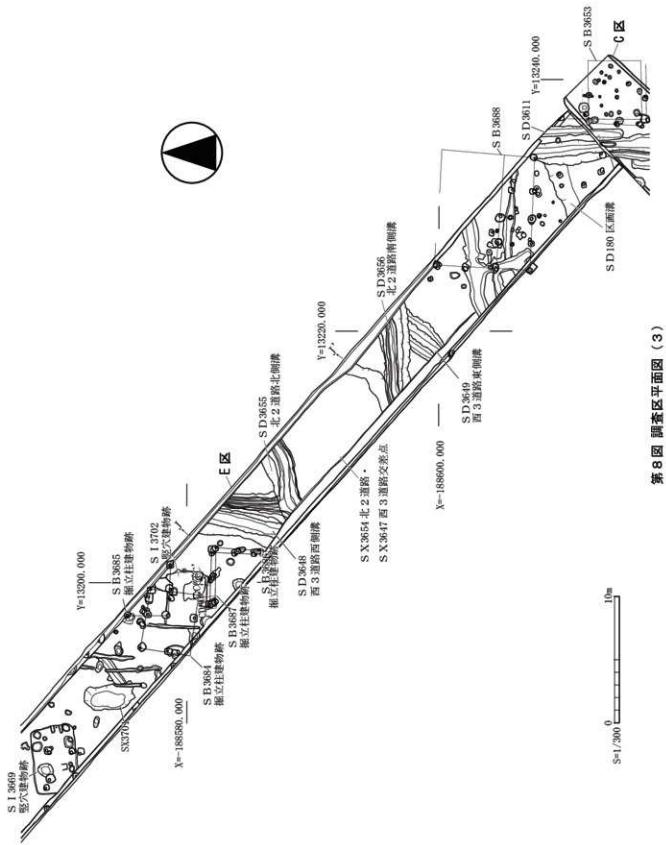
第5図 調査区全体図



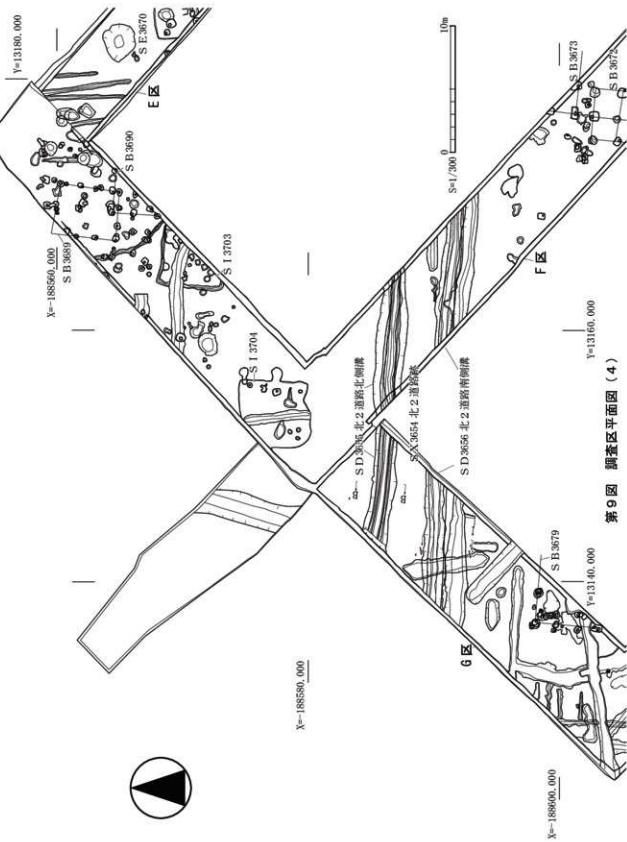
第6図 調査区平面図(1)



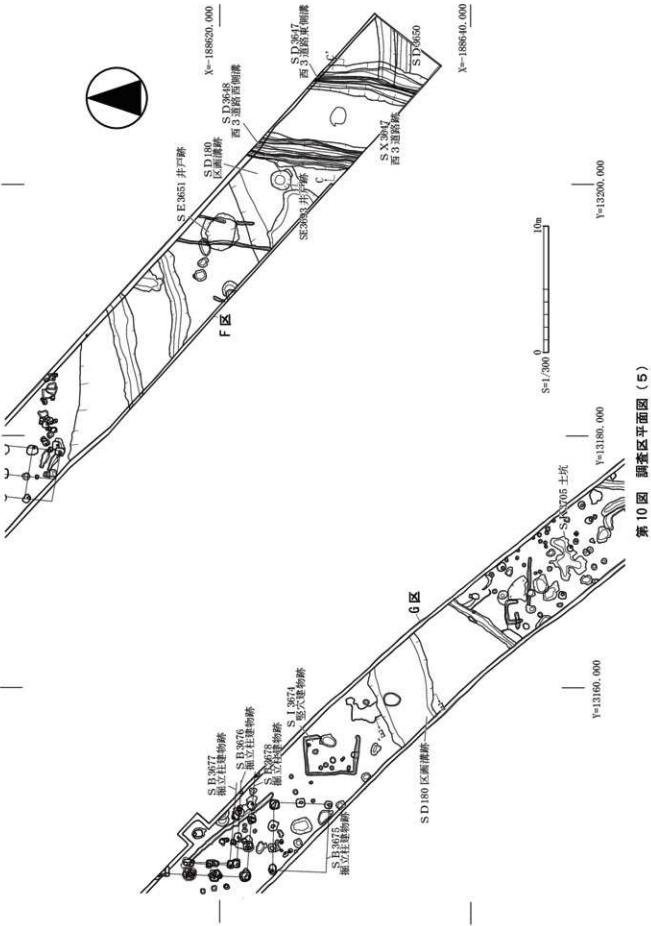
第7図 調査区平面図(2)



第8图 调查区平面图(3)



第9图 调查区平面图(4)



第2節 発見した遺構と遺物

III層上面及びIV層上面で遺構を確認した。III層の残存する範囲は調査区の南西部に限定されることから、ここでは古代の遺構として一括して取り扱い、断面観察等によりIII層上面からの掘り込みが確実なものについては個別に記載する。

(1) 道路跡

S X3647西3道路跡 (第7・8・10・11図)

D区・E区・F区で確認した南北道路である。多賀城南面に広がる方格地割を構成する道路網のうち、南北大路から数えて西に3本目の南北道路（西3道路）である。今回調査で発見した南北長は100m以上である。両脇に素掘りの西側溝S D3648・東側溝S D3649を持つ。また、B・C・D区で東側溝に接続する東西方向の区画溝S D3650・3697を確認している。D区では旧調査時に堆積層の大部分が削平されたため、路面と側溝との関係が判然としないものの、F区では比較的良好に残存していた。本項記載の遺構規模はF区の成果に基づくものである。

【変遷】古い順にA⇒Eの5時期の変遷を確認した。両側溝の変遷を表す小文字アルファベットa～eは、道路の変遷を表す大文字アルファベットA～Eにそれぞれ対応する。

【路面】F区で路面①・②を確認した。E期は路面②、C・D期は路面①、B・A期の路面は削平されたか地山削り出したとみられる。路面①の上層に灰白色火山灰が堆積している。

【東側溝】(S D3649東側溝a)：D区で確認したが、F・E区では未確認である。残存状況が悪く、規模は不明である。(S D3649東側溝b)：D・E・F区で確認した。残存する幅は約32cm、深さ約14cmである。埋土は暗灰色(10YR4/1)シルトである。(S D3649東側溝c)：D・E・F区で確認した。残存する幅は約44cm、深さは約18cmである。埋土は暗灰色(10YR4/2)シルトである。(S D3649東側溝d)：D・E・F区で確認した。残存する幅は約1m、深さは約48cmである。(S D3649東側溝e)：D・E・F区で確認した。残存する幅は約1.6m、深さは約54cmである。

【西側溝】(S D3648西側溝a)：D・E・F区で確認した。残存する幅は1m以上、深さは約40cmである。埋土はΦ3～5mm程度の淡黄色細砂を微量含む黄灰色シルトである。(S D3648西側溝b)：D・E・F区で確認した。残存する幅は約48cm、深さは約16cmである。埋土はΦ2～3cmの黄色シルトを多量に含む黒褐色シルト(10YR3/1)である。(S D3648西側溝c)：D・E・F区で確認した。残存する幅は約20cm、深さは約14cmである。埋土は黄色シルト・炭化物を少量含む暗灰色シルトである。(S D3648西側溝d)：D・E・F区で確認した。残存する幅は1m以上、深さは約46cmである。埋土は淡黄色シルト・炭化物・酸化鉄を微量、灰白色火山灰の二次堆積ブロックを少量含む褐色シルト(10YR4/1)である。(S D3648西側溝e)：D・E・F区で確認した。残存する幅は2m以上、深さは約84cmである。埋土は上層が黒色粘質土・浅黄色細砂を含む褐色粘質土であり、下層が淡黄色シルト・炭化物を微量含む褐色シルトである。

【出土遺物】A期では、S D3649東側溝から土師器壺A類(第12図-7)が出土している。B期ではS D3649東側溝から須恵器台付甕(第12図-9)が出土している。D期ではS D3649東側溝から須恵系土器(第12図-8・10)、青磁瓶(第12図-10)が出土している。E期ではS D3649東側溝から須恵系土器(第12図-1・2)、呪文とみられる多文字「口」「勘」「當」「口」墨書のある須恵系土器(第12図-3)、青磁碗・瓶(第12図-4・5)、綠釉陶器皿(第12図-6)が、S D3648西側溝から須恵器瓶(第12図-11)、灰釉陶器壺(第12図-12)が出土している。

S X3654北2道路跡（第8・9・11図）

E区・F区・G区で確認した東西道路である。多賀城南面に広がる方格地割を構成する道路網のうち、東西大路から数えて北に2本目の東西道路（北2道路）である。今回調査で発見した東西総長は60m以上である。南北両脇に素掘りの北側溝S D3655・南側溝S D3656を持つ。本項記載の遺構規模はG区の成果に基づくものである。

【変遷】古い順にA→Cの3時期の変遷を確認した。両側溝の変遷を表す小文字アルファベットa～cは、道路の変遷を表す大文字アルファベットA～Cにそれぞれ対応する。

【路面】路面堆積土や構築土は確認していない。廃絶時の黒色粘土層（基本層第II層）が堆積していることから、本地点における北2道路は地山削り出しの路面と考えられる。

【北側溝】（S D3655北側溝a）：E・F・G区で確認した。残存する幅は約1.1m、深さは約36cmである。埋土は上層が均質な褐色（10YR4/1）シルト、下層がΦ 4～5mm程度の淡黄色シルトブロックを少量含む褐色（10YR4/1）シルトである。（S D3655北側溝b）：E・F・G区で確認した。残存する幅は約54cm、深さは約18cmである。埋土はΦ 3～4cm程度の浅黄色シルトブロックを多量に含む褐色（10YR4/1）シルトである。（S D3655北側溝c）：E・F・G区で確認した。残存する幅は約1.6m、深さ約42cmである。埋土は黒褐色（10YR3/1）粘土質である。

【南側溝】（S D3656南側溝a）：E・F・G区で確認した。残存する幅は約60cm、深さは約24cmである。埋土はΦ 4～5mm程度の淡黄色シルトブロックを少量含む褐色（10YR4/1）シルトである。（S D3656南側溝b）：E・F・G区で確認した。残存する幅は約2.7m、深さは約30cmである。埋土は上層が均質な褐色シルト（10YR4/1）、下層がΦ 3～4cm程度の浅黄色シルトブロックを多量に含む褐色（10YR4/1）シルトである。（S D3656南側溝c）：E・F・G区で確認した。残存する幅は約1.6m、深さは約42cmである。埋土は上層が黒褐色（10YR3/1）粘土質、下層が褐色（10YR4/1）シルトである。

【出土遺物】B期では、S D3656南側溝から土師器壺B類（第13図-6）、須恵器壺（第13図-7）が出土している。S D3655北側溝から多文字墨書きの須恵系土器（第13図-1）、土師器壺B類（第13図-2）、円鏡（第13図-3）、須恵器壺（第13図-4）、灰釉陶器壺（第13図-5）が、S D3656南側溝から灰釉陶器小瓶（第13図-8）、綠釉陶器壺（第13図-9）が出土している。

北2道路・西3道路交差点（第8・11図）

E区中央部でS X3647西3道路跡とS X3654北2道路跡の交差点部分を一部検出している。

面的な調査でないため道路構築時の北2道路と西3道路の新旧関係は不明であるが、西3道路C～E期、北2道路B・C期においては、北2道路南北側溝が貫通しており、東西優先の交差点が確認できる。道路の対応関係は、出土遺物や灰白色火山灰との層位関係等から、概ね北2道路A期～西3道路A～B期、北2道路B・C期～西3道路C～E期と考えられる。

(2) 溝跡

S D3650溝跡（第7・10・11図）

【調査状況・重複】C区西部からF区南端部で確認した東西方向の溝跡である。A～Dの4時期を確認しており、それぞれSD3649西3道路東側溝に接続する。S D3650A～D期は、概ね西3道路A～D期と対応する。

【形状・規模】D期は残存する幅約2m、深さは約42cmである。埋土は上層がΦ 2～3mm程度の浅黄色シルト、Φ 3～5mm程度の灰白色火山灰ブロックを少量含む褐色（10YR4/1）シルトである。下層がΦ 2

～3mm程度の浅黄色シルトブロック少量、Φ 3～5mm程度の灰白色火山灰ブロックを多量に含む黒褐色（10YR3/1）シルトである。C期は残存する幅約2.3m、深さは約60cmである。埋土はΦ 3～4mm程度の淡黄色細砂を少量含む暗灰黄色シルトである。B期は残存する幅約1.2m、深さは約52cmである。埋土はΦ 2～3cm程度の浅黄色シルトブロックを多量に含む黄灰色（2.5Y5/1）シルトである。A期は残存する幅約2.4m、深さ約50cmである。

【遺物】A期では「薬升」銅墨書き土師器壺（第15図-2）、須恵器壺G（第15図-3）、土師器壺A類（第15図-4）が出土している。D期では須恵器壺（第15図-5）、土師器高杯（高杯形香炉？第15図-6）が出土している。

S D3633溝跡（第6図）

【調査状況・重複】A区北端部で発見した東西方向の溝跡である。

【形状・規模】幅約1.2m、深さは約40cmである。壁の立ち上がりは緩やかである。方向はE-1°-Sである。

【埋土】単層の自然堆積層であり、埋土は黄灰色（2.5Y5/1）シルトである。

S D3634溝跡（第6・11図）

【調査状況・重複】A区東側で発見した南北方向の溝跡である。S B3629・S D3635と重複しており、いずれよりも新しい。

【形状・規模】幅約1.5m、深さは約48cmである。壁は急角度で立ち上がる。方向は南半部でN-12°-Eであるが、中央部で緩やかに蛇行して方向を変じ、北半部ではN-4°-E程度となる。

【埋土】1層は黄灰色（2.5Y5/1）シルトである。2層はΦ 2～3cm程度の浅黄色シルトブロックを少量含む黄灰色（2.5Y5/1）シルトである。

【遺物】土師器壺A類（第14図-1・8）、須恵器高台付壺（第14図-2）、須恵器壺（第14図-3～6）、須恵器水瓶（第14図-9）、手づくね土器（第14図-7）が出土している。

S D3635溝跡（第6・11図）

【調査状況・重複】A区中央やや北寄りで発見した東西方向の溝跡である。S B3626・S B3627・S D3634・S E3638Bと重複しており、いずれよりも古い。

【形状・規模】幅約1.5m、深さは約36cmである。方向はE-1°-Sである。本調査では約22mの長さを確認した。

【埋土】単層の自然堆積層であり、埋土は黄灰色（2.5Y5/1）シルトである。

【遺物】土師器壺A類（第13図-10・11）、須恵器壺（第13図-13・14）、須恵器蓋（第13図-16）が出土している。

S D3636溝跡（第6・7・11図）

【調査状況・重複】A区からB区にかけて発見した南北方向の溝跡である。S D3635・S B3624・S B3626と重複しており、前二者よりも新しく後者より古い。

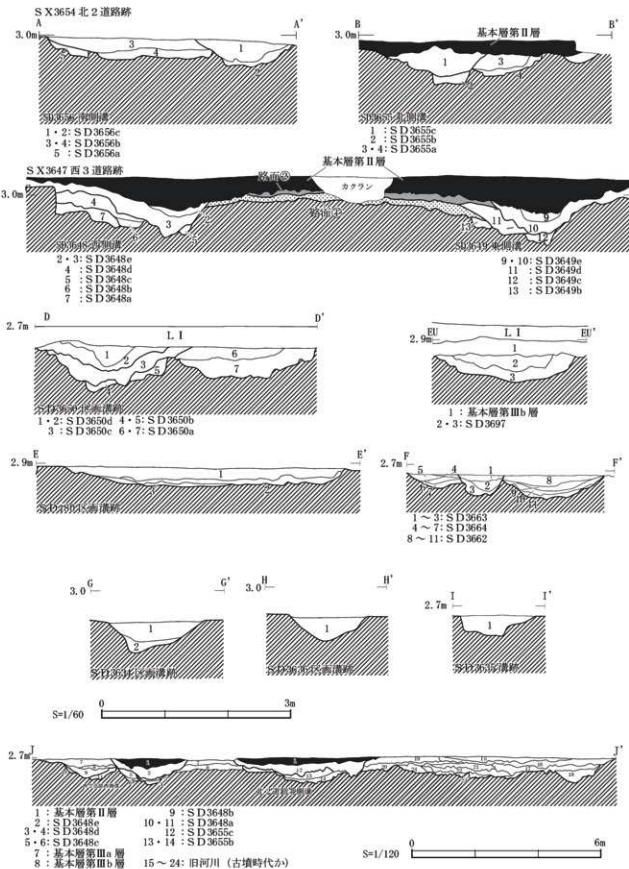
【形状・規模】幅約1.8m、深さは約48cmである。方向はN-0.5°-Eである。本調査では約30mの長さを確認した。

【埋土】単層の自然堆積層であり、埋土は黄灰色（2.5Y5/1）シルトである。

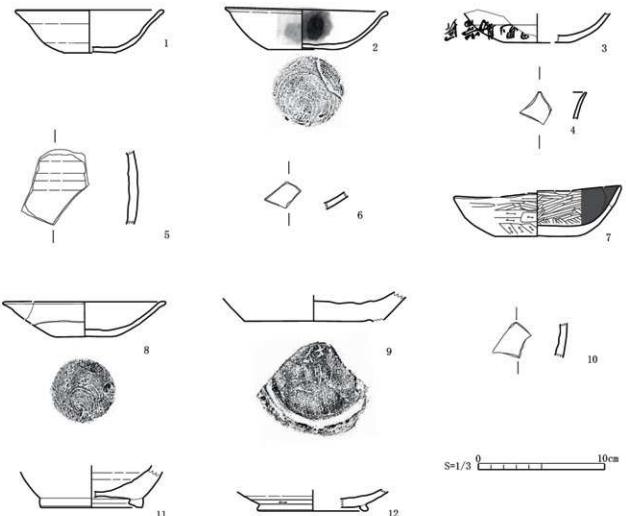
S D3691溝跡（第7図）

【調査状況・重複】B区南部で発見した東西方向の溝跡である。S B3658と重複しており、これより古い。

【形状・規模】方向はE-1°-Sである。

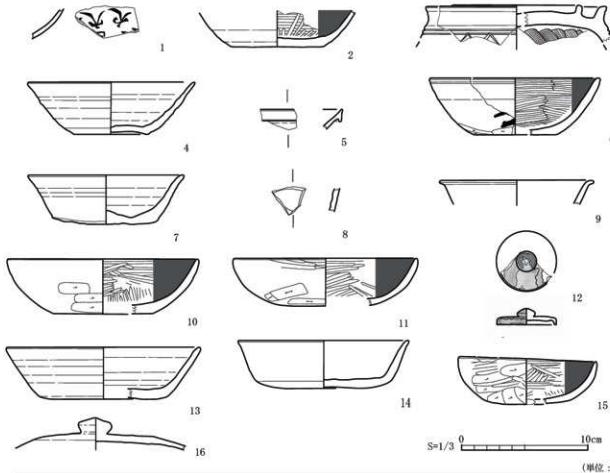


第11図 道路跡・区画溝断面図



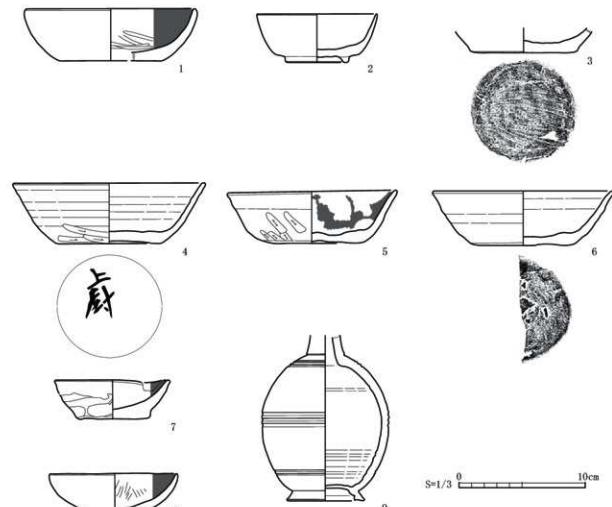
(単位: cm)										
No.	種類	遺構	層位	外 面	内 面	口径・残存高	底径・残存高	器高	壁厚骨	備考
1	須恵系土器 片	e	ロクロナデ 底: 回転水切	ロクロナデ		(11.8)・4/24	(4.2)・12/24	3.4	R403	内面に油焼あり
2	須恵系土器 片	e	ロクロナデ 底: 回転水切	ロクロナデ		(12.9)・15/24	5.6・24/24	3.2	R404	外面上に墨書き「□」、「路」 字、「口」、「机」1文字あり 外周部24-10
3	須恵系土器 片	e	ロクロナデ	ロクロナデ		—	(5.0)・6/24	2.3	R449	外面上に墨書き「□」、「路」 字、「口」、「机」1文字あり 外周部24-10
4	青磁 瓶	e				—	—	—	R454	外面上に墨書き「9-12」 内面に墨書き「9-12」
5	青磁 瓶	e	ロクロナデ	ロクロナデ		—	—	—	R456	外面上に墨書き「9-13」 内面に墨書き「9-13」
6	縫物陶器 片	e	ロクロナデ	ロクロナデ		—	—	—	R459	外面上に墨書き「9-3」 内面に墨書き「9-3」
7	土師器 片	a	ハラケヅリのちラミガ キ 底: ハラケヅリ	ハラケギキ、 黒色処理	(13.2)・22/24	6.5・24/24	4.0	R402	内面に輪絞りあり	
8	須恵系土器 片	d	ロクロナデ 底: 回転水切	ロクロナデ	(12.7)・5/24	5・24/24	2.8	R532	外周部23-15外面 に輪絞りあり	
9	須恵器 台付盤?	b	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	1.6	R452	高台内に墨書きあり	
10	青磁 瓶	d		ロクロナデ	長(2.7)	幅(0.6)	單(0.6)	R457	外面上に墨書き「9-14」 内面に墨書き「9-14」	
11	須恵器	e	ロクロナデ		—	(8.0)・11/24	3.3	R460	内面、高台内に墨 書きあり	
12	灰釉陶器 片?	e	ロクロナデ底: 回転ヘラ ケヅリのち高台黏付	ロクロナデ	—	(8.6)・4/24	1.7	R530		

第12図 S X3647 西3道路跡 出土遺物



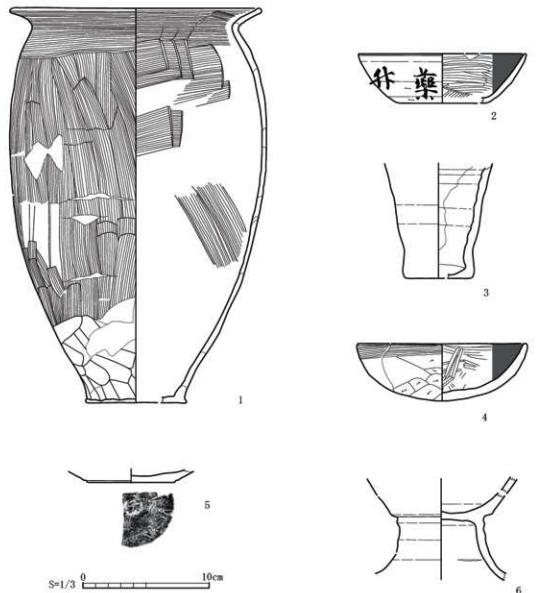
No.	後期	遺構	層位	外面	内面	口径・残存率	底径・残存率	器高	世紀	備考
1	栗毛系土器	c	SD3655	クロナデ	—	—	—	R542	外面に墨書き「火」?他3字真図版24-9	
2	土師器	c		クロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	—	(7.2)・15/24	R543	写真図版24-5	
3	円画鏡	c		クロナデ	ヘラミガキ	(14.2)・3/24	—	R544	外面に山形文・輪文	
4	土師器	c		クロナデ	ヘラミガキ	(13.1)・12/24	5.8・24/24	4.1	R488	
5	灰陶器 長脚瓶	c		—	—	—	R490	内面無地、外面無地		
6	土師器 环	b	SD3656	クロナデ(11.体)、手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.4)・6/24	(6.4)・9/24	R559	外面に墨書きあり	
7	須恵器	b		クロナデ	ヘラミガキ	(12.2)・8/24	(8.3)・19/24	3.9	R560	
8	須恵器 小壺	c		ヘラケズリ	—	—	R499	側面写真図版9-9 内面無地、外面無地		
9	須恵器 壺	c	SD3635	—	—	(12.0)・12/24	—	R547	側面写真図版9-2	
10	土師器	t		ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(15.2)・4/24	—7/24	4.4	R257	—
11	土師器 环	t		手持頭ヘラミガキ、体部 ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(14.4)・□/24	—	(3.7)	R258	—
12	須恵器 小壺	—	SD3697	—	—	(4.8)・8/24	—	1.3	R68	側面写真図版8
13	須恵器 环	l	SD3635	クロナデ	ヘラミガキ、手持ヘラケズリ	(15.2)・6/24	—7/24	4.1	R260	写真図版23-1
14	須恵器 环	l	—	クロナデ	ヘラミガキ、底:切り離し不明	(13.4)・10/24	(10.6)・12/24	3.8	R261	写真図版23-2
15	土師器	l	SD3697	ヘラケズリのちヘラミガ 基色処理	ヘラミガキ・黒色処理	10.9・20/24	6.8・24/24	3.6	R356	写真図版23-7
16	須恵器 环	l	SD3635	ロナデ	つまみ脚、最大径2.7	—	2.6	R262	写真図版23-3	

第13図 S D3654北2道路跡・SD3635・3697溝跡 出土遺物



No.	種類	遺構	層位	外面	内面	口径・残存率	底径・残存率	器高	世紀	備考
1	SD3634	土師器 环	1	底:切り離し不明、ヘラ ケズリ	ヘラミガキ、黒色 処理	(13.4)・2/24	(8.2)・6/24	4.1	R264	—
2		須恵器 高台付舟	1	ロカロナデ	底:高台付 舟	(9.4)・9/24	(5.0)・10/24	3.8	R269	—
3		須恵器 环	1	クロナデ	底:切り離 し不明、手持ちヘラケ ズリ	—	8.4・24/24	(2.0)	R270	—
4		須恵器 环	1	ロカロナデ、体下部半持 ちヘラケズリ	底:切り離し不明、手持 ちヘラケズリ	(15.2)・6/24	(8.2)・16/24	4.8	R273	外面部に墨書き
5		須恵器 环	1	ロカロナデ	底:墨書き	(13.3)・16/24	8.2・24/24	4.1	R274	内面に褐色の着物
6		須恵器 环	1	ロカロナデ	底:回転ヘ ラケズリ	(14.2)・4/24	(7.6)・11/24	4.3	R266	—
7		手捏ね土師器 环	1	手捏ね土師器 环	底:輪積み底 黒色処理	(9.0)・□/24	5.9・24/24	3.1	R263	写真図版23-4
8		土師器 环	1	ヘラミガキ、ヘラケズリ 処理	ヘラミガキ、黒色 処理	10.1・24/24	5.1・24/24	3.1	R354	写真図版23-6
9		須恵器 水瓶	1	ロカロナデ	自然釉	(3.0)・10/24	(6.2)・10/24	(13.0)	R355	側面写真図版10 外面上に沈没

第14図 S D3634出土遺物



第15図 S D 3664・3650出土遺物

No.	種類	遺構	部位	外観		内面	口径・残存半径径・残存高	器高	当社番号	備考
				1	2					
1	土師器	SD3664	1	ヨコナデ(口)、ヘラナデ(底)	ヘラナデ	19.6・24/24	(8.0)・3/24	31.3	R375	内面に輪積痕あり
2	土師器		A	ロクロナデ底:回転ヘラタヌリ	ロクロナデ・黑色	(13.2)・7/24	(7.0)・3/24	3.9	R374	内面全体に墨書き「舟」(圖)あり
3	須恵器		A	ロクロナデ底:回転底 切後ヘラタヌリ、周縁部	ロクロナデ	-	(4.7)・6/24	9.1	R376	内面に右回転ねじれあり
4	土師器	SD3650	A	ヨコナデ(口)、ヘラタヌリ	ヘラミガキ・黒色	(13.3)・3/24	(7.8)・9/24	4.5	R375	
5	須恵器		B	ロクロナデ底:回転ヘラ切のら手持ヘラタヌリ	ロクロナデ	-	(6.8)・7/24	(1.0)	R377	底面にヘラガキあり
6	土師器		D	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	8	R376	内面に黑色付着物

S D 3697溝跡 (第7・11図)

【調査状況・重複】B区南部で発見した東西方向の溝跡である。S B 3646と重複しており、これより古い。

【形状・規模】残存する幅は約1.5m、深さは約30cmである。方向はE-1.1° - Sである。

【埋土】単層の自然堆積層であり、埋土は淡黄色ブロックを少量含む黄灰色(2.5Y5/1)シルトである。

【遺物】二彩陶器小壺蓋(第13図-12)、土師器坏A類(第13図-15)が出土している。

S D 3662・3663・3665溝跡 (第7・11図)

【調査状況・重複】C区北東部で発見した溝跡である。S D 3663が最も新しく、S D 3662とS D 3664はこれに切られる。

【形状・規模】S D 3663は残存する幅が約66cm、深さは約30cmである。S D 3662は残存する幅が約78cm、深さは約24cmである。S D 3664は残存する幅が約1.6m、深さは約32cmである。

S D 180区画溝跡 (第5・11図)

【調査状況・重複】E・F・G区で確認した。多賀城I C建設に伴う山王遺跡八幡地区の調査で発見した奈良時代の区画溝S D 180の延長部分とみられる。砂押川に近付くにつれて浅くなり、E区・F区ではほとんど残存していないかった。

【遺物】出土していない。

(3) 捩立柱建物跡

同一地点での建て替えを含め、約40棟を確認した。柱痕跡を伴うピットで、組み合わせが不明なものもあり、本来の棟数はさらに多かったとみられる。

S B 3632樋立柱建物跡 (第16図)

【調査状況・重複】A区北端部で発見した東西2間、南北2間の純柱建物である。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長約4m、柱間寸法が北から1.7m・2.3mであり、北側柱列で総長3.1m、柱間寸法が西から1.7m・1.5mである。方向は東側柱列でN-3° - Eである。

【柱穴】柱は全て抜き取られている。

S B 3629樋立柱建物跡 (第17・33図)

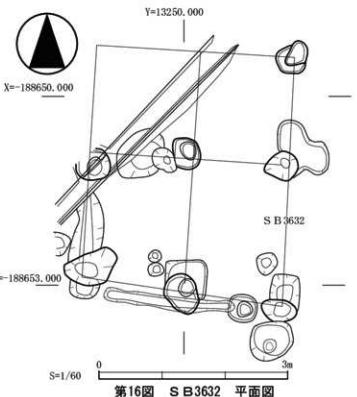
【調査状況・重複】A区北東部で発見した東西2間・南北4間の南北棟側柱建物で

ある。S B 3628・3630と重複しており、前者より新しく後者より古い。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長7.8m、柱間寸法が北から2.2m・1.8m・1.4m・2.4mであり、北側柱列で総長5.1m、柱間寸法が西から2.7m・2.4mである。方向は東側柱列でN-6° - Eである。

【柱穴】廃絶状況の分かる柱は全て抜き取られており、N 1 W 1で測ると、樋方直径は約78cm、柱の直径は約24cmである。

【遺物】土師器坏(A類)が出土している。



第16図 S B 3632 平面図

S B3630掘立柱建物跡（第17・34図）

【調査状況・重複】A区北東部壁面付近で発見した、東西2間以上、南北3間の側柱建物である。S B3631と重複しており、これより古い。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で総長6.2m、柱間寸法が北から2.1m・1.8m・2.3mであり、南側柱列で2.1mである。方向は東側柱列でN-1°-Eである。

S B3631掘立柱建物跡（第17図）

【調査状況・重複】A区北東部壁面付近で発見した、東西2間以上、南北2間の側柱建物である。S B3630と重複しており、これより新しい。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で総長4.4m、柱間寸法が北から2.0m・2.2m、柱間寸法が南側柱列で1.7mである。方向は東側柱列でN-0°-Eである。

S B3628掘立柱建物跡（第18・31図）

【調査状況・重複】A区東半部北側で発見した、東西2間、南北3間の南北棟側柱建物である。S B3629と重複しており、これより古い。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長4.9m、柱間寸法が北から1.4m・1.8m・1.7mであり、北側柱列で総長3.9m、柱間寸法が西から2.1m・1.8mである。方向は東側柱列でN-5°-Wである。

S B3627掘立柱建物跡（第19・32図）

【調査状況・重複】A区中央北寄りで発見した、東西2間、南北2間の総柱建物である。S D3635と重複しており、これより新しい。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長3.2m、柱間寸法が北から1.9m・1.3mであり、北側柱列で総長3.1m、柱間寸法が西から1.4m・1.7mである。方向は東側柱列でN-4°-Eである。

S B3626掘立柱建物跡（第19・31図）

【調査状況・重複】A区中央北壁付近で発見した、東西2間以上、南北2間の側柱建物である。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長2.7m、柱間寸法が北から1.4m・1.3mであり、南側柱列で総長2.8m以上、柱間寸法が西から1.4m・1.4mである。方向は東側柱列でN-0°-Eである。

【柱穴】いずれも切り取られており、南東隅では柱材が残存している。掘方直径は南東隅柱で約60cm、柱直径は南東隅柱で約20cmである。

S B3625掘立柱建物跡（第6図）

【調査状況・重複】A区中央南寄りで発見した東西2間、南北3間の南北棟側柱建物である。S B3624と重複しており、これより新しい。

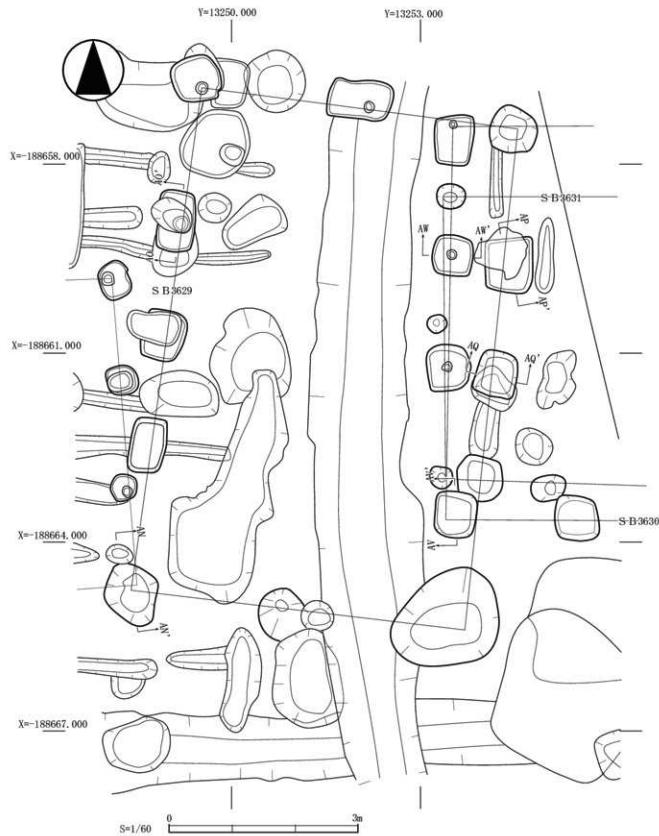
【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長4.6m、柱間寸法が北から1.5m、1.4m、1.2mであり、北側柱列で総長4.0m、柱間寸法が西から2.0m・2.0mである。方向は東側柱列でN-2°-Eである。

【柱穴】いずれも抜き取られており、N 1 E 1で測ると掘方直径は1.1m、柱直径は40cmである。

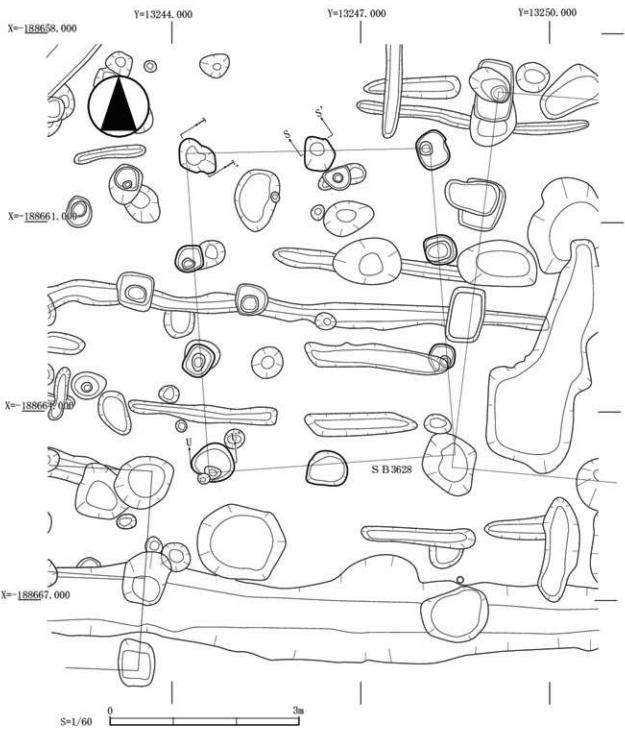
S B3624掘立柱建物跡（第20・31図）

【調査状況・重複】A区南半部で発見した東西4間、南北2間の東西棟側柱建物である。S X3623、S D3636、S B3625と重複しており、いずれよりも古い。

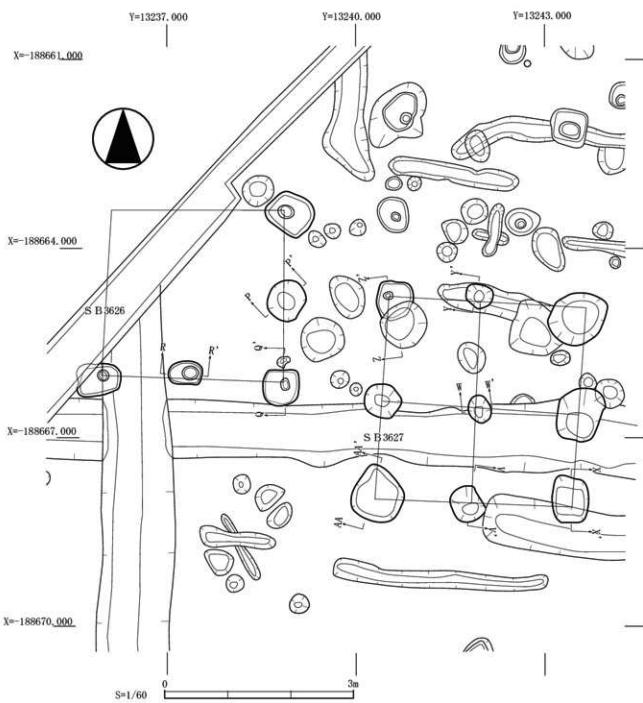
【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長6.3m、柱間寸法が北から3.1m・3.2mであり、南側柱列で総長12.5m、柱間寸法が西から3.2m・3.1m・3.0m・3.2mである。方向は東側柱列でN-5.7°-Eである。今回調査区で発見した掘立柱建物のうち最も大規模なものであり、推定床面積は約79m²である。



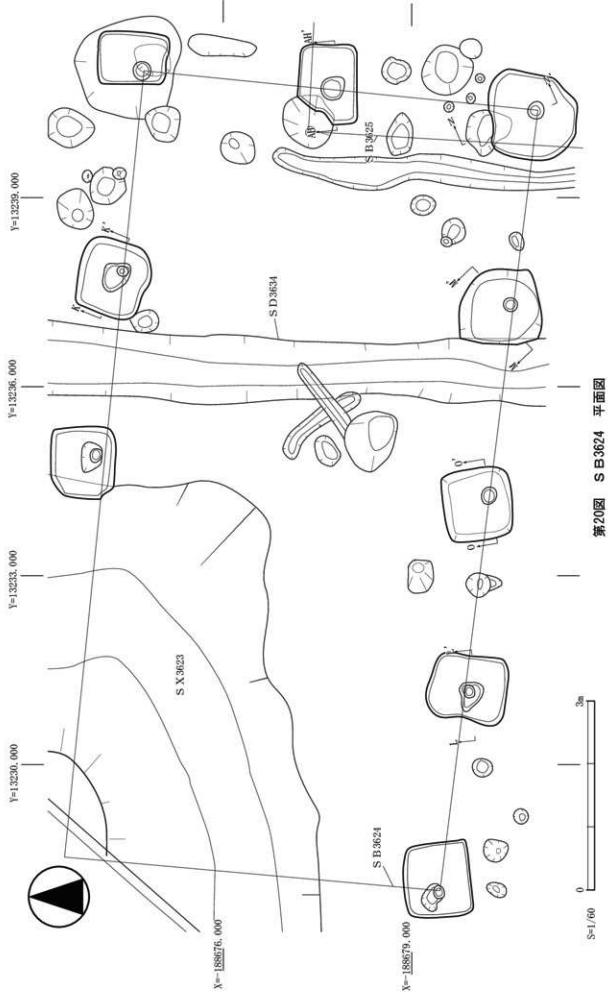
第17図 S B3629・3630・3631平面図



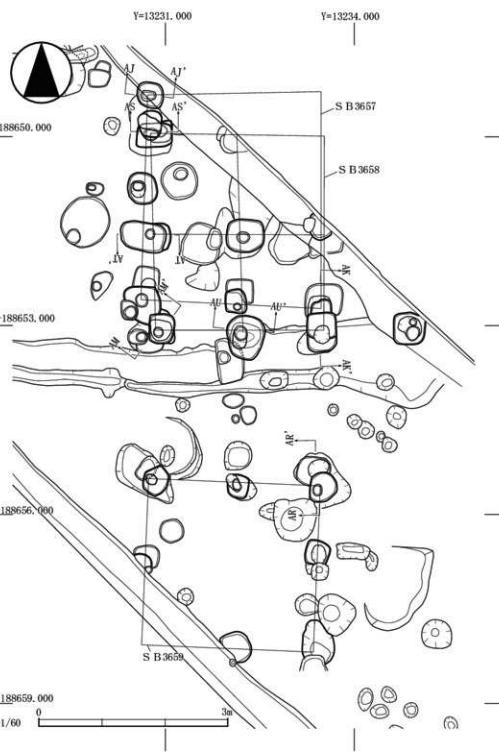
第18図 S B3628 平面図



第19図 S B3626・3627 平面図



第20図 S.B.3624 平面図



第21図 S.B.3657・3658・3659 平面図

【柱穴】いずれも取り取られており、掘方直径は北東隅柱で約1.1m、柱直径は北東隅柱で約27cmである。

S B3659掘立柱建物跡（第21・34図）

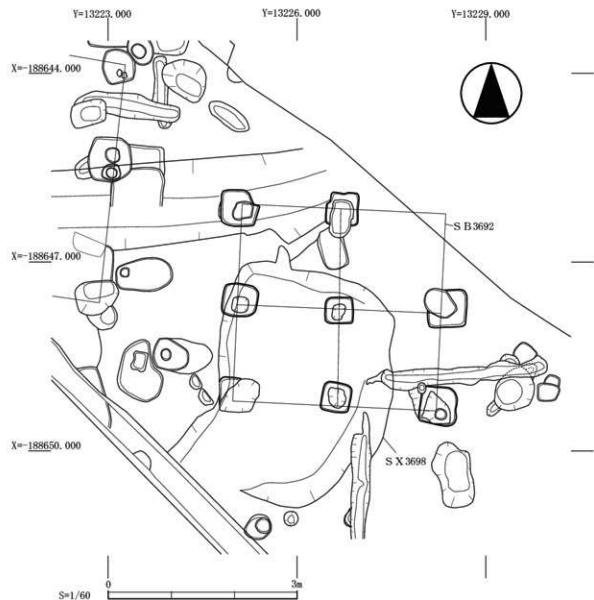
【調査状況・重複】B区南東部で発見した、東西2間、南北2間の側柱建物である。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長2.6m、柱間寸法が北から1.3m・1.3mであり、北側柱列で総長2.7m、柱間寸法が西から1.4m・1.3mである。方向は東側柱列でN-2.4°-Eである。

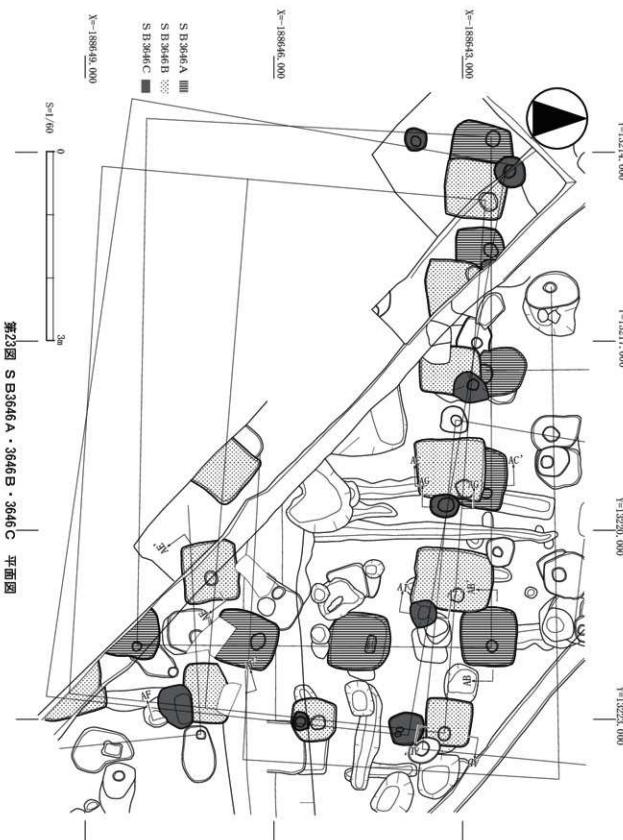
S B3657掘立柱建物跡（第21・33図）

【調査状況・重複】B区中央東寄りで発見した。北東部は調査区外であるが、東西2間、南北2間の総柱建物と推定される。S B3658と重複しており、これより古い。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で総長3.4m、柱間寸法が北から1.5m・1.9mであり、南側柱列で総長2.8m、柱間寸法が西から1.5m・1.3mである。方向は東側柱列でN-2°-Eである。



第22図 S B3692 平面図



S B3658掘立柱建物跡（第21・33図）

【調査状況・重複】E区中央東寄りで発見し、北東部は調査区外であるが、東西2間、南北2間の總柱建物と推定される。S B3657と重複しており、これより新しい。2時期（A→B）の変遷を確認した。

【形状・規模】B期の平面規模は西側柱列で総長2.7m、柱間寸法が北から1.6m・1.1mであり、南側柱列で総長2.7m、柱間寸法が西から1.5m・1.2mである。方向は西側柱列でN=0°-Eである。

S B3692掘立柱建物跡（第22図）

【調査状況・重複】S X3698と重複しており、これより古い。東西2間、南北2間と推定される。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で総長3.1m、柱間寸法が北から1.6m・1.5mであり、南側柱列で総長3.2m、柱間寸法が西から1.7m・1.5mである。方向は東側柱列でN=3°-Eである。

S B3646掘立柱建物跡（第23・32図）

【調査状況・重複】E区北端部で発見した東西棟側柱建物である。3時期（A→B→C）の変遷を確認した。A期は東西4間、南北3間以上であり、B期は東西5間、南北3間以上であり、C期は東西5間、南北2間以上である。このうちB期は南側に扉の付加が確認できる。

【形状・規模】A期の平面規模は東側柱列で総長5.5m、柱間寸法が北から1.9m・1.8m・1.8mであり、北側柱列で総長8m、柱間寸法が西から1.8m・1.5m・1.8m・2.4mである。方向は東側柱列でN=0.5°-Eである。B期の平面規模は東側柱列で総長6m程度、柱間寸法が北から2m・1.8m・2.2mであり、北側柱列で総長9.2m、柱間寸法が西から1.2m・1.8m・1.6m・1.6m・2.1mである。方向は東側柱列でN=4°-Eである。C期の平面規模は東側柱列で総長3.5m以上、柱間寸法が北から1.8m・1.7mであり、北側柱列で総長9.1m、柱間寸法が西から1.6m・1.8m・2.0m・1.8m・1.9mである。方向は東側柱列でN=6°-Eである。建物の主軸方位は新しくなるにつれて東に振れる傾向が認められる。

【柱穴】廃絶状況の分かれる柱のうち、B・C期は全て切り取られており、一部に柱材の残存が認められる。A期はN 1W 1で測ると、掘方直径約1m、柱の直径は約24cmである。B期はN 1W 1で測ると、掘方直径約90cm、柱の直径は約30cmである。C期はN 1W 1で測ると、掘方直径約48cm、柱の直径は約24cmである。柱穴はA・B期が方形で、C期は円形である。

【埋土】A期の埋土は灰白色火山灰を含まず地山ブロックを少量含む褐灰色シルトであるが、B期埋土はΦ3~4mm程度の灰白色火山灰ブロックを少量含んでいることから、A期建物存続中に灰白色火山灰が降下したものと考えられる。

S B3652掘立柱建物跡（第24図）

【調査状況・重複】C区中央部で発見した、東西3間以上、南北2間の東西棟側柱建物である。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で総長3.6m、柱間寸法が北から1.8m・1.8mであり、北側柱列で総長5.5m、柱間寸法が西から2m・1.8m・1.7mである。方向は西側柱列でN=2°-Eである。

【柱穴】柱は全て抜き取られている。

S B3653掘立柱建物跡（第25図）

【調査状況・重複】C区東端部で発見した南北2間、東西2間以上の側柱建物である。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で総長4.2m、柱間寸法が北から2.2m・2mであり、北側柱列で柱間寸法が2.2mである。方向は西側柱列でN=3°-Eである。

【埋土】掘土埋土に灰白色火山灰ブロックを少量含む。

S B3684掘立柱建物跡（第8図）

【調査状況・重複】E区中央部で発見した東西2間、南北2間の東西棟側柱建物である。S B3685・S I 3702と重複しており、前者より古く後者より新しい。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長3.8m、柱間寸法が北から1.8m・2.0mであり、北側柱列で総長4.7m、柱間寸法が西から2.1m・2.6mである。方向は東側柱列でN=7°-Eである。

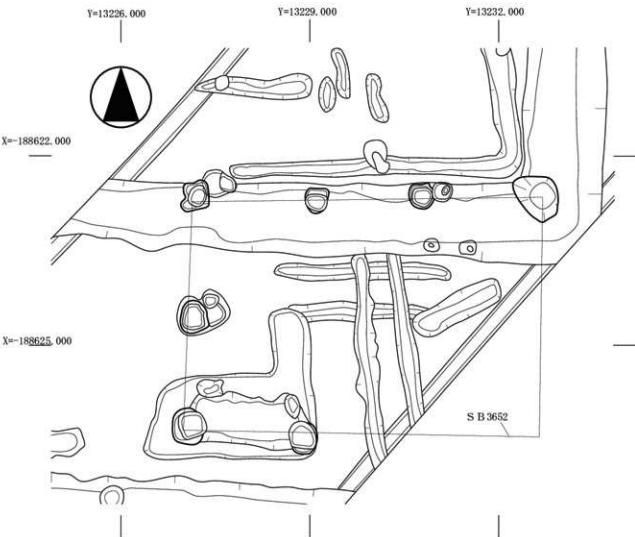
S B3685掘立柱建物跡（第8図）

【調査状況・重複】E区中央部で発見した東西2間以上、南北2間以上の側柱建物である。S B3684・S I 3702と重複しており、いずれよりも新しい。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長3m以上、柱間寸法が北から1.7m・1.3mであり、南側柱列で総長4m以上、柱間寸法が西から2.1m・1.9mである。方向は東側柱列でN=0°-Eである。

S B3686掘立柱建物跡（第8・35図）

【調査状況・重複】E区中央部で発見した東西2間以上、南北2間以上の側柱建物である。S B3687と重複しておりこれより古い。



第24図 S B3652 平面図

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長3.5m以上、柱間寸法が北から1.9m・1.6mであり、北側柱列で総長4.2m以上、柱間寸法が西から1.9m・2.3mである。方向は東側柱列でN-2.5°-Eである。

S B3687掘立柱建物跡（第8・35図）

【調査状況・重複】E区中央部で発見した掘立柱建物である。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長3.5m以上、柱間寸法が北から1.7m・1.8mであり、北側柱列で総長4.4m以上、柱間寸法が西から2.2m・2.2mである。方向は東側柱列でN-4°-Eである。

S B3688掘立柱建物跡（第27・35図）

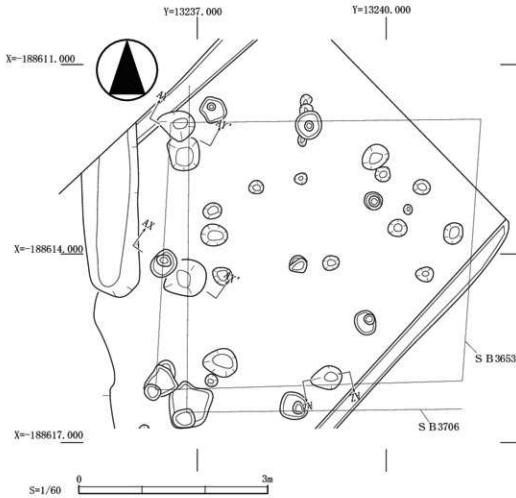
【調査状況・重複】E区南端部で発見した南北3間以上、東西4間以上の側柱建物であり、南廂付建物の可能性がある。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で廂部分を含めると総長7.6m以上、身舎部分は4.8mであり、柱間寸法が北から2.5m・2.4m・2.7mであり、南側柱列で総長8.9m以上、柱間寸法が西から2.1m・1.9m・2.1m・2.6mである。方向は西側柱列でN-3°-Eである。

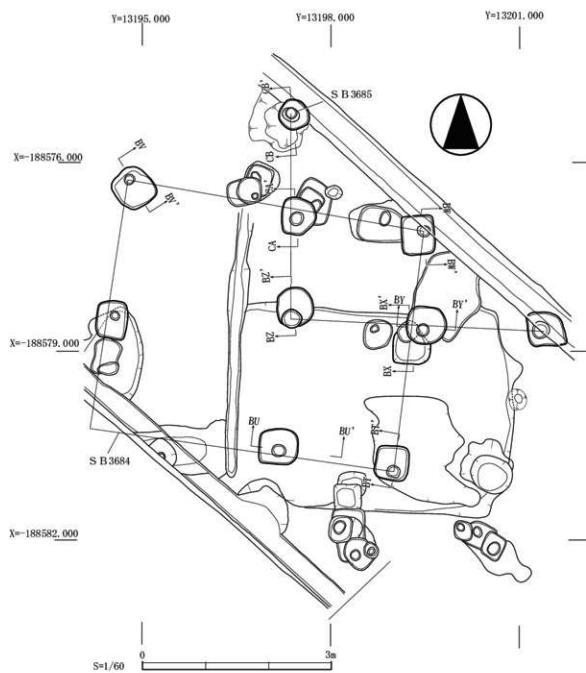
S B3689掘立柱建物跡（第28・37図）

【調査状況・重複】E区北部で発見した南北3間、東西2間の南北棟掘立柱建物であり、南妻は3間である。

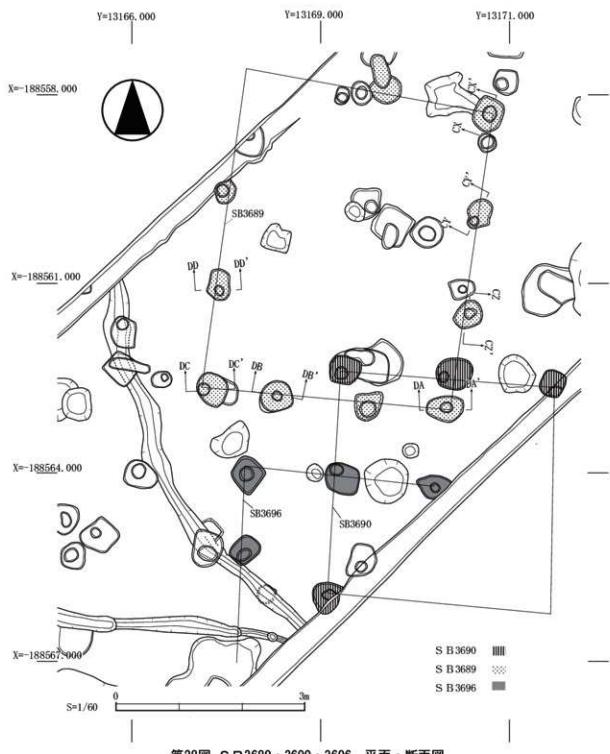
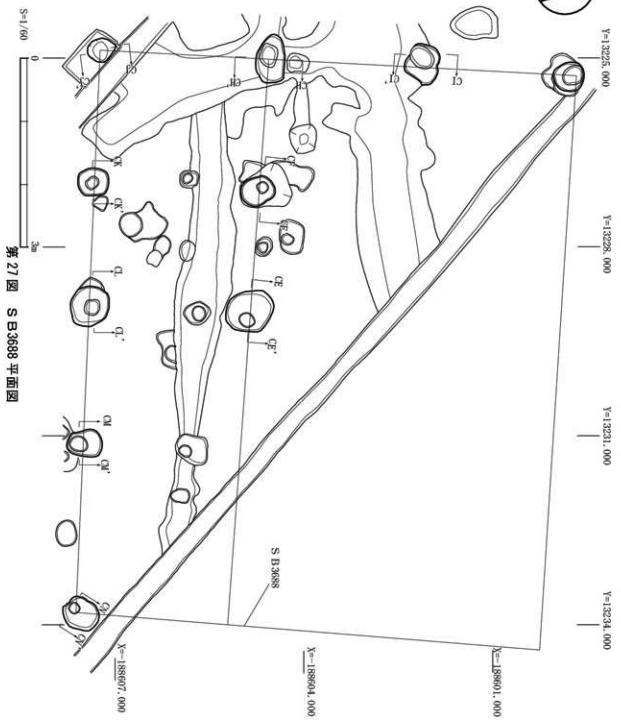
【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長4.8m、柱間寸法が北から1.8m・1.5m・1.5mであり、北側柱列で総長4m、柱間寸法が西から1.2m・1.5m・1.3mである。方向は東側柱列でN-8°-Eである。

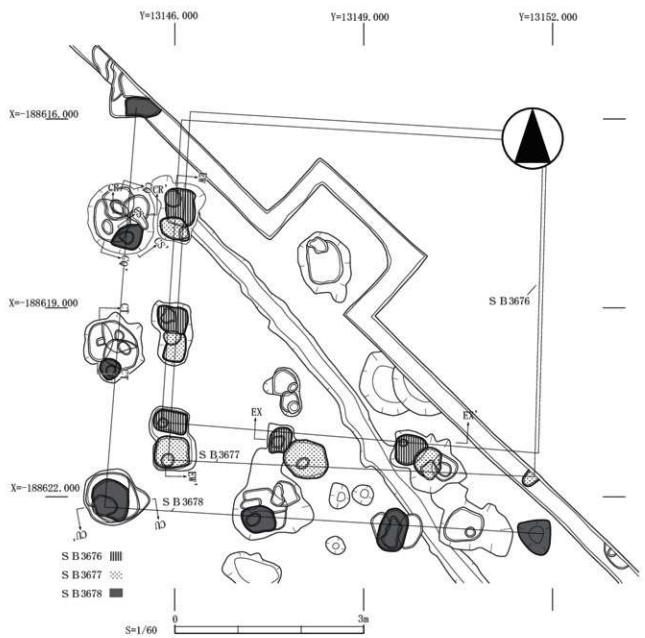


第25図 S B3653・3706 平面図

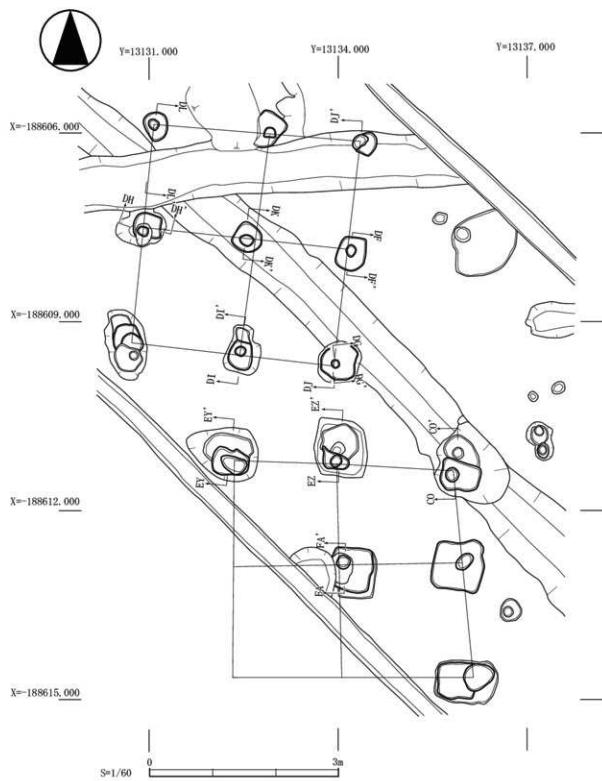


第26図 S B3684・3685 平面図

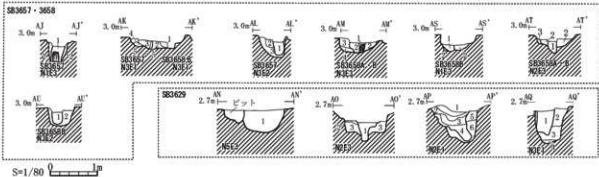




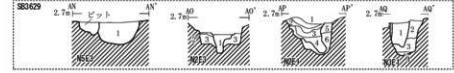
第29図 S B3676・3677・3678 平面図



第30図 S B3680・3681 平面図



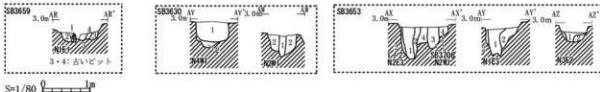
S=1/80



S=1/80

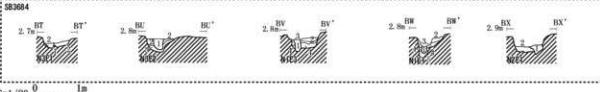
柱穴	層位	土色	土性	備考
SB3657 N1E3 (A1-A1')	1	0YR2/2	粘土	均質。柱取り穴。
	2	0YR2/2	粘質土	黄褐色砂質土を塊状に含む。解方理土。
SB3657 N2E3 SB3658 N2E3 (A2-A2')	1	0YR3/1	粘土	黄褐色シルト塊状に混入。SB3657柱取り穴。
	2	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。SB3658解方理土。
	3	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。SB3657柱取り穴。
	4	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。SB3657解方理土。
	5	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。SB3657解方理土。
SB3657 N3E2 (A1-A1')	1	0YR2/2	粘土	柱抜き取り穴。
	2	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。解方理土。
	3	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。解方理土。
SB3658 A-B N3E3 (A2-A2')	1	0YR2/2	粘土	柱抜き取り穴。
	2	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。解方理土。
	3	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。A面解方理土。
	4	0YR3/1	シルト	褐灰色シルト混入。B面解方理土。
SB3658 N1E3 (A3-A3')	1	0YR3/1	粘土	柱抜き取り穴。
	2	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。解方理土。
SB3658 A-B N2E3 (A2-A2')	1	0YR3/1	粘質土	黄褐色砂質土を塊状に含む。無機化微観。A面解方理土。
	2	0YR3/1	粘質土	黄褐色砂質土を多量に含む。含有的な炭酸化鉄。B面解方理土。
SB3658B N2E2 (A1-A1')	1	0YR2/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。柱抜き取り穴。
	2	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。柱抜き取り穴。
SB3629 N2E3 (A3-A3')	1	0YR3/1	粘土	柱抜き取り穴。
	2	0YR3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。解方理土。
SB3629 N3E2 (A2-A2')	1	0YR3/1	粘質土	黄褐色砂質土を塊状に含む。無機化微観。A面柱抜き取り穴。
	2	0YR3/1	粘質土	黄褐色砂質土を多量に含む。含有的な炭酸化鉄。B面柱抜き取り穴。
SB3629 N2E3 (A2-A2')	1	2. ST3/1	シルト	柱抜き取り穴。◆2~3m程度の洪黄色細砂微粒含む。縫まり弱。柱抜き取り穴。
	2	0YR3/1	粘質土	黄褐色砂質土を塊状に含む。柱抜き取り穴。
	3	2. ST3/1	シルト	柱抜き取り穴。◆2~3m程度の洪黄色細砂微粒含む。縫まり弱。柱抜き取り穴。
	4	0YR3/1	粘質土	黄褐色砂質土を塊状に含む。柱抜き取り穴。
	5	2. ST3/1	シルト	柱抜き取り穴。◆2~3m程度の洪黄色細砂微粒含む。縫まり弱。柱抜き取り穴。
SB3629 N3E2 (A2-A2')	6	0YR3/1	シルト	柱抜き取り穴。縫まり弱。
	7	2. ST3/1	シルト	柱抜き取り穴。◆2~3m程度の洪黄色細砂微粒含む。縫まり弱。柱抜き取り穴。
	8	0YR3/1	粘質土	柱抜き取り穴。縫まり弱。
	9	2. ST3/1	シルト	柱抜き取り穴。◆2~3m程度の洪黄色細砂微粒含む。縫まり弱。柱抜き取り穴。
	10	0YR3/1	粘質土	柱抜き取り穴。縫まり弱。

第34図 挖立柱建物跡 断面図（3）



S=1/80

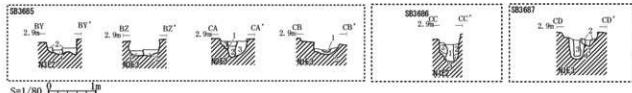
柱穴	層位	土色	土性	備考
SB3659 N1E3 (A2-A2')	1	10Y2/1	粘土	炭酸物少量含む。
	2	10Y4/1	粘質土	黄褐色シルト少量含む。
SB3659 N2E3 (A2-A2')	1	2. ST3/1	シルト	柱抜き取り穴。Φ2~3m程度の洪黄色細砂微粒含む。縫まり弱。
	2	2. ST3/1	シルト	解方理土。縫まり弱。
SB3630 N2E1 (A2-A2')	1	2. ST3/1	シルト	柱抜き取り穴。Φ2~3m程度の洪黄色細砂微粒含む。縫まり弱。
	2	2. ST3/1	シルト	解方理土。縫まり弱。
SB3706 N2E1 (A2-A2')	1	10Y3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。SB3653 柱抜き取り穴。
	2	10Y4/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。解方理土。
SB3653 N1E3 (A2-A2')	1	10Y3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。柱抜き取り穴。
	2	10Y4/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。解方理土。



S=1/80

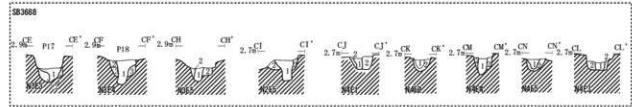
柱穴	層位	土色	土性	備考
SB3684 N2E1 (B1-B1')	1	10Y3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。柱抜き取り穴。
	2	10Y4/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。解方理土。
SB3684 N2E2 (B1-B1')	1	10Y3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。柱抜き取り穴。
	2	10Y4/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。解方理土。
SB3684 N1E3 (B2-B2')	1	2. ST3/1	シルト	柱抜き取り穴。縫まり弱。
	2	2. ST3/1	シルト	解方理土。縫まり弱。
SB3684 N2E3 (B2-B2')	3	10Y3/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。解方理土。
	4	2. ST3/1	シルト	解方理土。縫まり弱。
	5	10Y3/1	粘質土	黄褐色シルト塊状に混入。柱抜き取り穴。
	6	10Y4/1	粘質土	黄褐色シルト多量に混入。解方理土。
	7	10Y4/1	粘質土	柱抜き取り穴。
SB3684 N3E1 (B2-B2')	8	2. ST3/1	シルト	柱抜き取り穴。縫まり弱。
	9	10Y4/1	粘質土	柱抜き取り穴。縫まり弱。
SB3684 N2E1 (B3-B3')	10	10Y2/1	粘質土	柱抜き取り穴。縫まり弱。
	11	10Y3/1	粘質土	柱抜き取り穴。縫まり弱。

第34図 挖立柱建物跡 断面図（4）



S=1/80

柱穴	層位	土色	土性	備考
SK3665 N32 (BY-BY')	1	10VR3/2	粘土	黄褐色シルト層中に少量投入。炭化物少含む。柱抜取り穴。
	2	10VR3/2	粘土	黄褐色シルト層中に多量投入。炭化物少含む。解方理土。
SK3665 N33 (BZ-BZ')	1	10VR3/2	粘土	黄褐色シルト層中に少量投入。炭化物少含む。解方理土。
	2	10VR3/2	粘土	黄褐色シルト層中に多量投入。炭化物少含む。無方理土。
SK3665 N23 (CA-CA')	1	10VR3/1	シルト	炭化物多量投入。柱抜取り穴。
	2	10VR3/2	粘土	黄褐色シルト層中に少量投入。炭化物少含む。柱抜取り穴。
	3	10VR3/2	粘土	黄褐色シルト層中に多量投入。炭化物少含む。解方理土。
SK3665 N43 (EW-EW')	1	10VR3/2	粘土	黄褐色シルト層中に少量投入。炭化物少含む。解方理土。
	2	10VR3/2	粘土	黄褐色シルト層中に多量投入。炭化物少含む。解方理土。
SK3666 N12 (CC-CC')	1	10VR3/1	粘質土	白頭灰。
	2	10VR3/1	粘質土	黄褐色シルト層中に少量投入。炭化物少含む。解方理土。
	3	10VR3/2	粘質土	黄褐色シルト層中に多量投入。炭化物少含む。解方理土。
SK3667 N13 (CD-CD')	1	10VR3/2	粘質土	新しいビットの掘削跡。
	2	10VR3/2	粘質土	新しいビットの掘削跡。
	3	10VR3/1	粘土	SK3667柱直面。
	4	10VR3/2	粘質土	黄褐色シルト層中に多量投入。SK3667解方理土。



S=1/80

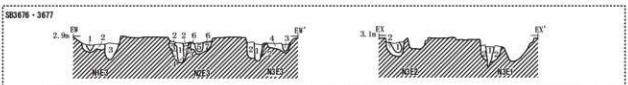
柱穴	層位	土色	土性	備考
SK3668 N33 (CF-CF')	1	10VE1/1	シルト	◆2m程度の黄褐色シルトブロック少含む。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	シルト	◆1m程度の黄褐色シルトブロック多量に含む。解方理土。
SK3668 N24 (CF-CF')	1	10VE1/1	シルト	◆2m程度の黄褐色シルトブロック少含む。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	シルト	◆1m程度の黄褐色シルトブロック多量に含む。解方理土。
SK3668 N25 (CH-CH')	1	10VE1/2	粘質土	黄褐色シルト層中に少量投入。解方理土。
	2	10VE1/1	粘質土	黄褐色シルト層中に多量投入。解方理土。
SK3668 N25 (CI-CI')	1	10VE1/1	粘質土	黄褐色シルト層中に少量投入。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	粘質土	黄褐色シルト層中に多量投入。柱抜取り穴。
SK3668 N43 (CJ-CJ')	1	10VE1/1	粘質土	黄褐色シルト層中に少量投入。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	粘質土	黄褐色シルト層中に多量投入。柱抜取り穴。
SK3668 N42 (CK-CK')	1	10VE1/1	シルト	◆2m程度の黄褐色シルトブロック少含む。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	シルト	◆1m程度の黄褐色シルトブロック多量に含む。解方理土。
SK3668 N44 (OF-OF')	1	10VE1/1	粘質土	黄褐色シルト層中に少量投入。解方理土。
	2	10VE1/1	粘質土	黄褐色シルト層中に多量投入。解方理土。
SK3668 N45 (EN-EN')	1	10VE1/1	シルト	炭化物多量多く混入。柱抜取り穴。
	2	10VE1/4	粘質土	黒褐色シルト層中に少量投入。炭化物少含む。解方理土。
SK3668 N43 (OL-OL')	1	10VE1/1	シルト	炭化物多量多く混入。柱抜取り穴。
	2	10VE1/4	粘質土	黒褐色シルト層中に少量投入。炭化物少含む。解方理土。

第35図 振立柱建物跡 断面図(5)



S=1/80

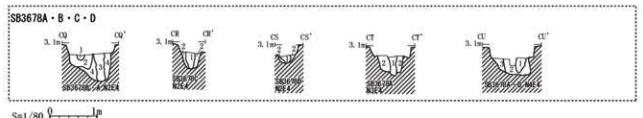
柱穴	層位	土色	土性	備考
SK3675 N31 (E1-E1' 左)	1	10VE1/1	粘質土	◆1~2m程度の黄褐色細砂多含む。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	シルト	縫まり強。解方理土。
SK3675 N31 (E1-E1' 右)	3	10VE1/1	シルト	◆2m程度の黄褐色シルト少含む。解方理土。
	1	10VE1/1	粘質土	◆1~2m程度の黄褐色細砂多含む。柱抜取り穴。
SK3675 N31 (E2-E2' 左)	2	10VE1/1	シルト	縫まり強。解方理土。
	3	10VE1/1	シルト	◆2m程度の黄褐色シルト少含む。解方理土。
SK3675 N31 (E2-E2' 右)	1	10VE1/1	粘質土	◆1~2m程度の黄褐色細砂多含む。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	シルト	縫まり強。解方理土。
SK3675 N12 (EV-EV 中央左側)	1	10VE1/1	粘質土	◆1~2m程度の黄褐色細砂多含む。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	シルト	縫まり強。解方理土。
SK3675 N12 (EV-EV 中央右側)	3	10VE1/1	シルト	◆2m程度の黄褐色シルト少含む。解方理土。
	1	10VE1/1	粘質土	◆1~2m程度の黄褐色細砂多含む。柱抜取り穴。
SK3675 N12 (EV-EV 右)	2	10VE1/1	シルト	縫まり強。解方理土。
	3	10VE1/1	シルト	◆2m程度の黄褐色シルト少含む。解方理土。



S=1/80

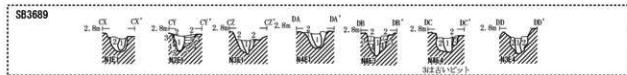
柱穴	層位	土色	土性	備考
SK3676 - 3677 N33 (EV-EV' 左)	1	10VE1/1	シルト	◆1~2m程度の黄褐色細砂少少含む。縫まり強。SK3676柱抜取り穴。
	2	10VS/3	シルト	◆3~4m程度の褐灰色シルトブロック多量に含む。SK3677解方理土。
SK3676 - 3677 N33 (EV-EV' 右)	3	10VE1/1	シルト	◆1~2m程度の黄褐色シルトブロックを多量に含む。縫まり強。SK3677解方理土。
	1	10VE1/1	シルト	◆2~3m程度の黄褐色細砂少含む。SK3676柱抜取り穴。
SK3676 - 3677 N33 (EV-EV' 中央)	2	10VS/3	シルト	SK3676解方理土。
	3	10VE1/1	シルト	SK3676解方理土。
SK3676 - 3677 N33 (EV-EV' 右)	4	10VS/3	シルト	SK3676解方理土。
	5	10VE1/1	シルト	◆1~2m程度の黄褐色細砂少含む。縫まり強。SK3677柱抜取り穴。
SK3676 - 3677 N33 (EV-EV' 左)	6	10VE1/3	シルト	◆3~4m程度の褐灰色シルトブロック多量に含む。SK3676解方理土。
	7	10VS/3	シルト	SK3676解方理土。
SK3676 - 3677 N33 (EV-EV' 右)	1	10VE1/1	粘質土	◆1~2m程度の黄褐色細砂多含む。SK3676柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	シルト	◆6m程度の(?)黄褐色シルトブロック多量に含む。SK3677解方理土。
SK3676 N31 (EV-EV' 左)	3	10VE1/1	粘質土	◆2~3m程度の黄褐色細砂少含む。SK3676柱抜取り穴。
	4	10VE1/1	シルト	SK3676解方理土。
SK3676 N32 (EV-EV' 右)	1	10VE1/1	シルト	◆1~2m程度の黄褐色細砂多含む。縫まり弱。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	シルト	◆4~5m程度の黄褐色シルトブロックを多量に含む。縫まり強。解方理土。
SK3676 N33 (EV-EV' 右)	1	10VE1/1	シルト	◆2~3m程度の黄褐色細砂多含む。柱抜取り穴。
	2	10VE1/1	シルト	◆4~5m程度の黄褐色シルトブロックを多量に含む。縫まり強。解方理土。

第36図 振立柱建物跡 断面図(6)



S=1/80

柱穴	層位	土色	土性	備考
SB3678B・A N24a (Cg-Cf')	1	10YR15/1	シルト	◆1~2mm程度の淡黄色細砂微混含す。締まり強、D層に抜取り穴。
	2	10YR14/1	シルト	◆4~5mm程度の淡黄色シルトブロックを少量含む。締まり強、D層幅に埋土。
	3	10YR13/1	粘板岩	◆1~2mm程度の淡黄色細砂微混含す。A層に抜取り穴。
	4	10YR14/1	シルト	締まり強、A層幅に埋土。
SB3678C N24b (Cf'-Cf'')	1	10YR13/1	粘板岩	◆1~2mm程度の淡黄色細砂微混含す。C層幅に抜取り穴。
	2	10YR14/1	シルト	締まり強、C層幅に埋土。
SB3678D N24b (Cs'-Cs'')	1	10YR15/1	シルト	◆1~2mm程度の淡黄色細砂微混含す。締まり弱、D層に抜取り穴。
	2	10YR14/1	シルト	◆4~5mm程度の淡黄色シルトブロックを少量含む。締まり強、D層幅に埋土。
SB3678E N34f (Ct'-Ct'')	1	10YR13/1	粘板岩	◆1~2mm程度の淡黄色細砂微混含す。A層に抜取り穴。
	2	10YR14/1	シルト	締まり強、A層幅に埋土。
SB3678A・D N44d (Cl'-Cl'')	1	10YR15/1	シルト	◆1~2mm程度の淡黄色細砂微混含す。締まり弱、D層に抜取り穴。
	2	10YR14/1	シルト	◆4~5mm程度の淡黄色シルトブロックを少量含む。締まり強、D層幅に埋土。
	3	10YR14/1	シルト	締まり強、A層幅に埋土。



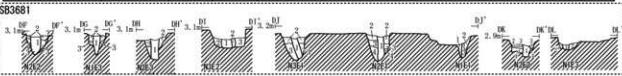
$$S=1/80 \quad 0 \quad 1m$$

柱式	層位	土色	土性	参考
SB3689 N1E1 (C3-C4)	1	01W1/1	シロト	※1~2mm程度の淡黄色細粒微混含む。緑より白。粗粒状り。
	2	01W1/1	シロト	※4~5mm程度の淡黄色シントロッカを少量含む。緑より強。縮力強。
SB3689 N2E1 (C1-C1')	1	01W1/1	シロト	柱抜けり。
	2	01W1/1	シロト	※3~4mm程度の淡黄色シントロッカを少含む。緑より強。
	3	01W1/1	シロト	固化物少含む。緑より強。
	4	01W1/1	シロト	※3~4mm程度の淡黄色シントロッカを少含む。緑より強。
	5	01W1/1	シロト	※4~5mm程度の淡黄色シントロッカを少含む。緑より強。縮力強。
SB3689 N3E1 (C2-C2')	1	01W1/1	シロト	※1~2mm程度の淡黄色細粒微混含む。緑より白。柱抜けり。
	2	01W1/1	シロト	※4~5mm程度の淡黄色シントロッカを少含む。緑より強。縮力強。
SB3689 N4E1 (D4-D4')	1	01W1/1	シロト	※1~2mm程度の淡黄色細粒微混含む。緑より白。粗粒状り。
	2	01W1/1	シロト	柱抜けり。
SB3689 N4E3 (D8-D8')	1	01W1/1	シロト	柱抜けり。
	2	01W1/1	シロト	※3~4mm程度の淡黄色シントロッカを少含む。緑より白。
	3	01W1/1	シロト	固化物少含む。緑より強。
	4	01W1/1	シロト	※3~4mm程度の淡黄色シントロッカを少含む。緑より強。
SB3689 N4E4 (D8-D8')	1	01W1/1	シロト	※1~2mm程度の淡黄色細粒微混含む。緑より白。粗粒状り。
	2	01W1/1	シロト	※4~5mm程度の淡黄色シントロッカを少含む。緑より強。縮力強。
SB3689 N4E6 (D9-D9')	1	01W1/1	シロト	※1~2mm程度の淡黄色細粒微混含む。緑より白。柱抜けり。
	2	01W1/1	シロト	※4~5mm程度の淡黄色シントロッカを少含む。緑より強。縮力強。

第37図 掘立柱建物跡 断面図(7)



柱名	部位	土色	土性	備考
SB3680 N1E3 (Y1-E1')	1	10YR1/3	シロト	※2~3m程度の淡黄色シルト/プロック含む。柱径抜取り穴。
	2	10YR4/3	シロト	均質、硬さり、HRM強度上。
	3	10YR4/7	シロト	※3m~10m程度の淡黄色細砂岩中に少量含む。柱径弱め。A層幅方限上。
SB3680 M1E2 (Z2-E2')	1	10YR1/3	シロト	※2~3m程度の淡黄色シルト/プロック含む。A層幅方限上。
	2	10YR1/3	シロト	※2~3m程度の淡黄色シルト/プロック含む。A層幅方限上。
	3	10YR1/4	シロト	※3m~10m程度の淡黄色細砂岩中に少量含む。柱径弱め。A層幅方限上。
	4	10YR1/4	シロト	均質、硬さり、A層幅方限上。
SB3680 N2E2 (Y1-E1')	1	10YR3/3	シロト	※2~3m程度の淡黄色シルト/プロック含む。柱径抜取り穴。
	2	10YR4/3	シロト	均質、硬さり、HRM強度上。
	3	10YR4/1	シロト	※3m~10m程度の淡黄色細砂岩中に少量含む。柱径弱め。A層幅方限上。
SB3680A S-1E1 (D1-E1')	1	10YR1/3	シロト	※2~3m程度の淡黄色シルト/プロック含む。柱径抜取り穴。
	2	10YR1/4	シロト	均質、硬さり、HRM強度上。
	3	10YR1/3	シロト	※2~3m程度の淡黄色シルト/プロック含む。柱径抜取り穴。
	4	10YR1/4	シロト	※3m~10m程度の淡黄色細砂岩中に少量含む。柱径弱め。A層幅方限上。



$s = 1/80$

柱穴	層位	土色	土性	備考
SB0881 N2E2 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	②~3mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	2	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
	3	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。細まり少。履力埋土。
SB0881 N3E3 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	②~3mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	2	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
	3	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
SB0881 N2E3 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	②~3mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	2	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	3	10R9/1	シルト	②~3mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
SB0881 N3E2 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
	2	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
	3	10R9/1	シルト	古いビック。
SB0881 N3E1 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	②~3mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	2	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
	3	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
SB0881 N2E1 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	②~3mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	2	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。履力埋土。
	3	10R9/1	シルト	履力埋土。
SB0881 N3E1 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	②~3mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	2	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。履力埋土。
	3	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
SB0881 N2E2 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
	2	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。履力埋土。
	3	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
SB0881 N3E3 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	②~3mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	2	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。履力埋土。
	3	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
SB0881 N2E1 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	③~6mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	2	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
	3	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
SB0881 N3E1 (H'-H')	1	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。
	2	10R9/1	シルト	②~3mm程度の浅黄色シルトブロック少含む。柱抜け穴。
	3	10R9/1	シルト	均質、細まり少、履力埋土。

第38図 掘立柱建物跡 断面図(8)

S B3690掘立柱建物跡（第28図）

【調査状況・重複】E区北部で発見した東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物である。S B3689・S B3696と重複するが、新旧関係は不明である。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で総長3.9m以上、北側柱列で総長3.4m以上、柱間寸法が西から1.7m・1.7mである。方向は西側柱列でN-4°-Eである。

S B3673掘立柱建物跡（第9図）

【調査状況・重複】F区北部で発見した南北1間以上、東西1間以上の側柱建物である。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で2.2m以上、南側柱列で2.2m以上である。方向は東側柱列でN-7°-Eである。

S B3672掘立柱建物跡（第9図）

【調査状況・重複】F区北部で発見した東西2間、南北2間の掘立柱建物である。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長4.6m、柱間寸法が北から2.3m・2.3mであり、北側柱列で総長4.0m、柱間寸法が西から1.8m・2.2mである。方向は東側柱列でN-6°-Eである。

S B3679掘立柱建物跡（第9図）

【調査状況・重複】G区北部で発見した南北3間以上、東西2間以上の掘立柱建物である。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長4.7m、柱間寸法が北から1.6m・1.6m・1.5mであり、北側柱列で総長2.5m以上である。方向は西側柱列でN-6°-Eである。

S B3680掘立柱建物跡（第30・38図）

【調査状況・重複】G区北部で発見した総柱建物である。2時期（A→B）の変遷を確認した。

【形状・規模】B期の平面規模は東側柱列で総長3.4m、柱間寸法が北から1.5m・1.9mであり、北側柱列で総長3.4m、柱間寸法が西から1.6m・1.8mである。方向は東側柱列でN-1°-Wである。

S B3681掘立柱建物跡（第30・38図）

【調査状況・重複】G区北部で発見した総柱建物である。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長3.6m、柱間寸法が北から1.7m・1.9mであり、北側柱列で総長3.3m、柱間寸法が西から1.8m・1.5mである。方向は東側柱列でN-6°-Eである。

S B3676掘立柱建物跡（第29・36図）

【調査状況・重複】G区中央やや北寄りで発見した南北2間以上、東西2間以上の掘立柱建物である。

【形状・規模】平面規模は西側柱列で総長4m以上、柱間寸法が北から2.2m・1.8mであり、南側柱列で総長4.2m以上、柱間寸法が西から2.2m・2mである。方向は西側柱列でN-3°-Eである。

S B3677掘立柱建物跡（第29・36図）

【調査状況・重複】G区中央やや北寄りで発見した南北2間以上、東西3間以上の掘立柱建物である。4時期（A→B→C→D）の変遷を確認した。

【形状・規模】D期の平面規模は西側柱列で総長6.9m以上、柱間寸法が北から2.0m・2.2m・2.7mであり、南側柱列で総長6.8m以上、柱間寸法が西から2.3m・2.2m・2.3mである。方向は西側柱列でN-2°-Eである。

Eである。

S B3675掘立柱建物跡（第10・36図）

【調査状況・重複】G区中央やや北寄りで発見した東西3間以上、南北2間以上の側柱建物である。

【形状・規模】平面規模は東側柱列で総長4.4m以上、柱間寸法が北から2.1m・2.3mであり、北側柱列で総長5.2m以上、柱間寸法が西から2.0m・1.4m・1.8mである。方向はほぼ正方である。

(4) 壁穴建物跡

S I 3637（第6図）

【調査状況・重複】A区西南部で発見した壁穴建物である。

【形状・規模】平面規模は長軸約4m、短軸3.4m以上である。方向は西辺で測るとN-2°-Wである。

【埋土】旧調査により削平を受けており、掘方埋土のみ残存していた。埋土は黒色粘質土(10YR2/1)を主体とし、淡黄色細砂を多量に含む。

【カマド・周溝】周溝のみ確認した。幅は約50cm程度である。

S I 3702（第8図）

【調査状況・重複】E区中央部で発見した壁穴建物である。S B3685・S B3684・S B3687と重複しており、いずれよりも古い。

【形状・規模】平面規模は長軸約4.6m、短軸3.1mである。方向は西辺で測るとN-4°-Eである。

【カマド・周溝】確認していない。

S I 3669（第39・40図）

【調査状況・重複】E区北部で発見した壁穴建物である。

【形状・規模】平面規模は長軸約5.2m、短軸3.5mである。方向は北辺で測るとN-5°-Eである。

【埋土】1層は覆土であり、焼土を含む褐色(10YR4/1)シルトである。2層はカマド崩壊土であり、炭化物を多く含む黒褐色(10YR3/1)シルトである。

【カマド・周溝】東側にカマドの両袖部分を確認した。

【遺物】須恵器円面鏡、土師器鉢が出土している。

S I 3703（第9図）

【調査状況・重複】E区北部で発見した壁穴建物である。溝跡、ビットと重複しており、これらより古い。

【形状・規模】平面規模は長軸5m、短軸4.4m以上である。方向は西辺で測るとN-7°-Eである。

【カマド・周溝】東半部は調査区外であり、カマドは確認していない。

S I 3704（第9図）

【調査状況・重複】調査区北端中央部で発見した壁穴建物である。

【形状・規模】平面規模は長軸5.2m、短軸5mである。方向は西辺で測るとN-2°-Eである。

【埋土】残存状況が悪く、掘方埋土のみ確認した。

【遺物】出土していない。

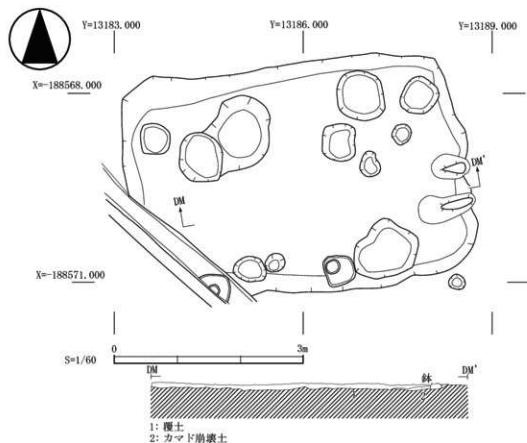
S I 3674（第10図）

【調査状況・重複】G区中央部で発見した壁穴建物である。

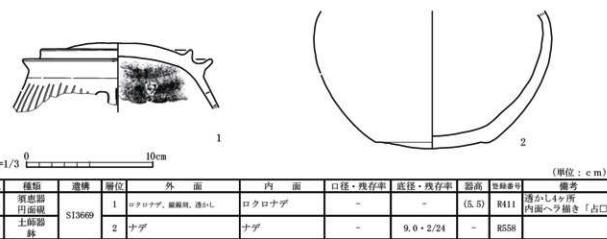
【形状・規模】平面規模は長軸4.4m、短軸3mである。方向は西辺で測るとN-1°-Eである。

【カマド・周溝】カマドは遺存しておらず、東側に炭化物が集中する。

【遺物】掘方埋土から南小泉～引田式期の土師器壺が出土している。



第39図 S I 3669堅穴建物跡 平面・断面図



第40図 S I 3669出土遺物

(5) 井戸跡

S E 3638 (第41・42・43・44・45・46図)

【調査状況・重複】A区東端部で発見した井戸跡である。新旧2時期の変遷を確認しており、古い段階（A期）から、やや南に位置を変えて新しい段階（B期）のものが構築されている。上部はいずれも抜き取られている。

【井戸側】A期では井戸側の大部分が抜き取られており、底部下段の集水装置を残すのみであった。集水装置は相欠きの丸太材を井籠組にしており、浄水用の木炭が充填される。B期では縦板組横桟留の側を確認した。不整形の板材7～10枚を四方に重ね合わせて横桟で固定している。隅柱は存在せず、縦板は横桟のみで支持されている。

【形状・規模】A期の規模は集水装置内の内法が約78cm×90cm、掘方直径が約2.7m、検出面からの深さは約1.9mである。B期の規模は井戸側内法が約60cm×63cm、掘方直径が2.3m、検出面からの深さが約1.4mである。

【埋土】A期は第1・2層が井戸側の抜取穴の堆積土であり、第1層は褐灰色シルト(10YR4/1)、第2層はオリーブ黒色シルト(5Y3/1)である。第3層は側内堆積土であり、黒褐色粘土(10YR3/1)である。第4層が集水装置構築時の裏込め土であり、浄水用の木炭が敷き詰められている。第5・6層が掘方埋土である。第5層は拳大の淡黄色シルト(5Y8/3)ブロックを多量に含む灰色シルト(5Y4/1)である。6層はΦ2～3cm程度の淡黄色シルト(5Y8/3)ブロックを少量含む灰色シルト(5Y4/1)である。B期では最上層に基本層第三層が堆積している。第3層は枠内堆積土であり、黒褐色粘土(10YR3/1)である。第4・5層は掘方埋土であり、第4層は淡黄色シルト(5Y8/3)ブロックを少量含む灰色シルト(5Y4/1)、第5層は褐灰色シルト(10YR4/1)である。

【遺物】A期の抜取穴からは軒丸瓦、丸瓦、平瓦が出土している。A期の側内堆積土からは土師器坏（A類・B類）、須恵器坏、ト骨、骨角器が出土している。B期の抜取穴からは灰釉陶器塊、須恵器坏、骨角製品が出土している。B期の側内堆積土からは土師器坏B類、須恵器坏が出土している。

S E 3644 (第47・48図)

【調査状況・重複】C区中央部北壁付近で発見した、木製の側を有する井戸跡である。S D 3666・S D 3677と重複しており、いずれよりも新しい。

【井戸側】縦板組隅柱横桟留の側を確認した。各辺に3～5枚程度の縦板を用い、縦板と同種の板材を横位にして横桟とし、隅柱で固定している。柄等による部材結合ではなく、縦板と隅柱の間に横桟が挟み込まれる構造である。縦板は底面よりも深く挿入される。

【形状・規模】側は内法約90cm×1m、掘方直径は約1.6m、検出面からの深さは2.2mである。板は厚さ5～6mm程度の薄さに整形されており、屋根材等の転用が想定される。隅柱は直径8～10cm程度の丸材である。

【埋土】1層は抜き取り穴である。Φ1cm程度の淡黄色シルト(5Y8/3)ブロックを少量含む黒褐色粘土質土(2.5Y3/1)である。2層は側内堆積土である。暗灰黄色粘土質土(2.5Y4/2)であり、微量の酸化鉄と植物遺体を含む。3層は掘方埋土である。黒色シルト(2.5Y2/1)であり、Φ3cm程度の淡黄色シルト(5Y8/3)ブロック、Φ1cm程度の灰白色火山灰粒を少量含む。

【遺物】側内堆積土から須恵器土器坏、両面黒色処理を施した土師器坏、灰釉陶器、磨石が出土している。

S E3645 (第49・50図)

【調査状況・重複】C区中央部南壁付近で発見した、木製の側板を有する井戸跡である。

【井戸側】縦板組隅柱横桟柱の側を確認した。各辺に2～3枚程度の縦板を用い、横桟と隅柱で固定している。隅柱にはそれぞれ二箇所に柄穴が設けられ、横桟が挿入されている。

【形状・規模】側は内法約75cm×90cm、掘方直径は1.6m、検出面からの深さは約1.6mである。板は約5～6cm程度の厚さである。隅柱は直径8～10cm程度の丸材である。

【埋土】抜き取り穴には灰白色火山灰が自然堆積している。

【遺物】土師器坏B V類、瓦鉢(土師器鉢)が出土している。土師器坏は体部外面に墨書がみられるもの、油煙が付着するもの、底部に穿孔がみられるもの等がある。瓦鉢は体部下半が回転ヘラケズリされ、両面にミガキと黒色処理を施している。「千万口」「佛口口」等の墨書がみられる。所謂「鉄鉢形」土器である。

S E3651 (第51・52・54図)

【調査状況・重複】F区中央部や西寄りで発見した、側を有する井戸跡である。新旧2時期の変遷を確認しており、古い段階(A期)の部材を新しい段階(B期)においても一部利用している。

【井戸側】A期は横板井籠組であり、東面及び西面下段に角材を架けて横桟としている。横板や横桟には、井戸側としての用をなさない枘穴が認められることから、建築部材等の転用品とみられる。井戸側内西寄りに、板材を組み合わせて構築された集水施設を伴う。集水施設の裏込めには、直径2～3cm前後の木炭細片が充填されており、浄水機能を意図したとみられる。B期には北面及び東面に縦板が差し込まれ、集水施設を保護するとともに、井戸側全体を狭く作り直している。西面と南面はA期のものを継続して用いており、横板と縦板を併用している。

【形状・規模】側はA期が内法約1m×96cm、B期の規模は井戸側内法が約60cm×78cm、集水装置の内法が約42cm×51cm、掘方直径が2.9m、検出面からの深さが約1.9mである。

【埋土】側内堆積土は黒褐色粘質土(10YR2/1)、掘方埋土はΦ5～6mm程度の黄褐色シルトブロックを斑状に含む黄灰色シルトである。

【遺物】B期側内堆積土から、縄袖陶器皿、土師器坏(B V類)が出土している。

S E3670 (第9・53図)

【調査状況・重複】E区南部で発見した素掘りの井戸跡である。

【形状・規模】長軸約3m、短軸約2.4m、深さは約72cmである。平面形状は梢円形であり、断面形状は漏斗状である。

【埋土】第3～9層までは人為的に埋め戻されており、第1・2層は井戸廃絶後の凹みに溜まった自然堆積層である。最上層(第1層)は古代の遺構を覆う黑色粘質土(基本層II層)と同一とみられる。

【遺物】出土していない。

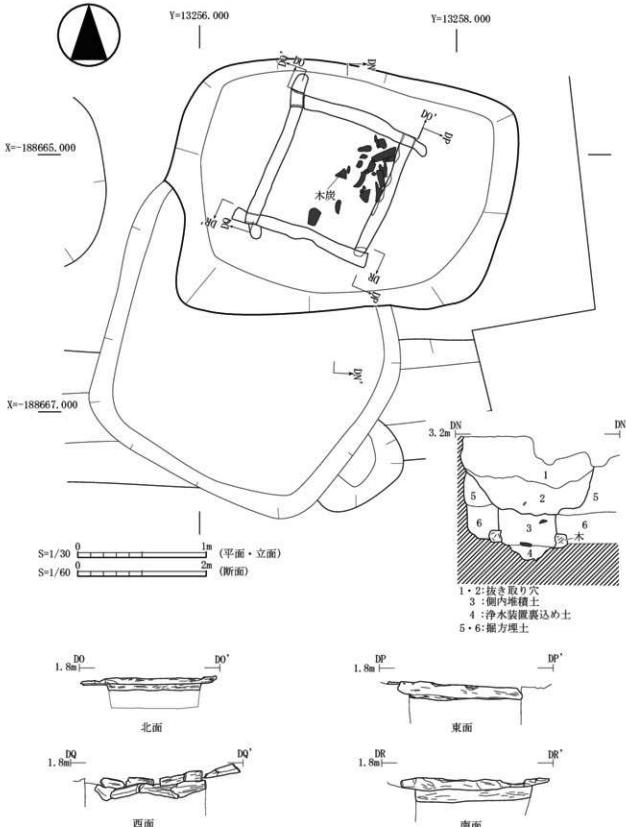
S E3693 (第10・53・54図)

【調査状況・重複】F区南部で発見した素掘りの井戸跡である。

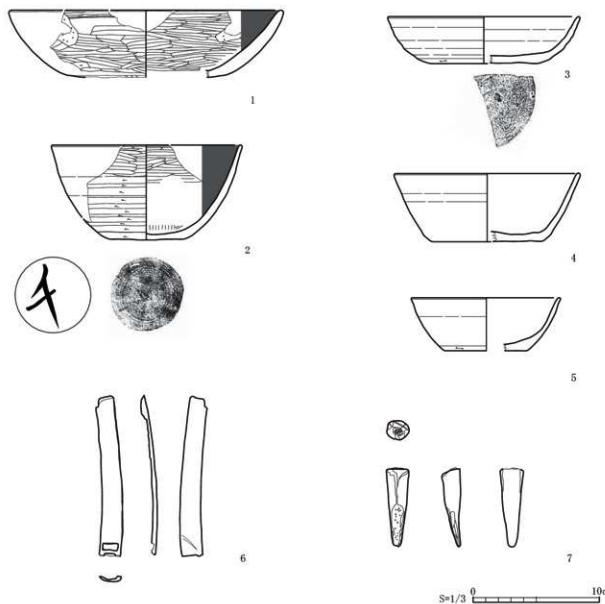
【形状・規模】長軸約1.6m、短軸約1.5m、深さは約66cmである。平面形は梢円形であり、壁は急角度で立ち上がる。

【埋土】第3～14層までは人為的に埋め戻されており、第1・2層は井戸廃絶後の凹みに溜まった自然堆積層である。

【遺物】第1層から須恵系土器小皿が出土している。

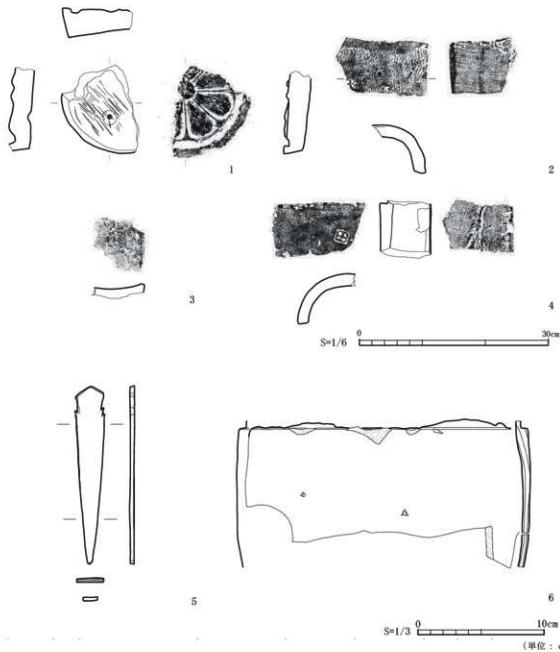


第41図 S E3638 A 平面・断面図

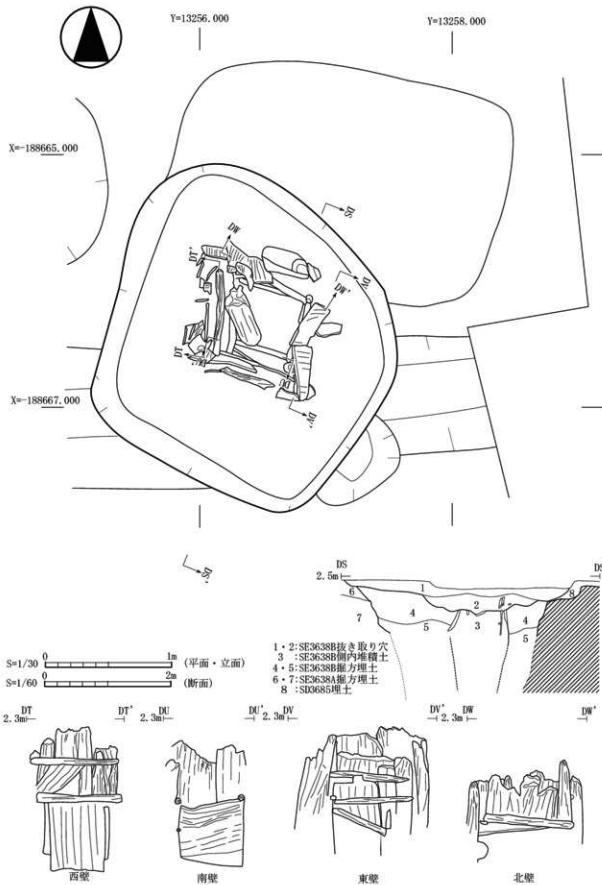


No.	種類	遺構	層位	外　面	内　面	口径・残存率	底径・残存率	高さ	品目番号	備考
1	土器器 坪	SE3638A	1	ヘラケツリ。ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色 修理。	(21.5)・1/24	(12.2)・4/24	5.3	R87	
2	土器器 坪		3	口部部へラケツリ　底：切 り削し不規則、回転へラケ ツリ	ヘラミガキ、黒色 修理	(15.0)・1/24	6.0・24/24	7.5	R90	写真図版21-1 底部外面に墨書き「干」
3	須恵器 坪		4	ロクロナデ。体下部回転 へラケツリ　底：切り削 し不明、手持らヘラケツ リ	ロクロナデ	(15.2)・□/24	(8.8)・□/24	3.7	R518	写真図版21-4
4	須恵器 坪		1	ロクロナデ　底：へら切り	ロクロナデ	(14.5)・4/24	(8.8)・11/24	5.4	R109	写真図版21-3
5	須恵器 坪		3	ロクロナデ。体下部回転 へラケツリ　底：回転へ ラケツリ	ロクロナデ	(11.6)・□/24	(6.6)・□/24	4.2	R107	写真図版21-2
6	骨角器		3	加工痕あり		最大長 12.6	最大幅 1.7	0.6	R157	写真図版21-9 上骨
7	骨角器		3	両先端に加工痕あり		最大長 6.3	最大幅 1.8	1.5	R158	写真図版21-8

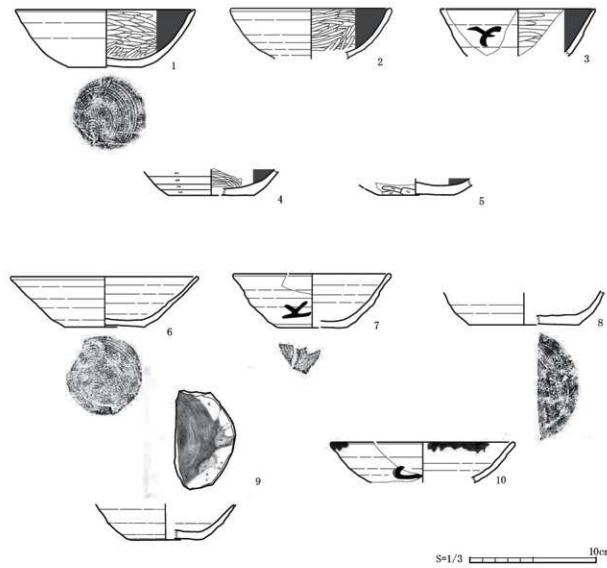
第42図 SE3638A 出土遺物（1）



第43図 SE3638A 出土遺物（2）

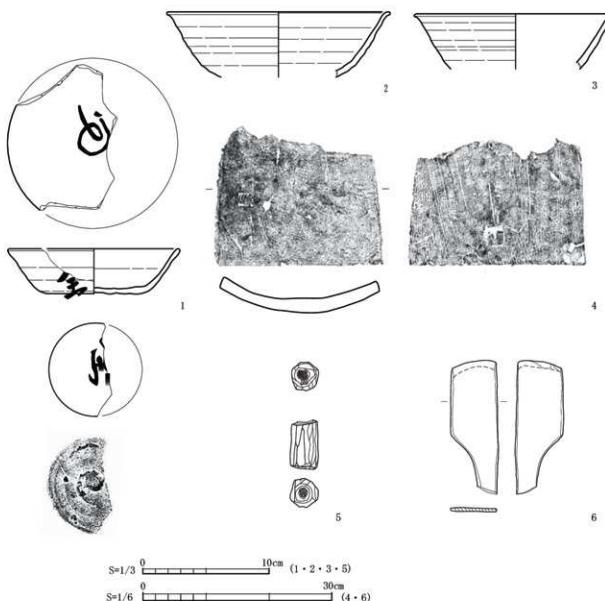


第44図 SE3638B平面・断面・立面図



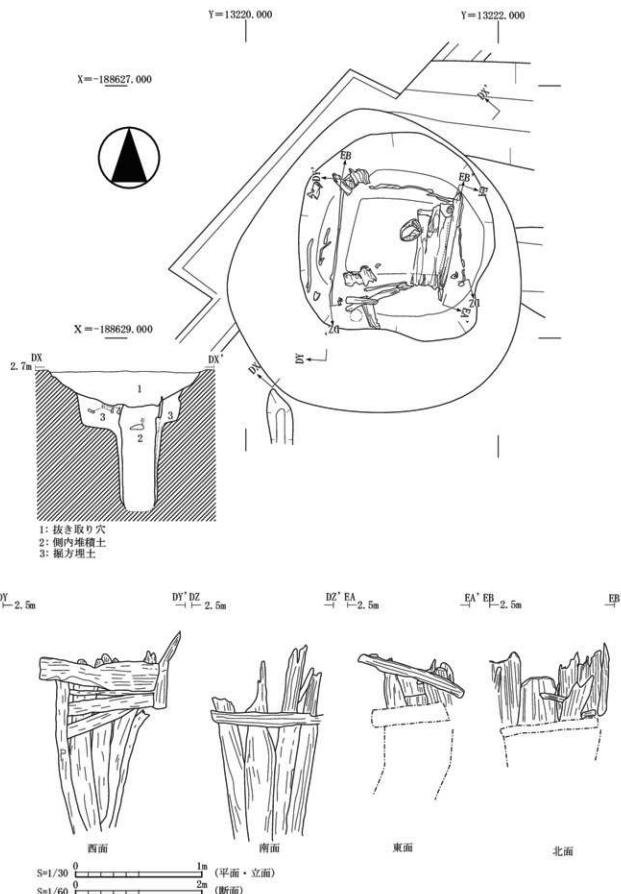
第45図 SE3638B 出土遺物 (1)

No.	種類	造構	部位	外　面	内　面	口径・残存率	底径・残存率	高さ	写真番号	備考
1	土師器 灰	3	ロクロナデ 底:回転糸切	ヘラミガキ・黒色 処理	(14.2)・20/24	5.8・24/24	4.6	R131	写真図版22-1	
2	土師器 灰	3	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色 処理	(12.6)・9/24	—	(4.0)	R133	写真図版22-5	
3	土師器 灰	3	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色 処理	(12.2)・4/24	—	(3.7)	R137	写真図版22-4 外表面部に墨書き	
4	土師器 灰	4	回転ヘタケズリ 底:切 り縁し不明。回転ヘタケ ズリ	ヘラミガキ・黒色 処理	—	(6.8)・11/24	(2.0)	R135		
5	土師器 灰	5	手持ちヘタケズリ 底: 切り縁し不明。手持ちヘ タケズリ	ヘラミガキ・黒色 処理	—	(5.9)・10/24	(1.3)	R134		
6	須恵器 灰	3	ロクロナデ 底:回転糸切	ロクロナデ	(14.8)・9/24	(6.4)・19/24	4.0	R140	写真図版22-2	
7	須恵器 灰	3	ロクロナデ 底:回転糸切	ロクロナデ	(12.4)・2.5/24	(4.9)・5/24	4.3	R143	外表面部に墨書き	
8	須恵器 灰	3	ロクロナデ 底:回転糸切	ロクロナデ	—	(8.8)・10/24	(2.6)	R145	写真図版22-3	
9	須恵器 灰(施用鏡)	4	ロクロナデ 底:回転糸切	ロクロナデ	—	(5.6)・9/24	(2.8)	R147	内面に墨書き	
10	須恵器 灰	3	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.5)・□/24	—	(3.2)	R144	外表面部に墨書き、内 表面部縁部に墨書き	

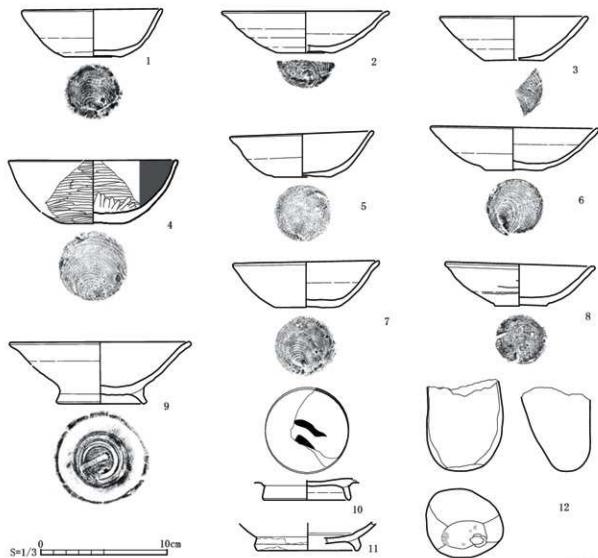


No.	種類	遺物	部位	(単位: cm)						備考
				外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	深さ	断面形状	
1	灰釉陶器 塊	須恵器 片	2	ロクロナダ。底: 回転ヘラ切り	ロクロナダ	(13.5)・□/24	(7.2)・□/24	3.6	R142	写真図版22-4 内外表面に墨書き、 外表面部に墨書き
2			2	ロクロナダ、施釉、底部無釉	ロクロナダ、施釉	(17.5)・4/24	—	(5.2)	R127	写真図版22-8
3		SE3638B	2	ロクロナダ、施釉	ロクロナダ、施釉	(15.7)・3/24	—	(4.4)	R129	写真図版22-9
4	平瓦	灰釉陶器 塊	2	凹面: 布目痕、ヘラナダ	凸面: 滑明き、ヘラナダ	最大長 22.5	最大幅 26.8	2.3	R155	前面に口の押印、凸 面に「物」の押印
5	骨角製品		2	加工痕あり、両端に切断 痕あり	—	最大長 3.9	最大幅 2.2	0.3	R156	写真図版22-7 骨角製、未完成品
6	漆木製品		3	—	—	最大長 (30.9)	最大幅 7.5	0.6	W061	木取正日

第46図 SE3638B出土遺物 (2)

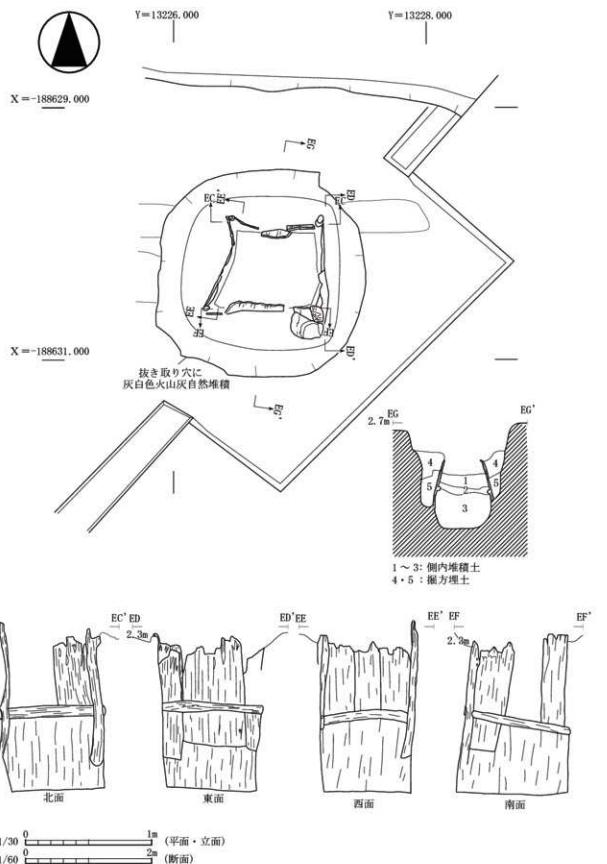


第47図 S E3644井戸跡 平面・断面・立面図

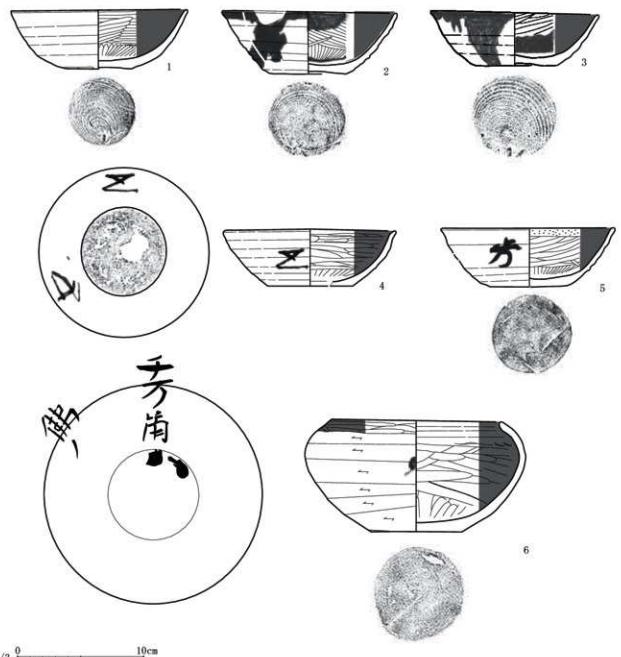


No.	種類	遺物	層位	外 面	内 面	口径・存査率	底径・存査率	深さ	年輪番号	備考
1	須恵器土器 片	1	ロクロナダ	底:回転糸切	ロクロナダ	(11.5)・20/24	4.5・24/24	3.8	R386	写真図版19-1 内面に崩壊あり
2	須恵器土器 片	3	ロクロナダ	底:回転糸切	ロクロナダ	(13.0)・7/24	(4.6)・11/24	3.3	R382	写真図版19-2
3	須恵器土器 片	5	ロクロナダ	底:回転糸切	ロクロナダ	(11.6)・8/24	(4.6)・7/24	-	R383	写真図版19-3
4	土師器 片	2	ヘラミガキ	黒色處理 底:回転糸切	ヘラミガキ	(13.2)・1/24	5.4・24/24	5	R384	写真図版19-4
5	須恵器土器 片	2	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	11.2・24/24	4.6・24/24	3.4	R385	写真図版19-5
6	須恵器土器 片	2	ロクロナダ	底:回転糸切	ロクロナダ	(13.25)・14/24	4.4・24/24	-	R386	写真図版19-6
7	須恵器土器 片	2	ロクロナダ	底:回転糸切	ロクロナダ	(11.4)・22/24	4.9・24/24	3.6	R387	写真図版19-7
8	須恵器土器 片	2	ロクロナダ	底:回転糸切	ロクロナダ	(11.7)・23/24	4.1・24/24	3.3	R388	写真図版19-8 外面に崩壊あり
9	須恵器土器 片	2	ロクロナダ	底:回転糸切	ロクロナダ	(14.2)・6/24	6.85・24/24	4.9	R389	写真図版19-9
10	須恵器土器 片	2	ロクロナダ	底:回転糸切 高台高台貼り付け	ロクロナダ	-	(6.8)・8/24	-	R390	写真図版19-10 外面底部に黒苔あり
11	灰釉陶器 片	2				-	(8.0)・8/24	2.1	R391	写真図版19-11 輪はぎ痕あり
12	石製品 磨石	2		最大長 7.3	最大幅 6.1	最大厚 5.4			R392	写真図版19-12

第48図 S E3644出土遺物

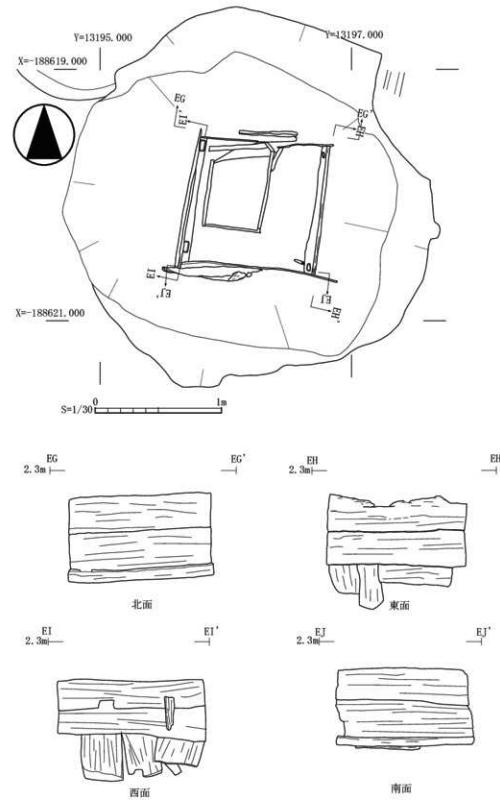


第49図 S E3645井戸跡 平面・断面・立面図

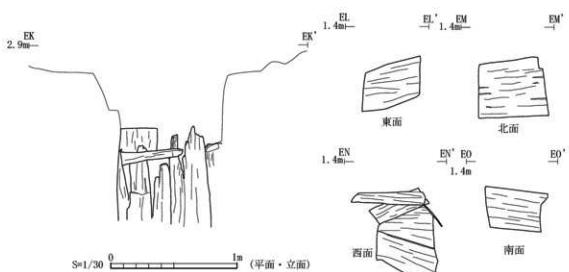
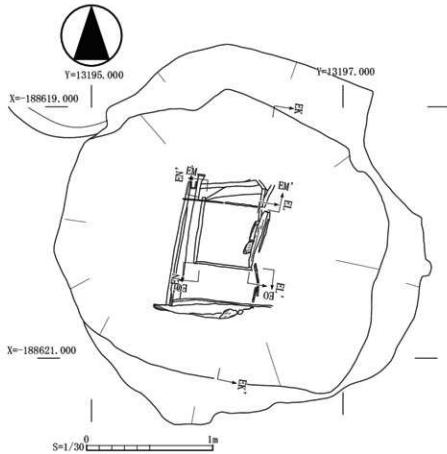


No.	種類	遺構	部位	外　面			内　面			口径・残存率	底径・残存率	高さ	資料番号	備考
				ロクロナデ	底：回転糸 切	ロクロナデ	底：回転糸	(13.9)・22/24	5.1・24/24	4.7	R68	写真図版20-1		
1	土器器 片			ロクロナデ	底：回転糸 切	ロクロナデ	(13.3)・22/24	5.9・24/24	4.9	R70	写真図版20-2 内表面に油膜あり			
2	土器器 片			ロクロナデ	底：回転糸 切	ロクロナデ	(13.3)・22/24	6.5・24/24	4.2	R71	写真図版20-3 内表面に油膜あり			
3	土器器 片			ロクロナデ	底：手持へ ラミズリ	ロクロナデ	(13.5)・24/24	6.8・24/24	4.5	R72	写真図版20-4 外表面に墨書きあり			
4	土器器 片			ロクロナデ	底：回転糸切 のラミズリ	ロクロナデ	(13.7)・9/24	6.2・24/24	4.7	R73	写真図版20-5			
5	土器器 片			ヘラミガキ(口)	底：回転糸 ラミズリ(体、底)	ロクロナデ(口)	(13.4)・18/24	7.2・24/24	8.9	R74	写真図版20-6			
6	瓦砾 (土器器片)													

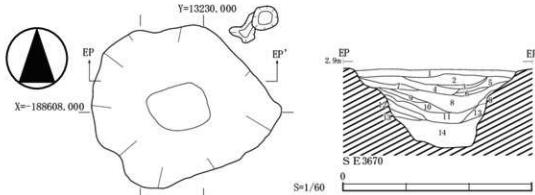
第50図 S E3645出土遺物



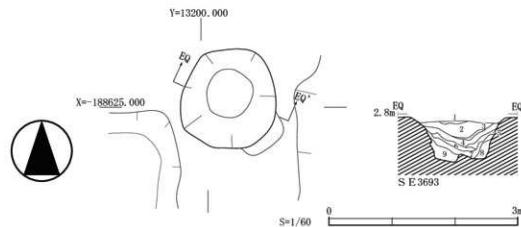
第51図 S E3651A 井戸跡 平面・立面図



第52図 S E3651B 井戸跡 平面・立面図

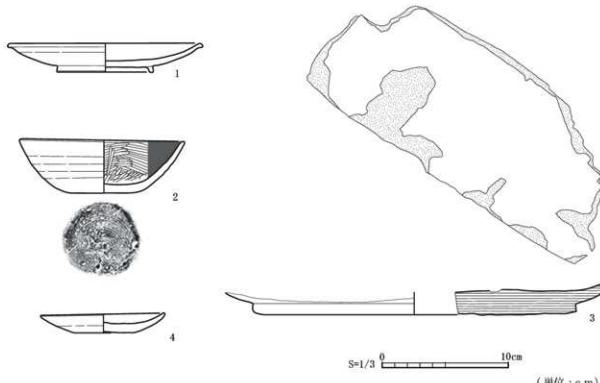


No.	土色	土性	備考
1	2.5Y5/2	シルト	Φ3mmの炭化物及びΦ1~2mmの淡黄色シルト微量に含む
2	2.5Y5/2	シルト	Φ3mmの炭化物少量含む 帯状に淡黄色細砂
3	2.5Y4/1	粘土	
4	2.5Y5/2	シルト	Φ2~3mmの炭化物少量と明黄色細砂を斑に含む
5	2.5Y5/1	シルト	Φ2mm炭化物微量に含む 明黄色細砂が底面に流入
6	2.5Y4/1	シルト	
7	2.5Y4/1	シルト	Φ4~5mmの淡黄色細砂を斑に含む
8	2.5Y4/2	粘土	
9	2.5Y4/2	シルト	淡黄色細砂が帯状に流入
10	2.5Y4/2	粘土	淡黄色シルトが帯状に流入
11	2.5Y3/1	粘土	
12	10YR3/1	粘土	淡黄色シルト少量斑に含む
13	10YR3/1	砂	
14	10YR3/1	粘土	



No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1	粘土	
2	10YR4/1	粘質土	灰白色砂微量に含む
3	2.5Y7/3	シルト	Φ3~4mmの黑色粘土ブロック微量、褐灰色シルトブロック含む
4	10YR4/1	粘質土	Φ2~3mmの淡黄色粘土ブロック微量含む
5	10YR2/1	粘土	Φ1~2cmの淡黄色シルトブロック少量含む
6	10YR4/1	粘質土	淡黄色シルトブロック、黑色粘土がマーブル状に堆積
7	2.5Y7/3	シルト	褐灰色粘土、黑色粘土が多く、マーブル状に堆積
8	10YR5/1	粘土	少量の淡黄色粘土・黑色粘土がマーブル状に堆積
9	10YR3/1	シルト	Φ4~5mmのわずかな淡黄色シルトブロックを斑に含む

第53図 S E3670-3693平面・断面図



(単位: cm)

No.	種類	遺構	層位	外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	器高	参考
1	漆油器 皿	SE3651B	側内	ロクロナダ、ヘラミガキ底: 切り出し付	ロクロナダ、ヘラミガキ	(15.1) × 8/24	7.6 × 30/24	2.3	R64
2	土師器 坪	SE3651B	側内	ロクロナダ、ヘラミガキ底: 回転水切	ヘラミガキ、黒色地刷	12.9 × 22/24	6 × 24/24	4.2	R65 写真 図版 23-12
3	漆油物 高台付皿	SE3651A	側内			—	(25.5)	(2.4)	W70 写真 木版 図版
4	重底土器 皿	SE3693	I	ロクロナダ底: 回転水切り	ロクロナダ	9.9 × 16/24	4.8 × 24/24	1.4	R65

第54図 S E 3651・3693出土遺物

(6) 烟跡

S X3642 (第6図)

【調査状況・重複】 A区東半部で確認した南北方向の7条の溝から成る小溝群である。柱穴と重複しており、これより古い。

【方向・規模】 方向はN-1～3°-Eである。幅は約32～50cmであり、深さは約10cmである。

【埋土】 黄灰色シルトであり、黄褐色シルトブロックを斑状に含む。

【遺物】 出土していない。

S X3639 (第6図)

【調査状況・重複】 A区中央部で発見した東西方向の24条の溝から成る小溝群である。

【方向・規模】 方向はN-1～3°-Eである。幅は約32～50cmであり、深さは約10cmである。

【埋土】 黄灰色シルトであり、黄褐色シルトブロックを斑状に含む。

【遺物】 出土していない。

S X3643 (第6図)

【調査状況・重複】 A区西端部で発見した南北方向の10条の溝から成る小溝群である。

【方向・規模】 方向はN-10～14°-Eである。幅は約30～45cmであり、深さは約10cmである。

【埋土】 黄灰色シルトであり、黄褐色シルトブロックを斑状に含む。

【遺物】 出土していない。

(7) 土坑・その他の遺構

S K3705土坑 (第10図)

【調査状況・重複】 G区南部で発見した不整形の土坑である。柱穴と重複しており、これより古い。

【規模】 東西約3.3m、南北約3mである。残存する深さは約30cmである。

【遺物】 須恵器短頸蓋が出土している。

S X3698堅穴状遺構 (第55・56図)

【調査状況・重複】 B区中央部で発見した堅穴状の落ち込みである。S B3692と重複しており、これより新しい。

【規模】 長軸約4.3m、短軸約2.5mである。残存する深さは約30cmである。

【埋土】 第1層は均質な黄灰色(2.5Y6/1)シルトであり、第2層は炭化物・焼土を多く含む黄灰色(2.5Y6/1)シルトである。

【遺物】 須恵器土器坪、高台付坪が出土している。

S X3701性格不明遺構 (第8・57図)

【調査状況・重複】 E区北東部で発見した性格不明遺構である。

【規模】 長軸約4.3m、短軸約1.8mである。

【遺物】 須恵器坪が出土している。

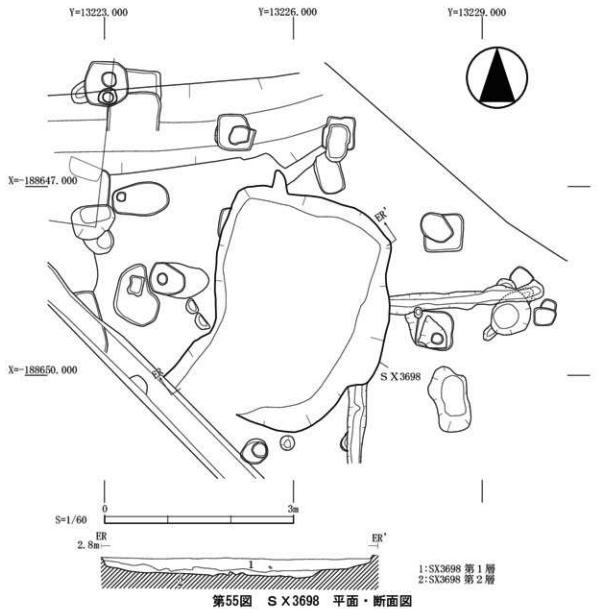
S X3623池状遺構 (第58・59・60・61・62・63・64・65・66・67・68・69・70・71・72・73図)

【調査状況・重複】 昭和57年度第2次調査で発見した方形状落ち込み及び平成29年度第95次調査で発見したSD3572と同一の遺構とみられる(多賀城市教育委員会1983・2018)。第96次調査内に位置するのは概ね遺構の南半部に当たり、北半部の平面プランは第2次調査の平面図を基に合成した。堆積層は中層に灰白色火山灰を挟んで上下の2層に分層出来る。いずれも植物遺体を多く含む自然堆積層である。S B3624掘立柱建物跡と重複しており、これより新しい。

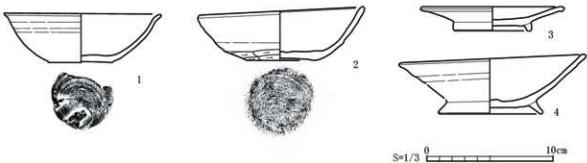
【形状・規模】 構丸方形形に溝が巡り、中央に中島状の高まりを持つ。規模は南北約12.5m、東西約11.4m、中島部分を含めた総面積は約137m²に及ぶ。

【埋土】 埋土は灰白色火山灰の堆積層を挟んで上下に分層されるが、いずれも植物遺体を多く含む自然堆積層である。第1層の直上には古代の最終堆積層である黒色粘質土(基本層第2層)が堆積している。

【遺物】 第1層からは土師器坪・甕、須恵器土器坪・小型坪、須恵器坪・甕、平瓦、その他石製品が出土している。第2層からは土師器坪・甕、須恵器土器台付坪、須恵器坪・甕、平瓦・丸瓦、舟形木製品、蓮弁状木製品、漆器、桃の種、棒状木製品、その他石製品が出土している。

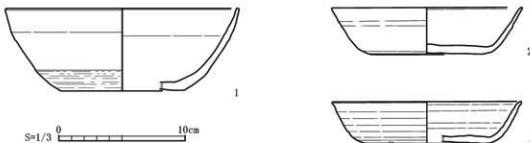


第55図 S X3698 平面・断面図



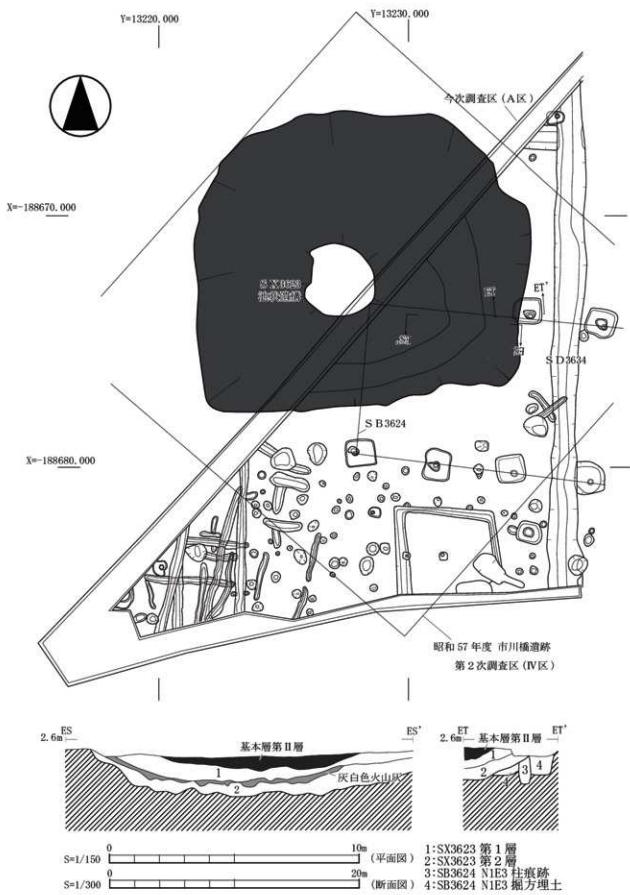
(単位: cm)										
No.	種類	遺構	部位	外　面	内　面	口径・残存率	底径・残存率	高さ	世紀番号	備考
1	須恵器 片	底	底:回転余切り	ロクロナデ	(12.5)・14/24	(5.1)・15/24	3.9	8357	伊西國版23-9	
2		口	ロクロナデ。底:回転余 切り。内面付跡らへラグゼリ	ロクロナデ	13.2・24/24	5.3・21/24	3.9	8360	伊西國版21-11	
3		底	ロクロナデ。底:回転余 切り。高台點付け付	ロクロナデ	(11.4)・5/24	(6.0)・18/24	1.9	8359	伊西國版23-10	
4		高台付环	ロクロナデ。底:切り離 し不明。高台點付け付	ロクロナデ	(14.5)・11/24	8.0・24/24	4.4	8358	伊西國版23-9	

第56図 S X3698出土遺物

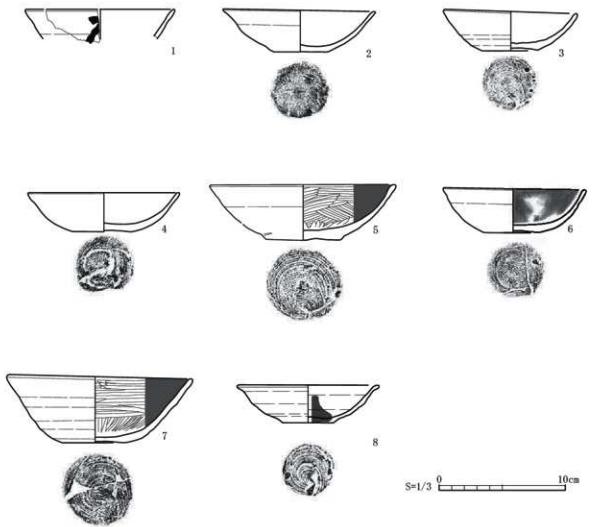


(単位: cm)										
No.	種類	遺構	部位	外　面	内　面	口径・残存率	底径・残存率	高さ	世紀番号	備考
1	須恵器 片(大型)	1	ロクロナデ。底:回転へ ラグゼリ	ロクロナデ	18.3・5/24	9.2・6/24	6.5	R415		
2		1	ロクロナデ。底:回転へ ラグゼリのちラグゼスリ	ロクロナデ	15.0・6/24	9.1・24/24	3.7	R416	内・外面に火だす S. わら灰付着	
3		1	ロクロナデ。底:切り離 し不明のち回転へラグゼ スリ	ロクロナデ	(15.0)・6/24	(9.6)・10/24	(3.3)	R417		

第57図 S X3701出土遺物

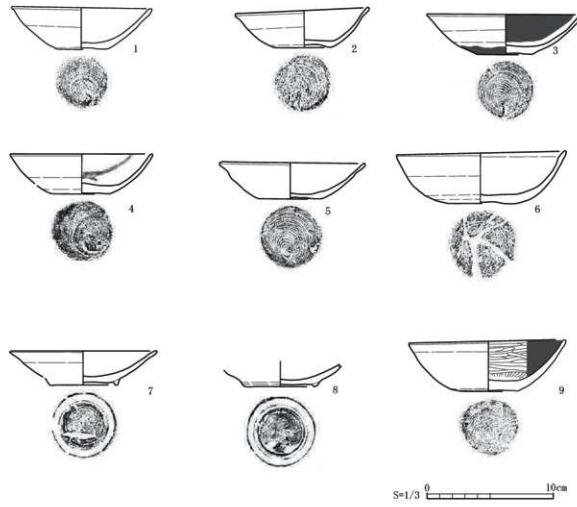


第58図 S X3623池状構 平面・断面図



第59図 S X3623 出土遺物（1）

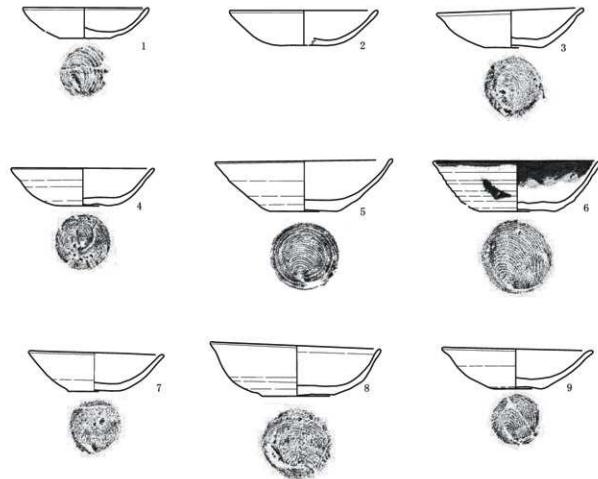
No.	種類	遺構	層位	外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	深高	登錄番号	備考
1	羽皿器 环		基本層 第2層	ロクロナデ	ロクロナデ	(11.8)・3/24	—	—	R301	外表面部に墨書き
2	羽應系土器 环		基本層 第2層	ロクロナデ 底：回転糸切	ロクロナデ	(12.0)・11/24	4.5・24/24	3.3	R198	
3	羽應系土器 环		基本層 第2層	ロクロナデ 底：回転糸切	ロクロナデ	(10.6)・9/24	(4.3)・24/24	3.1	R199	
4	羽應系土器 环	SX3623 底上	基本層 第2層	ロクロナデ	ロクロナデ	(11.9)・8/24	(5.0)・18/24 (3.1)	4.4	R200	
5	土器脚 环		基本層 第2層	ロクロナデ 底：回転糸切 黒色包埋	ヘラミガキ*	(14.6)・4/24	(5.8)・24/24	4.4	R202	外表面部に墨書き
6	土器脚 环		基本層 第2層	ロクロナデ 底：回転糸切	ロクロナデ	(11.2)・9/24	4.6・24/24	3.5	R203	内面に墨縁付着
7	土器脚 环	SX3623	1	ロクロナデ 底：回転糸切	ヘラミガキ*	(14.5)・20/24	5.3・24/24	5.2	R205	
8	質地系土器 小形环	SX3623	1	ロクロナデ 底：回転糸切	ロクロナデ	11.3・24/24	4.1・24/24	3.0	R4	質地系土器 内面に墨縁付着



S=1/3 0 10cm

(単位: cm)										
No.	種類	遺構	層位	外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	器高	登錄番号	備考
1	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	11.1・9/24	4.0・24/24	3.25	R1	
2	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	4.4・24/24	10.6・24/24	2.9	R2	亨真園版13-1
3	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	12.3・24/24	4.4・24/24	3.15	R3	亨真園版13-2 内面・外面に捺印有
4	須恵系土器 环			1 ロクロナダ	ロクロナダ	(11.9)・8/24	(5.0)・18/24	(3.1)	R5	亨真園版13-4
5	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	11.5・24/24	4.8・24/24	2.85	R6	亨真園版13-5
S X3623	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	13.5・23/24	5.4・24/24	4.0	R7	亨真園版13-6
				1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	(11.7)・3/24	5.2・23/24	(2.7)	R8	亨真園版13-7
7	須恵系土器 高台付里			1 ロクロナダ	ロクロナダ	-	5.5・24/24	-	R9	亨真園版13-8
8	須恵系土器 高台付里			1 ロクロナダ 底:回転糸切 黒色処理	ロクロナダ	12.2・24/24	4.5・24/24	4.15	R10	亨真園版13-9
9	土師器 环									

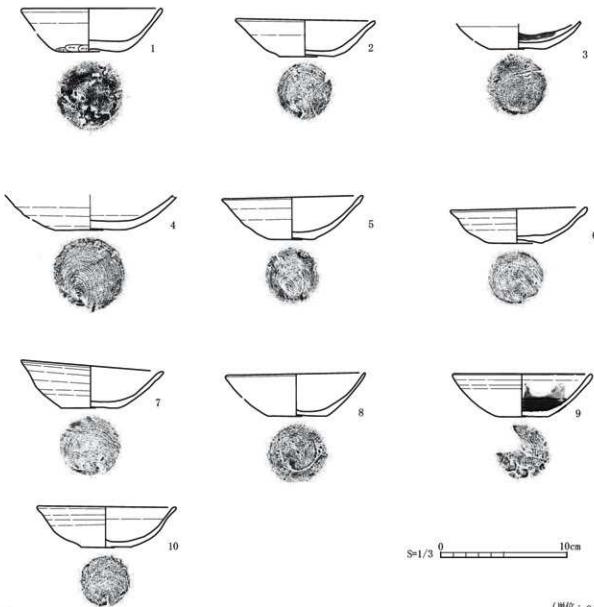
第60図 S X3623 出土遺物 (2)



S=1/3 0 10cm

(単位: cm)										
No.	種類	遺構	層位	外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	器高	登錄番号	備考
1	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	(9.65)・24	4.0・24/24	(2.4)	R11	
2	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	(11.5)・5/24	(4.0)・14/24	(2.8)	R12	亨真園版13-10
3	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	11.45・16/24	4.6・24/24	2.9	R13	亨真園版13-11
4	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	11.2・24/24	4.6・24/24	2.95	R14	亨真園版13-12
5	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	14.0・24/24	5.4・24/24	4.0	R15	亨真園版13-13
S X3623	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	(13.2)・7/24	5.9・24/24	(3.95)	R16	亨真園版13-14 内面・外面に捺印有
				1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	10.7・17/24	4.3・24/24	3.05	R17	亨真園版13-15
7	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	13.4・19/24	5.7・24/24	4.1	R18	亨真園版13-14
8	須恵系土器 环			1 ロクロナダ 底:回転糸切	ロクロナダ	11.8・23/24	3.8・24/24	3.15	R19	亨真園版14-2
9	須恵系土器 环									

第61図 S X3623 出土遺物 (3)



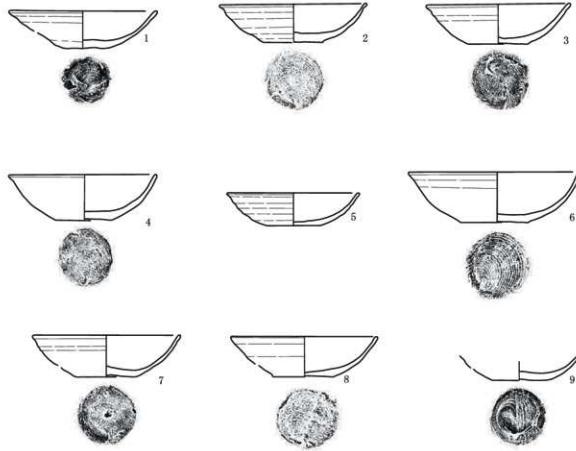
No.	種類	遺構	層位	(単位: cm)						備考
				外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	器高	鉢形番号	
1	須恵系土器 环	SX3623	1	ロクロナデ 底: 回転糸切 後両縁部のみハラケズリ	ロクロナデ (11.2)・9/24	4.2・24/24	(3.4)	R20		
2	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ 10.05・19/24	4.3・24/24	2.9	R21		
3	須恵系土器 环(小型)		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ —	4.4・24/24	—	R22	厚真圓盤14-3 内面に捺印有り	
4	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ —	5.6・24/24	—	R23	厚真圓盤14-4	
5	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ 11.1・18/24	3.9・24/24	3.3	R24	厚真圓盤14-5	
6	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ 10.8・24/24	3.2・24/24	4.1	R25	厚真圓盤14-6	
7	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ 11.25・14/24	4.65・24/24	3.40	R26	厚真圓盤14-7	
8	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.1)・24/24	4.7・24/24	(3.3)	R27	厚真圓盤14-8	
9	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ 11.0・8/24	4.2・18/24	4.4	R28	厚真圓盤14-9 内面に捺印有り	
10	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ 10.9・18/24	4.0・24/24	3.2	R29	厚真圓盤14-10	

第62図 S X3623 出土遺物 (4)



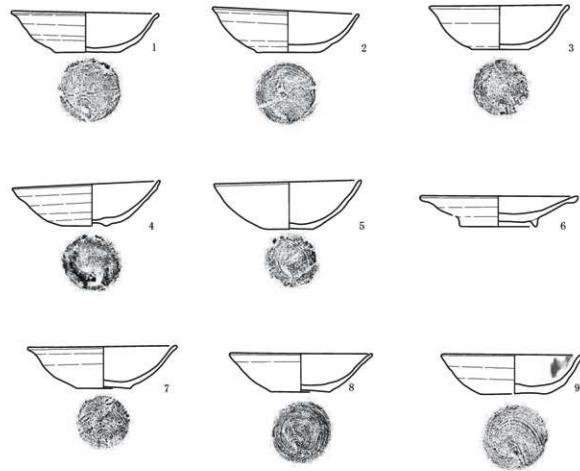
No.	種類	遺構	層位	(単位: cm)						備考
				外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	器高	鉢形番号	
1	須恵系土器 环	SX3623	1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.2)・3/24	4.75・24/24	(3.5)	R30	厚真圓盤14-11	
2	須恵系土器 环		1	ロクロナデ	ロクロナデ (10.85)・18/24	4.4・24/24	2.4	R32	厚真圓盤14-13	
3	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (10.9)・21/24	4.5・24/24	3.15	R33	厚真圓盤14-14	
4	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ	—	7.2・24/24	—	R24	厚真圓盤14-15
5	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (12.2)・9/24	(5.5)・12/24	(3.3)	R35	厚真圓盤14-1	
6	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.3)・20/24	4.05・24/24	2.4	R31	厚真圓盤14-2	
7	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (12.8)・1/24	4.3・24/24	(3.0)	R37		
8	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (10.7)・4/24	4.7・24/24	(2.7)	R38	厚真圓盤14-3	
9	須恵系土器 环		1	ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.8)・22/24	5.05・24/24	3.5	R39	厚真圓盤14-4 内面に捺印有り	

第63図 S X3623 出土遺物 (5)



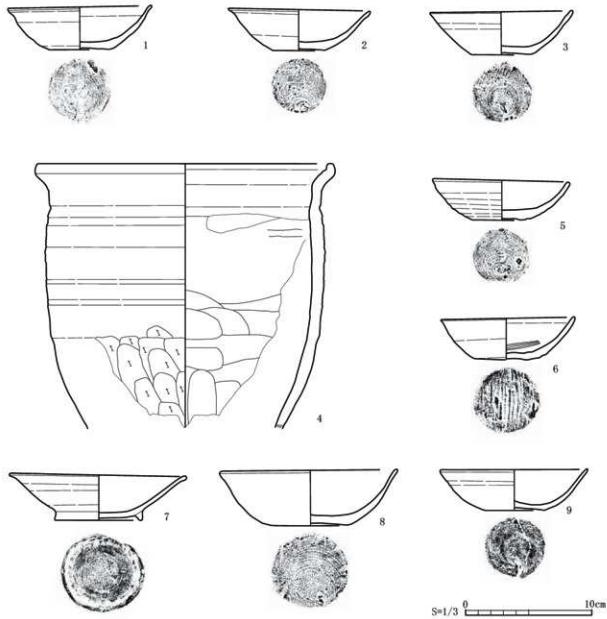
No.	種類	遺物	層位	参考					
				外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	器高	性別年齢
1	須恵系土器 环	S X3623	1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	(11.8)・6/24	3.4・24/24	(3.0)	R40
2			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.65・24/24	4.6・24/24	3.05	R41 等真園腹15-5
3			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.4・24/24	4.4・24/24	3.15	R42 等真園腹15-6
4			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.6・24/24	4.5・24/24	3.6	R43 等真園腹15-7
5			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	(10.4)・11/24	(4.2)・17/24	(2.6)	R44
6			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	13.2・24/24	5.4・24/24	4.0	R45 等真園腹15-8
7			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	(11.7)・24/24	4.7・24/24	(3.3)	R46 等真園腹15-9 内面、外面に曲線付帯
8			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	(11.6)・14/24	4.9・24/24	(3.2)	R47 等真園腹15-10
9			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	-	4.4・24/24	-	R48 等真園腹15-11

第64図 S X3623 出土遺物（6）



No.	種類	遺物	層位	参考					
				外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	器高	性別年齢
1	須恵系土器 环	S X3623	1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.6・19/24	5.0・24/24	3.2	R49 等真園腹15-12
2			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.5・24/24	4.9・24/24	3.3	R50 等真園腹15-13
3			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.1・14/24	4.5・24/24	3.45	R51 等真園腹15-14
4			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.7・24/24	4.4・24/24	3.5	R52 等真園腹15-15
5			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.6・24/24	3.8・24/24	3.7	R53 等真園腹16-1
6			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	12.5・12/24	6.0・14/24	2.4	R54 等真園腹16-2
7			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.8・8/24	4.2・24/24	3.3	R55 等真園腹16-3
8			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.2・24/24	3.0・24/24	4.7	R56 等真園腹16-4
9			1	ロクロナデ 底：回転系切	ロクロナデ	11.3・18/24	5.0・24/24	3.4	R57 等真園腹16-5

第65図 S X3623 出土遺物（7）



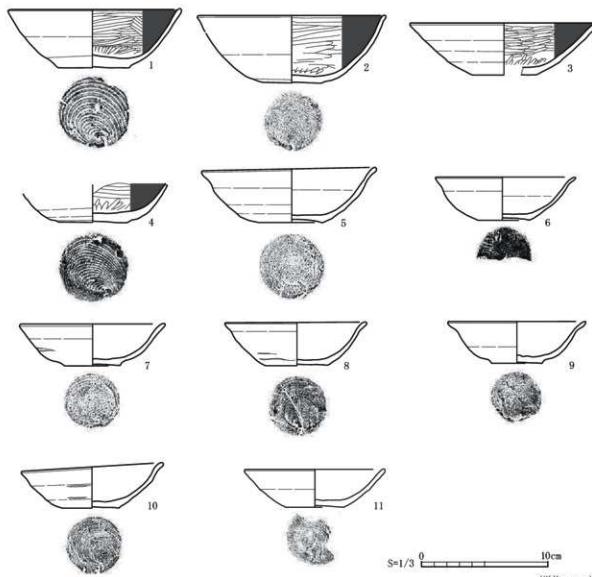
No.	種類	構造	層位	外観	内観	口径・残存率	底径・残存率	鉢高	縦横比	編考
1	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	11.3・18/24	5.0・24/24	3.4	R58	写真図版16-6
2	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	11.25・21/24	4.3・24/24	3.2	R59	写真図版16-7
3	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	11.2・24/24	3.4・24/24	4.6	R60	写真図版16-8
4	土器 環	1	ヘラケズリ	底：回転系切	ロクロナダ	(23.4)・5/24	-	-	R61	写真図版17-14
5	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	10.8・24/24	4.5・24/24	3.15	R62	写真図版16-9
6	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切 ハサウエに上るタヌキ	ロクロナダ	9.5・12/24	10.6・23/24	3.3	R63	写真図版16-10
7	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	14.0・20/24	6.8・24/24	3.6	R64	写真図版16-11
8	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	13.9・13/24	6.1・24/24	4.4	R65	写真図版16-12
9	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	11.6・12/24	4.7・24/24	3.25	R66	写真図版16-13

第66図 S X3623 出土遺物 (8)



No.	種類	構造	層位	外観		内観		口径・残存率	底径・残存率	鉢高	縦横比	編考
				外	内	外	内					
1	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	(12.7)・8/24	5.0・24/24	3	R67	写真図版16-14		
2	土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	(3.6)・7/24	4.6・24/24	3.7	R75			
3	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	9.8・24/24	4.0・24/24	2.6	R76			
4	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	(10.8)・23/24	3.8・24/24	3.2	R77	写真図版16-15		
5	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	(10.5)・14/24	5.0・24/24	3.1	R78			
6	須恵土器 环	SK3623	1	ロクロナダ	底：回転系切	(11.0)・20/24	3.8・24/24	3.8	R79	写真図版17-1		
7	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	(11.8)・23/24	4.2・24/24	3.1	R81	写真図版17-2		
8	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	(11.2)・19/24	4.0・24/24	3.3	R82			
9	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	(11.2)・16/24	4.4・24/24	3.3	R83			
10	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	(13.8)・19/24	4.9・24/24	4.3	R84	写真図版17-3		
11	須恵土器 环	1	ロクロナダ	底：回転系切	ロクロナダ	(13.8)・21/24	5.2・24/24	4.3	R85			

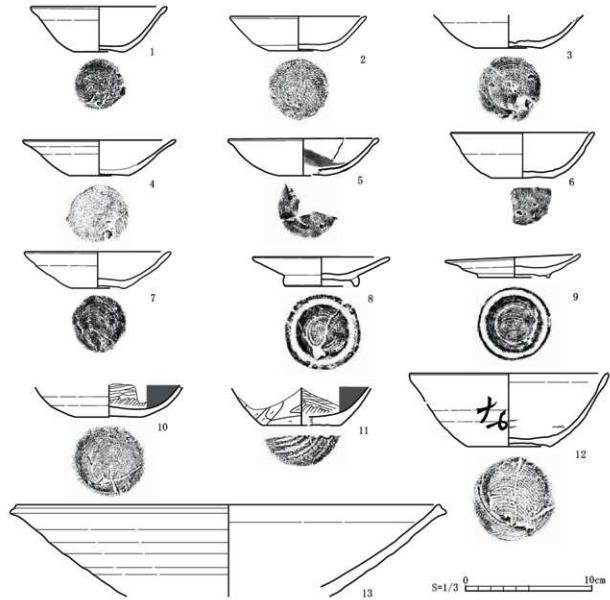
第67図 S X3623 出土遺物 (9)



S=1/3 0 10cm
(単位: cm)

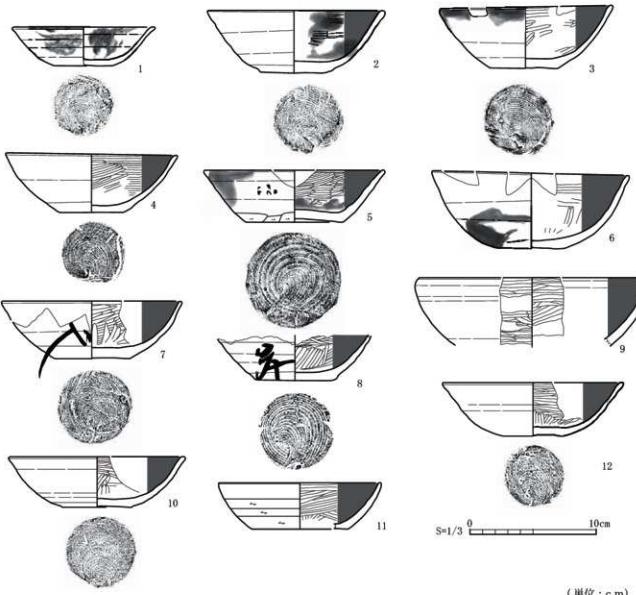
No.	種類	遺構	層位	外　面	内　面	口径・残存率	底径・残存率	深さ	壁厚	備考
1	土器器 底			I ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色 (13.5)・22/24	5.6・24/24	4.6	R206		
2	土器器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ヘラミガキ・黒色 (14.8)・11/24	4.7・24/24	5.3	R207	牙真圓印17-4	
3	土器器 底			I ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色 (15.0)・8/24	(5.1)・9/24	4.1	R208	牙真圓印17-5	
4	土器器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ヘラミガキ・黒色	-	5.5・24/24	-	R209	
5	須恵器 底			I ロクロナデ 截: 回転糸切	(13.9)・14/24	5.0・24/24	4.2	R211	牙真圓印17-6	
6	須恵器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.1)・13/24	4.0・24/24	3.4	R212	牙真圓印17-7	
7	須恵器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.6)・16/24	4.4・24/24	3.3	R213	牙真圓印17-8 外沿: 難辨	
8	須恵器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.3)・9/24	4.8・24/24	3.3	R214	牙真圓印17-9 外沿: 難辨	
9	須恵器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.0)・3/24	4.0・24/24	3.3	R215	牙真圓印17-10	
10	須恵器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.3)・18/24	4.4・24/24	3.3	R216	牙真圓印17-11 外沿: 難辨	
11	須恵器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ (11.2)・7/24	4.6・21/24	3	R217	牙真圓印17-12	

第68図 S X3623出土遺物 (10)



No.	種類	遺構	層位	外　面	内　面	口径・残存率	底径・残存率	深さ	壁厚	備考
1	須恵器土器 底			I ロクロナデ	ロクロナデ	(10.8)・3/24	3.9・24/24	3.6	R218	内部底部付近に輪積
2	須恵器土器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ	(10.7)・6/24	4.6・24/24	2.7	R219	
3	須恵器土器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ	-	5.2・24/24	-	R220	
4	須恵器土器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ	(12.2)・13/24	(4.8)・21/24	2.8	R221	内面に鉗痕
5	須恵器土器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ	(11.7)・4/24	(4.6)・13/24	2.9	R222	内面に油煙
6	須恵器土器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ	(11.2)・4/24	(5.0)・8/24	3.6	R223	内面底に油煙
7	須恵器土器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ	(11.6)・7/24	4.3・24/24	2.9	R224	
S3623	須恵器土器 底			I ロクロナデ 底: 回転糸切	ロクロナデ	(10.9)・8/24	5.6・24/24	3.3	R225	
				I ロクロナデ 底: 回転糸切 切のち高台貼り付け	ロクロナデ	(10.7)・22/24	5.7・24/24	1.6	R226	
				2 ロクロナデ	ヘラミガキ・ 黒色處理	-	5.3・24/24	-	R247	
10	土器器 底			2 ロクロナデ	ヘラミガキ・ 黒色處理	-	(6.2)・10/24	-	R248	
11	土器器 底			2 ロクロナデ	ヘラミガキ・ 黒色處理	(15.8)・5/24	6.5・24/24	5.8	R251	
12	須恵器土器 底			2 ロクロナデ	ロクロナデ	(33.6)・7/24	-	-	R579	

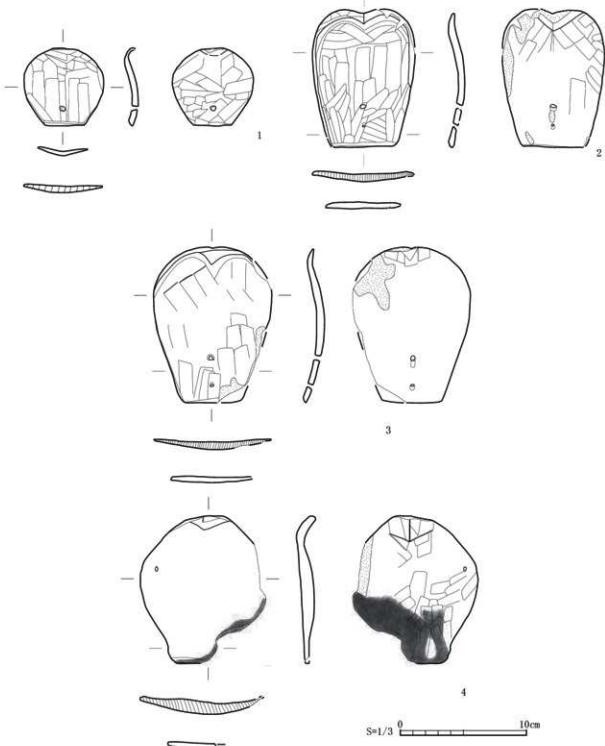
第69図 S X3623出土遺物 (11)



(単位: cm)

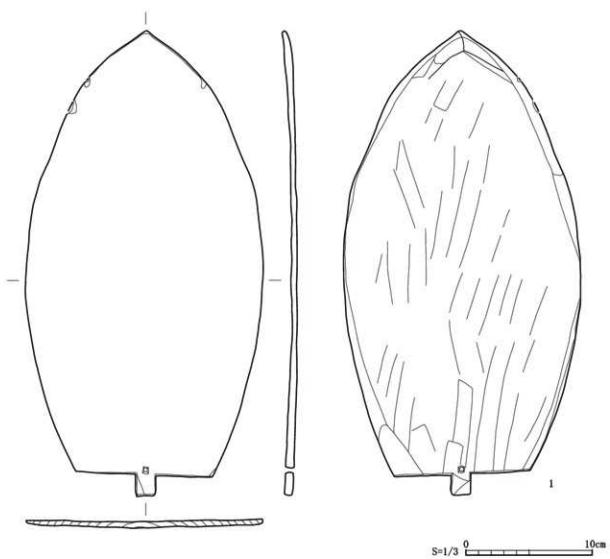
No.	種類	遺構	部位	外　面	内　面	口径・残存高	底径・残存半径	高さ	参考
1	土師器 环	1.	ロクロナダ	底: 回転系切	ロクロナダ	(11.2)・21/24	4.7・24/24	3.1	R31 写真図版14-12 内、外面に油膜付着
2		2.	ロクロナダ	底: 回転系切	ヘラミガキ・ 黑色處理	(13.3)・14/24	5.5・24/24	4.5	R234 写真図版18-1 内面に油膜付着
3		2.	ロクロナダ	底: 回転系切	ヘラミガキ・ 黑色處理	(13.6)・15/24	5.5・24/24	4.9	R235 写真図版18-2 外面に油膜付着
4		2.	ロクロナダ	底: 回転系切	ヘラミガキ・ 黑色處理	(13.5)・24/24	5.6・24/24	4.6	R236 写真図版18-3
5		2.	ロクロナダ	底: 回転系切・ 手持ちヘラケヅリ	ヘラミガキ・ 黑色處理	(14.2)・7/24	7.8・24/24	4.1	R237 写真図版18-4 内、外面に油膜付着
6		2.	ロクロナダ	底: 回転系切	ヘラミガキ・ 黑色處理	(15.5)・10/24	5.5・24/24	6.1	R238 写真図版18-5 外面に油膜付着
7		2.	ロクロナダ	底: 回転系切・ヘラガキ	ヘラミガキ・ 黑色處理	(14.2)・0/24	5.9・24/24	4.5	R239 写真図版18-6 外面に油膜付着
8		2.	ロクロナダ	底: 回転系切	ヘラミガキ・ 黑色處理	—	6.3・24/24	—	R240 写真図版18-7 外側に墨痕
9		2.	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ 黑色處理	(18.6)・1/24	—	—	R242 写真図版24-11	
10		2.	ロクロナダ	底: 回転系切	ヘラミガキ・ 黑色處理	(13.6)・10/24	(5.4)・22/24	4.0	R244 写真図版18-8 底面に油膜付着
11		2.	ロクロナダ	底: 回転ヘラケヅリ	ヘラミガキ・ 黑色處理	(12.8)・4/24	(7.6)・11/24	3.7	R245 写真図版18-9
12		2.	ロクロナダ	ヘラミガキ・ 黑色處理	(14.2)・4/24	4.6・24/24	4.2	R246	

第70図 SX3623 出土遺物 (12)

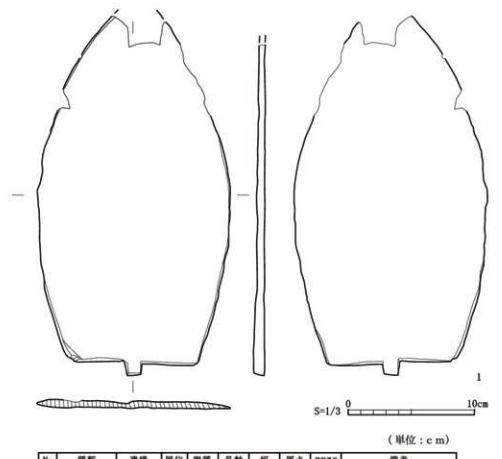


第71図 SX3623 出土遺物 (13)

No.	種類	遺構	部位	縦幅	横幅	長軸	短軸	厚さ	参考
1	土師器 环	1.	圓形狀木製品	カヤ	6.1	6.3	0.3	W56 写真図版3-4	
2		2.	圓形狀木製品	カヤ	10.8	8.1	0.6	W57 写真図版3-2 茅孔2ヶ所	
3		3.	圓形狀木製品	カヤ	12.4	9.3	0.6	W58 写真図版3-1 茅孔2ヶ所	
4		2.	圓形狀木製品	カヤ	11.6	(10.7)	1.1	W59 下部焼熱 写真図版3-3	

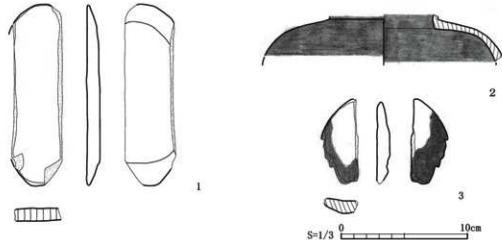


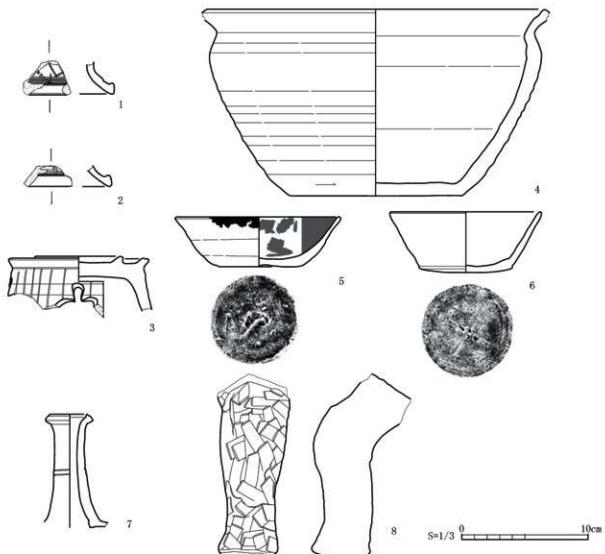
第72図 S X 3623 出土遺物 (14)



第73図 S X 3623 出土遺物 (15)

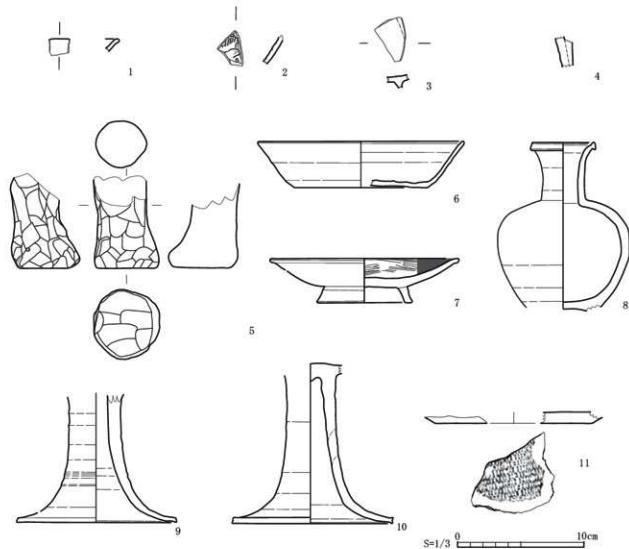
(単位: cm)									
No.	種類	遺構	部位	断面	長軸	幅	厚さ	文様等	備考
1	不明木製品		2	不明	(14.4)	(4.0)	1.0		W64
2	漆器	SX3623	3	ケヤキ	—	—	—		W65
3	不明木製品		2	不明	—	—	—		W66





No.	種類	遺構	層位	(単位: cm)						
				外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	器高	登錄番号	備考
1	須恵器 円筒形			—	—	—	—	(2.5)	E963	脚部に北緯
2	須恵器 円筒形			—	—	—	—	(1.6)	E964	脚部に北緯
3	須恵器 円筒形	ロクロナデ・縦割		—	6.6・12/24	—	(4.3)	E970		体部に意
4	須恵器 壺	ロクロナデ・下部削除・ハラケズリ	R区 基本層 第3層	ロクロナデ (27.5)・0.5/24	ロクロナデ (13.5)・10/24	14.8	E967			
5	須恵器 壺	ロクロナデ 底: 切り離し不明の後手 持: ハラケズリ		ロクロナデ (12.0)・9/24	ロクロナデ (5.8)・24/24	4.8	E969	底部にハラ描き		
6	土師器 壺	底: ハラケズリ・手持ち 持: ハラケズリ		ハラミガキ・ 底: ハラケズリ・手持ちへ 黒色処理	12.9・11/24	6.7・24/24	3.9	E923		
7	須恵器 水瓶	須恵器 脚部に北緯2条		—	2.8・24/24	—	(0.0)	E952	物類写真図版10 須恵器に2条の沈線	
8	脚付土器	SB956	I	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	E991	

第74図 その他の遺構・基本層の遺物（1）



No.	種類	遺構	(単位: cm)						備考	
			外 面	内 面	口径・残存率	底径・残存率	器高	登錄番号		
1	縫袖陶器	F区 基本層第1層	ロクロナデ		—	—	—	1.0	R474	口縫部片
2	縫袖陶器	F区 基本層第1層	ロクロナデ	飾刻花文	—	—	—	—	R475	
3	縫袖陶器	F区 基本層第1層	ロクロナデ		—	—	—	—	R476	
4	青磁 水柱	F区 基本層第1層	水柱		—	—	—	—	R477	
5	柳村土器 脚部	F区 基本層第1層	ヘラナデ		—	—	—	—	R546	写真図版24-6
6	須恵器 壺	F区 基本層第1層	ロクロナデ 底: 回転・ハラケズリ	ロクロナデ	(16.6)・7/24	(10.6)・20/24	3.7	R472		
7	土師器 高台付壺	F区 基本層第1層	ロクロナデ 底: 回転系 切のち貼付高台	ロクロナデ	14.9・5/24	7.6・13/24	3.5	R473	写真図版23-13	
8	須恵器 縫袖陶器	縫袖陶器	ロクロナデ	ロクロナデ	5.0・23/24	12.7・9/24	(13.3)	R551		
9	須恵器 高壺	G区 基本層第1層	ロクロナデ 縫袖有り	ロクロナデ	—	12.8・4/24	(10.3)	R482	写真図版23-14	
10	須恵器 高壺	G区 遺構検出面	ロクロナデ	ロクロナデ	—	12.7・9/24	12.7	R550		
11	土師器 壺	F区 遺構検出面	ヘラケズリ 底: 貼付有り	ロクロナデ	—	(12.4)・3/24	6.5	R545		

第75図 その他の遺構・基本層出土遺物（2）

第4章 総括

第1節 遺構の変遷

今回の調査では奈良・平安時代の道路跡、区画溝跡、掘立柱建物跡、堅穴建物跡、井戸跡、池状遺構、烟跡等を確認した。多賀城南面に広がる方格地割の区画では、北2西3区・北2西4区・北2東4区が調査対象範囲に含まれる。

(1) 古墳時代以前

近接地で樹形開式期の包含層を確認していることから、各地区に試掘トレンチを設けて深掘りをかけたものの、当該期の遺構・遺物を見ることはできなかった。

古墳時代ではG区中央部で中期の堅穴建物跡S 13637を発見した。検出面はいずれもIV層上面である。その他破片ではあるが後期の土師器が数点出土している。

(2) 8世紀前葉～後葉頃

多賀城市教育委員会や宮城県教育委員会による山王遺跡八幡地区・伏石地区における旧調査では、7世紀後半から8世紀中葉の区画溝跡S D180・3014・5633や材木跡、8世紀後半の区画溝跡S D461・2561・6557等を発見している。今回調査区では材木跡を確認することはできなかったが、G区中央部・F区南半部・E区南端部では、S D180・3014・5633の延長に当たる溝跡を確認しており、これらと一連の区画溝跡と考えられる。

A区では重複関係から、方格地割形成以前に遡る掘立柱建物跡が数棟確認できる（S B3629・S B3628）。SB3624については確言できないものの、東に強く振れる方がこれらと共通することから、同時期の可能性がある。また、A区中央部のS D3635や北端部のS D3633からは非クロロ土師器のみが出土しており、8世紀代の区画溝とみられる。

E区で発見した堅穴建物跡S 13669からは、8世紀代の土師器鉢や円面鏡が出土している。S I 3674・3702・3703・3704は、残存状態が悪く年代決定可能な遺物は出土しなかったものの、S I 3669と規模や方位が共通し、いずれも掘立柱建物跡よりも古いことから、この時期のものが含まれる可能性がある。

ほかにこの時期に該当する遺構としては、C区中央部の溝跡S D3666・3667・3664・3665・3662・3663が挙げられる。非クロロ土師器のみが出土しているが、SD180よりも新しいことから、概ね8世紀後半頃に位置付けられる。

(3) 8世紀末～9世紀前半頃

山王・市川橋遺跡では、8世紀後半以降になると、東西・南北両大路を中心の方格地割が形成される（鈴木2006・多賀城市史編さん委員会1997・武田2020・平川1999・宮城県教育委員会2018etc.）。今回調査区では方格地割を形成する道路網のうち、西3・北2道路跡が対象となった。

S X3647西3道路跡では5期時（A～E期） S X3654北2道路跡では3期時（A～C期）の変遷を確認した。調査範囲が狹隘なことから、交差点形状の変遷や各時期における両道路の詳細な対応関係は明らかにできなかったが、出土土器などから早ければ9世紀初頭頃までに西3道路が成立し、B区・D区にかけて、区画溝S D3697が取りつくとみられる。さらに北側ではS D3649東側溝に接続する区画溝S D3650が構築される。これらは当時の変遷（A～D期）を確認しており、西3道路東側溝と一緒に維持されたとみられる。E区中央部で確認した西3～北2道路交差点付近においては、道路の方向が不規則に歪んでおり、河川など自然地形による制約を受けたものと考えられる（本章次節参照）。

特殊遺物として、S D3650Aから出土した「篆升」銘墨書き土器が挙げられる。内面黒色処理を施す在地のクロロ土師器杯であり、底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ調整を施す。調整技法から製作年代は8世紀末～9世紀初頭に遡るものとみられる。この時期調査区付近に施薬・調薬や医療に関わる施設が所在したと考えられる。（註1）

北2西3区では側を有する井戸跡が同一地点で作り替えられ、継続して用いられている（S E3638A・B）。また、東西方向の区画溝S D3650や、南北方向の区画溝S D3634・S D3636等によって、区画が細分される。区画溝を境にS X 3643・3639・3642小溝群が方向を逆えて構築されており、この時期区画南半部は操作地であったとみられる。

北2西4区では側を有する井戸跡S E3651Aが構築される。同井戸跡は機能中に堅板を差し込んで改修されており（S E3651B）、側内から猿投窓系VI期古段階（尾野2003, 830年頃～860年頃）に位置づけられる縁袖陶器皿が出土している。掘立柱建物は出土遺物から年代を絞ることが難しいものの、宮城県による調査成果（宮城県教育委員会2018）によれば、9世紀前葉から中葉にかけて、やや西に傾く掘立柱建物跡や真北方向の掘立柱建物跡が主体となることから、S B3675・3680等がこの時期に該当するとみられる。また、今回調査区の西側に当たる宮城県調査区では、多賀城外で数少ない二面廻付建物跡が2棟（S B3413・3446）発見されていること、大戸産須恵器や「解文案・会津郡主政經」題蓋軸木簡の出土などから、会津郡出先機関の存在が指摘されており（宮城県教育委員会1997・2018）、S B3675・3680やS E3651はこうした施設と関わるものと考えられる。

(4) 9世紀後半～10世紀前葉頃

北2西3区のうちS D3650以南の区画に、掘立柱建物跡S B3646Aのほか、S X3623池状遺構が構築されており、区画の性格が大きく変化したとみられる。南廻を伴うS B3646A機能付土器に灰白色火山灰プロックが含まれることから、S B3646A機能中に灰白色火山灰が降下したとみられ、層中に灰白色火山灰が自然堆積するS X3623池状遺構との同時存在が推定される。9世紀中葉から後半頃にかけて、北2西3区に圓池を有する施設が成立したものと考えられる（第76図-1, 本章第3節参照）。また、S X3623池状遺構2層からは、仏像一部の可能性がある蓮瓣草木製品や舟形木製品、仏具である瓦鉢が出土しているほか、井戸跡S E3645側内堆積土及び旧調査区1号土壤からも瓦鉢が出土しており、他の時期と比べても仏教的色彩が顕著である。区画内に仏堂等の宗教施設が設置され、何らかの仏事が催された可能性がある（註2, 本章第4節（1）参照）。

確実にこの時期に位置付けられる掘立柱建物跡は少ないが、宮城県調査成果（宮城県教育委員会2018）によれば、9世紀後葉～10世紀後半にかけて東に傾く掘立柱建物跡が主体となることから、S B3692・3657・3658・3659・3626・3673・3672・3679・3681掘立柱建物跡は概ねこの時期に該当するとみられる。

(5) 10世紀後半以降

北2道路及び西3道路はいずれも10世紀後半頃まで機能したとみられるが、西3道路東側溝に接続する区画溝S D3650については、最も新しい段階の道路側溝に対応するものが確認できなかったことから、西3道路に先行して廃絶したと考えられる。

北2西3区では、掘立柱建物跡S B3646が同一地点で建て替えられている（C期）。S X3623池状遺構では、灰白色火山灰の自然堆積層の上層から、10世紀後半頃の須恵土器が多量に出土している（S X3623池状遺構第1層）。これらは一部油燈が付着する個体を含むものの、大半は食器として用いられたものとみられ、この時期に宴会などの共同飲食が盛んに行われたと考えられる（本章第3節参照）。また、

区画北側においても、南面付建物跡 S B 3688や、側を有する井戸跡 S E 3644が構築されているほか、西3道路東側溝及び北2道路北側溝からは多文字（呪文？第12図－3、第13図－1）が墨書きされた須恵系土器が出土している。

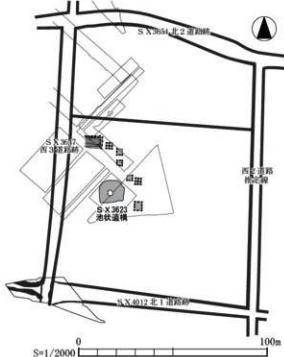
北2西4区では素掘りの井戸跡 S E 3693が確認できる程度であり、同時期の北2西3区に比べて閑散とした状況となる。

その後S X 3623池状遺構や西3・北2道路跡などは10世紀末～11世紀頃に堆積した黒色粘質土層（基本層序第II層）に覆われており、当地区における古代の遺構は、概ねこの時期までに廃絶したとみられる。

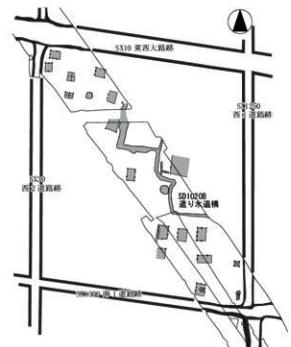
註1）薬升とは、薬品の調合に用いる計量具である『古事類苑』方技部。今回出土例（第16図－2）について、残存内法から復元すると、内容量は最大約280mlとなる。小片であるものの下野国府跡で同様の墨書きを持つ土器が出土している（栃木県教育委員会1987）。地方官衙における薬升の使用実態については詳らかでないが、諸国には国医師が置かれ国学で医生等の教育に従事したとされ、関連が窺われる。また、「延喜式」卷第37典薬寮には「寮家儲物。稱一箇、藥斗一口、薬升一口、鍼臼十口、鍼杆十枚、鍼匕五枚、薬六枚、漆中塗一枚、藥殿承塵椽綱一條、長三丈、幅十幅。行幸候縫幕一條、紺布幕一條。既隨損半者請替」とある。

註2）平安時代の貴族邸宅では、俗人も參列する法会や、仏像・經典の供養などの仏事が隨時催され、住宅全体を宗教空間としたり、住宅内に仏教施設を設けたという（上野2012）。また、圓池遺構を有する平安京右京三条一坊六町からは、鉄鉢形土器や水晶製經軸端など、仏教的要素がみられる遺物が出土しており、藤原良相が仏教を高く崇敬したこととの関連が指摘されている（財團法人京都都市埋蔵文化財研究所2013）。良相は左京六条の崇報院に小堂を設け、仏像を安置したという。『日本三代実録』貞觀9年（867）10月10日条「藤原良相薨」）

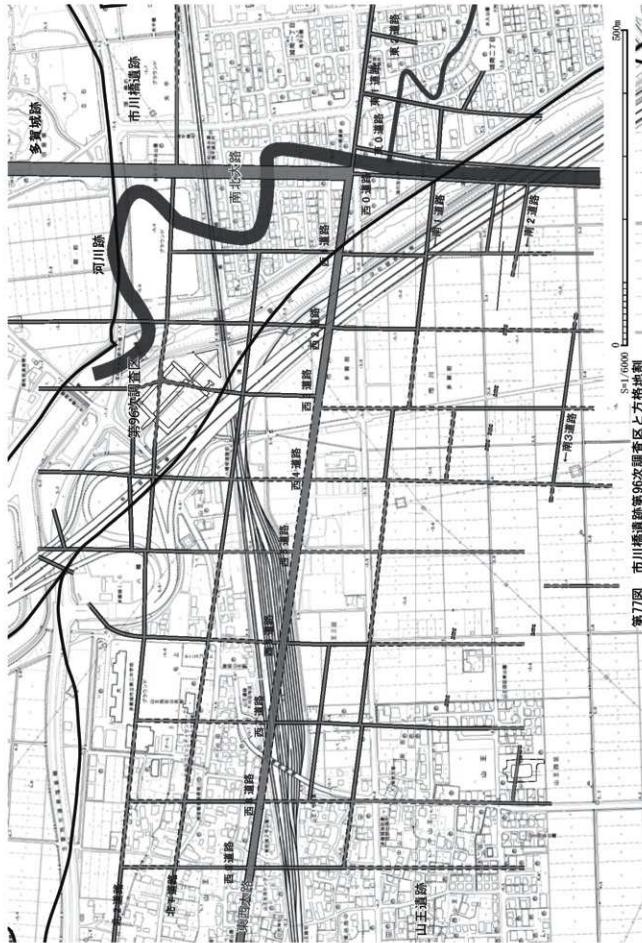
1. 北2西3区（市川橋遺跡伏石地区）
9世紀後半から10世紀前半



2. 南1西2区（山王遺跡多賀前地区）
B3期 9世紀後葉頃



第76図 多賀城周辺における平安時代前～中期の圓池遺構



第2節 道路跡の変遷

(1) SX3647西3道路跡（第11・78図）

S X3647西3道路跡は、両脇に素掘りの東西側溝 S D3649・3648を伴う。側溝で5時期（A～E）の変遷を確認した。また、地割内を細分する区画溝が東西側溝にそれぞれ取り付く。区画溝については時期を遡えて取り付けられており、一定しないものの、S D3650のみ同一地点で4時期（A～D）の作り替えが行われている。

路面は①と②の二つを確認しており、それぞれ①はC・D期、②はE期に対応する。①と②については遺物細片を多く含んでおり、人為的な路面構築土の可能性がある。A・B期に対応する仮想路面③は地山削り出しあるいは削平により失われたものと考えられる。

A期の側溝心々間距離は約9.5mである。この時期のみ、西側溝で東西方向の平行する溝跡が取りつく。旧調査で大部分が削平されたため遺存状態は悪いが、西3道路路面上に表れないことから、北2西4区内を細分する区画内道路と考えられる。東側溝ではS D3697・3650 Aが取りつくが、両者の間隔が広く、S D3697はA期のみで廃絶するため、それぞれ単独の区画溝と考えられる。

B期の側溝心々間距離は約5.6mであり、A期に対して幅を狭めて掘り直されている。D区でのみ西側溝の西側に西3道路と平行する南北溝を確認している。東側溝に接続する区画溝 S D3650 Bはやや北側に位置を変え、以後は一定の位置で改修される。

C期の側溝心々間距離は約6.6mであり、B期とほぼ同様であるが、両側溝ともにやや東側に移動する。東側溝にはS D3650 Cが取りつく。

D期の側溝心々間距離は約6.1mである。路面①の上層に灰白色火山灰が自然堆積していることから、火山灰降下以降に改修された道路と考えられる。東側溝にはS D3650 Dが取りつく。

E期の側溝心々間距離は約5.9mである。この時期の東側溝 S D3649に対応する区画溝は確認できず、S D3650は西3道路に沿って先行して廃絶したとみられる。

A期側溝から土師器壺A類（第12図-7）が出土しているほか、これに取りつくS D3650 Aから8世紀末～9世紀初頭頃の土師器壺B類（第15図-2）、須恵器壺G（第15図-3）が出土している。前代の遺物が混入した可能性は排除できないものの、これらより新しい時期の遺物は出土していない。したがって、早ければ8世紀末～9世紀初頭頃には西3道路の一部が構築された可能性がある。路面①の上面に灰白色火山灰が自然堆積していることから、路面①の構築は10世紀前葉以前であり、D期側溝に灰白色火山灰が二次堆積することから、D期側溝の埋没は10世紀前葉以降と考えられる。E期側溝からは10世紀後半以降の須恵系土器小型壺（第12図-1・2・3）が出土しており、上層に方格地割廃絶時の黒色粘土層（基本層第II層）が堆積していることから、10世紀後半頃までは機能しており、10世紀末～11世紀初頭頃には完全に埋没したと考えられる。

(2) SX3654北2道路跡（第11・79図）

S X3654北2道路跡は両脇に素掘りの南北側溝 S D3656・3655を伴う。側溝で3時期（A～C）の変遷を確認した。路面堆積層は確認しておらず、地山削り出しあつたか、後世の削平により失われたものと考えられる。今回調査区においては、側溝堆積土内に灰白色火山灰が含まれず、火山灰との層位関係は不明である。

A期の側溝心々間距離は約6.7mである。時期決定できる資料は出土していない。

B期になると、南側溝の位置がやや北側に移動する。側溝心々間距離は約4.6mであり、A期と比較し

てやや幅を狭めて構築される。

C期の側溝心々間距離は約4.5mであり、路面幅はB期とほぼ同様である。

北2道路A期の構築年代については判然としないが、B期側溝からは土師器壺（第13図-6）、須恵器壺（第13図-7）が出土しており、概ね9世紀前半～中頃の機能が想定されることから、A期はそれ以前と考えられる。C期側溝から須恵系土器小型壺が出土していることから、10世紀後半頃まで機能していたと考えられる。

平成元～8年度に実施した仙塩道路建設工事に伴う山王遺跡八幡・伏石地区及び平成18・19年度に実施した都市計画道路玉川岩切線建設工事に伴う市川橋遺跡伏石地区の発掘調査でいずれも3時期の変遷が報告されているが（宮城県教育委員会1997・2009）、今回の調査においても南北両側溝で3時期（A～C）を確認しており、概ね同様の変遷が確かめられた。

(3) 西3・北2道路交差点（第11・80図）

調査区北東側E区では西3～北2道路交差点を検出している。交差点北側で西3道路西側溝と北2道路北側溝、交差点南側で西3道路東側溝と北2道路南側溝の接続を一部確認した。交差点A～E期は西3道路A～E期に対応する。交差点東側で認められる道路形状の不規則な歪みについては、設計に際して旧河川等の自然地形に制约を受けた結果と考えられる。

今回確認した道路側溝の改修回数は、西3道路に対して北2道路が少ない。交差点南側の遺存状態が悪いことや、調査範囲が狹いことから、道路構築時から終末までの交差点形状の変遷及び各時期における相互の対応関係については明らかにできなかったが、交差点北側は西3道路C期以降東西優先型の交差点であることを確認した。

(4) まとめ

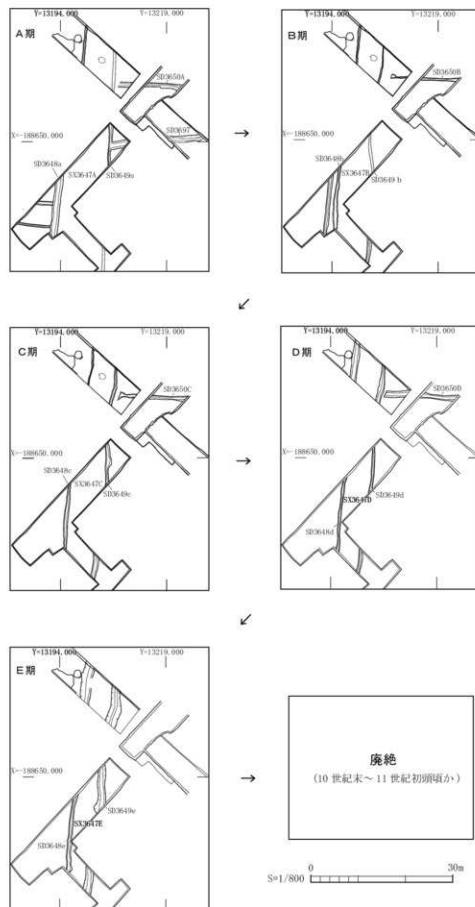
多賀城南面に広がる道路網のうち、南北大路から数えて西に3番目の南北道路である西3道路跡（SX 3647）及び東西大路から数えて北に2番目の東西道路である北2道路跡（SX3654）を確認した。西3道路では北1～2道路間、北2道路では西3～4道路間の様相が一部明らかとなった。また、北2西4区では区画内を細分する道路跡を、北2西3区では同様の区画溝跡を発見した。

調査区北東側E区では西3～北2道路交差点を一部検出している。交差点形状の変遷については部分的な理解に留まるが、西3道路C期以降交差点北半部は東西優先型であり、廃絶までその形状が維持されたとみられる。

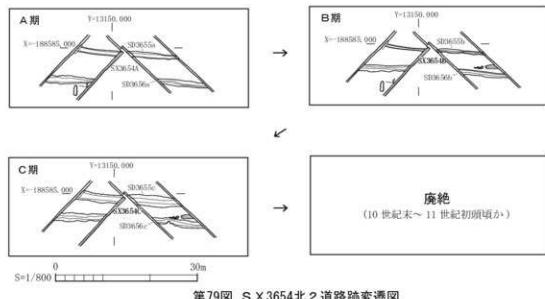
西3道路の機能年代については、A期が概ね8世紀末～9世紀前半頃、B期が9世紀中葉頃、C期が9世紀後半～10世紀前葉頃、D期は10世紀後半～10世紀末頃と考えられる。

施行当初の交差点形状が不明確なこと、北2道路A期側溝から年代決定資料が得られなかつたことから、北2道路の成立年代については確実に難いが、B期以降の出土遺物や基本層第II層との関係から推定すると、西3道路B・C・D期が北2道路B期に、西3道路E期が北2道路C期に概ね対応すると考えられる。西3道路E期側溝や北2道路C期側溝から10世紀後半以降の須恵系土器小型壺が出土しており、この頃まで機能していたとみられる。

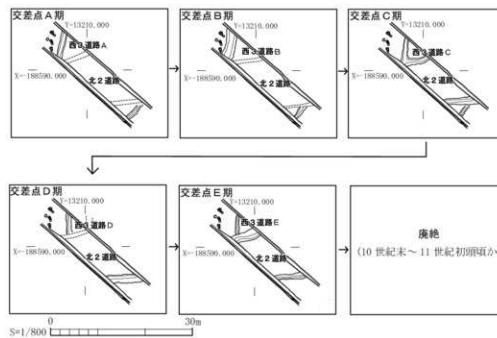
縁辺部の北2道路については、灰白色火山灰降下後に再整備されず廃絶したとされる（鈴木2006etc.）が、今回調査区の道路跡はいずれも10世紀後半頃まで機能していたとみられ、最終期道路側溝の直上はいずれも古代の最終堆積層である黒色粘土層によって覆われていることから、概ね10世紀末～11世紀前葉頃までに埋没したものと考えられる。



第78図 S X3647西3道路跡変遷図



第79図 S X3654北2道路跡変遷図



第80図 北2・西3道路交差点変遷図

第3節 S X3623池状遺構について

(1) 遺構の概要と旧調査区との関係（第58・81図）

S X3623池状遺構は、A区西半部で発見した環状の落ち込み遺構である。昭和57年度第2次調査で発見した方形落ち込み及び平成29年度第95次調査で発見したS D3572と同一の遺構とみられる（多賀城市教育委員会1983・2018）。第96次調査内に位置するのは概ね遺構の南半部に当たり、北半部の平面プランは第2次調査に基づいて作成した。堆積層は中層に灰白色火山灰を挟んで上下の2層に分層出来る。いずれも植物遺体を多く含む湿地性の自然堆積層である。

今回調査時のセクションベルト北端で堆積層の高まりを確認していることや、第2次調査時の記録等から、中央に島状の基盤層を残し、環状に溝を巡らせて人工的に造成された落ち込みとみられ、その際S B3624掘立柱建物の柱穴を大きく削平している（第58図）。

湧水源や導水施設の有無は不明であり、玉石等の護岸施設は認められないが、平面プランや堆積状況、遺物出土状況等から、中島を有する素掘りの池跡と考えられる。汀線は比較的緩やかであり、規模は南北約12.5m、東西約11.4m、中島部分を含めた総面積は約137m²に及ぶ。（註1）

(2) 土器群の年代

各層からは完形品を含む土器類が多数出土している。これらの遺物は使用後断続的に廃棄されたものであり、埋没の時間幅は一括整理資料等に対して比較的長期に渡るとみられるが、本遺構の機能年代に関わることから、以下やや詳しく分析を行う。破片を含めた総数は別表のとおりである（第82図-1）。

灰白色火山灰の下層に当たる第2層からは、土師器壺・瓦鉢、須恵器壺・甕、須恵系土器壺・台付鉢、その他仏教関連木製品が出土している（第83図下段）。組成の大部分を占めるのは土師器壺であり、「奉」墨書き土器や油煙が付着したものなど、特殊な用途に供された個体が散見される。須恵系土器は壺と鉢が1点のみ出土している。

多賀城周辺におけるロクロ整形土器師は、8世紀末頃に出現し、時代が下るにつれ①底部調整省略・回転糸切無調整の割合が増加、②底部内の放射状ヘラミガキ增加、③口径に対する底径比率の縮小という傾向が明らかとなっている（多賀城跡調査研究所1991・1993etc.）。

第82図-2には第2層出土土師器壺の口径・底径二系列による法量散布図を示した。分布の中心は9世紀後葉頃の山王遺跡多賀前地区SK820出土土器群（宮城県教育委員会1996a）と重なるが、SK820出土土器の大部分が口径/底径比0.41～0.49以内に集中し、逸脱しても±0.05程度で収まるに対し、S X3623第2層出土土器には口径/底径比0.36未満のものや、0.55以上の個体が複数認められ、土坑等の一括廃棄資料と比較すると散漫な分布域を示している。さらに底部調整を省略しない個体や、須恵系土器壺・鉢が出土しており、SK820の時期のものを中心としつつ、前後の時期の土器を客観的に含む組成である。

したがって、第2層については、9世紀後半の中でもやや古い時期から、10世紀初頭頃までに堆積したとみられ、土器類はその間断統続的に廃棄された遺物と考えられる。仏教関連木製品は第2層最下層に覆われる遺構底面から出土したものであり、9世紀後半頃の資料と考えられる。

灰白色火山灰の上層に当たる第1層からは須恵系土器壺・小型壺、土師器壺・甕、須恵器壺・甕、石製品等が出土している（第83図上段）。組成の大部分を占めるのは須恵系土器壺・小型壺であり、須恵系土器高台付皿及び土師器が客観的に含まれる。多賀城跡の土器編年（白鳥1980）におけるE～F群土器に該当するとみられる。このうち須恵系土器壺類の法量を見ると、口径10～12cm前後が主体であり、口径13cmを超える壺類の出土はない。

10世紀から11世紀前半頃にかけての須恵系土器壺類については、時代が下るにつれて①小型壺の法量縮小、②器形の低平化、③大型壺と小型壺の法量分化という傾向が明らかとなっている（古川2007、高橋2018etc.）。

第82図-3には第1層出土須恵系土器壺の口径・器高の二系列による法量散布図を示した。

分布の中心は山王遺跡第68次調査S E1376出土土器群（多賀城市教育委員会2010）、山王遺跡町地区SK2850出土土器群（宮城県教育委員会1998）と重複する範囲に集中し、より新しい段階（S X2449等）に出現在する口径9cm代の小型壺がわざかに認められる。

多賀城周辺における10世紀前後の土器群を再検討した高橋編年（高橋2018）では、S E1376・SK2850は10世紀後半頃のE 2群に、S X2449は10世紀末から11世紀前葉のF 1群に該当する。したがって、第1層出土土器の大部分は10世紀後半頃までに廃棄されたとみられるが、遺構機能年代の下限はやや新しく、10世紀末以降に位置づけられる。直上の僅には北2道路及び西3道路を覆う黒色粘質土（基本層第II層）が堆積していることから、概ね11世紀前葉頃までは完全に埋没したものとみられる。（註2）

(3) S X3623の機能年代と北2西3区

以上のように、S X3623池状遺構は9世紀後半のうち比較的古い時期に構築され、10世紀末頃までの約1世紀～1世紀半に渡り機能したと考えられる。

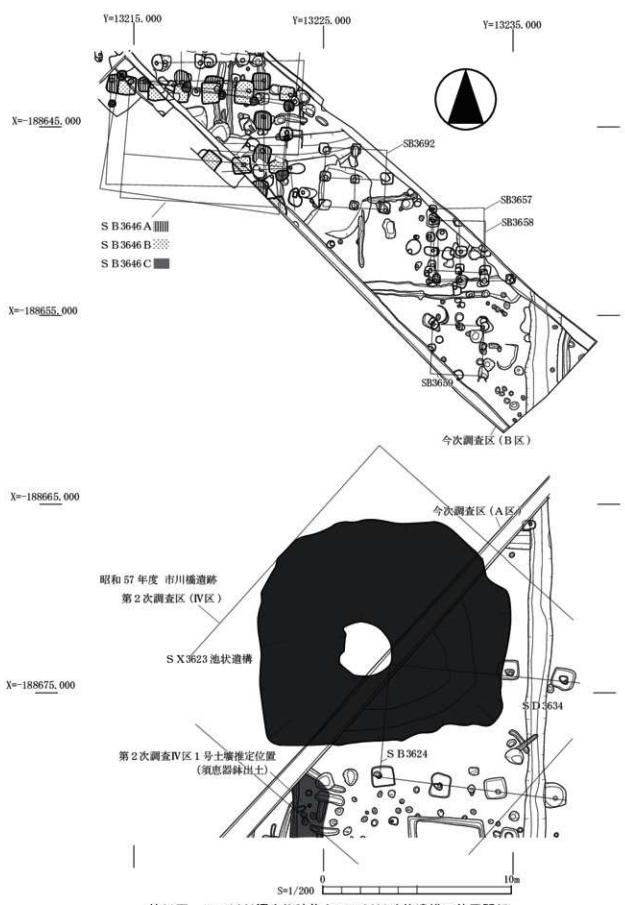
周辺では、北側約20mの位置に大型掘立柱建物S B3646が構築されている。この建物は基本層第3層上面から掘り込まれており、理土内に灰白色火山灰を含まないことから、概ね9世紀後半頃の構築が想定される（S B3646A）。その後灰白色火山灰降下後に2度の建て替えが行われており（S B3646B・C）、S X3623との同時存在が推定できる。III層上面から掘り込まれることや主軸方位などから、S B3692・3657・3658・3659・3626についても9世紀後半から10世紀代に位置づけられる。S X3623池状遺構を囲むように建物が配置されており、この時期園地を有する邸宅が成立したものとみられる（第76図-1）。

調査範囲の制約等から他の建物を含めた区画全体の変遷については不明な点が多いが、9世紀後半以降になると、北2西3区南半部に池状遺構S X3623が構築され、須恵系土器の出土が集中する10世紀後半頃には、土器の大量消費を伴う共食・飲食・儀礼行為が盛んに催されたようである。

なお、本章次節(1)に詳述する通り、S X3623堆積層のうち、灰白色火山灰下層の第2層からは、舟形木製品・蓮弁状木製品・瓦鉢（土師器鉢）が、S X3623池状遺構南西部に近接して所在したとみられる昭和57年度第2次調査IV区1号土壇からは瓦鉢（須恵器鉢）が出土している（第81図、多賀城市教育委員会1983）。こうした仏教関連遺物の出土は、方格地割内においても僅少であり、当該期における北2西3区やS X3623池状遺構の性格に関わるものと考えられる。

註1） この時期平安京では、「簷宮」の邸跡として知られる右京三条二坊十六町の池1（財团法人京都市埋蔵文化財研究所2002）や、藤原良相邸とされる右京三条一坊六町の池250（財团法人京都市埋蔵文化財研究所2013）等が常められている。右京三条二坊十六町池1は打玉石で敷き詰めて洲浜状に仕上げるに對して、右京三条一坊六町池250は護岸施設を持たない素掘りの池跡である。規模は右京三条二坊十六町の池1が約560m²、右京三条一坊六町の池250が約350m²である。

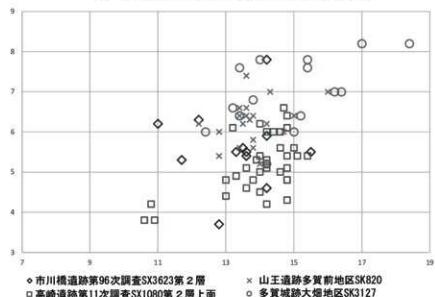
註2） 高橋2018ではE 2群土器について、型式的にE 2a（口径12～13cm主体）・E 2b（口径10～11cmを含む）に細分しているが、S X3623第1層では、こうした型式的な変化を層位に確かめることはできなかったことから、一括してE 2群として取り扱った。



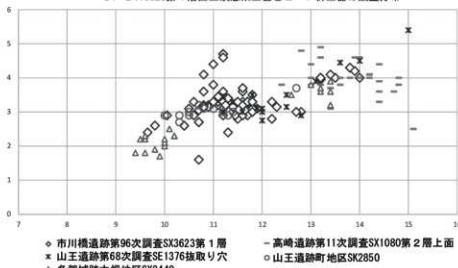
第81図 S B3646掘立柱建物とS X3623池状遺構の位置関係

1. S X3623出土遺物数量表								
	土師器坪	土師器壺	須恵器土器坪	須恵器土器小坪	須恵器坪	須恵器壺	H	その他
車上基本層第3層 合計168点	71	8	1	38	15	22	11	2
第1 層 合計814点	231	35	17	400	38	55	23	15
第2 層 合計335点	112	60	1	0	43	76	22	21

2. S X3623第2層出土土器とD～E群土器の法量分布

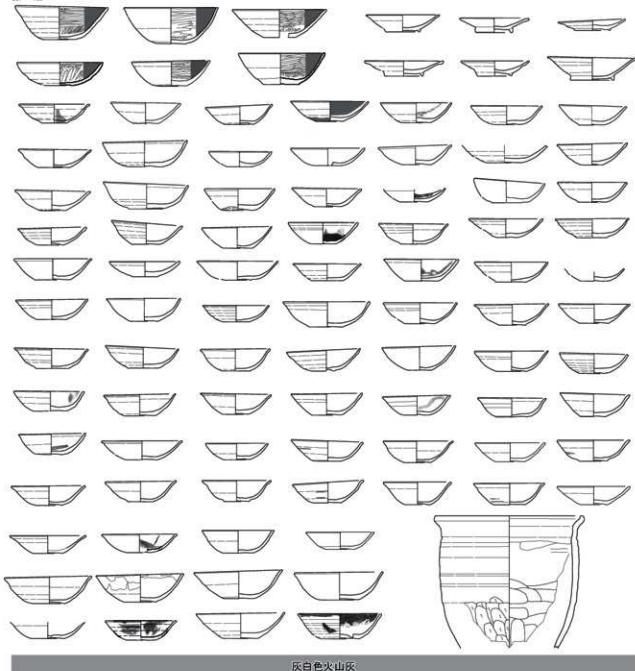


3. S X3623第1層出土須恵器とE～F群土器の法量分布

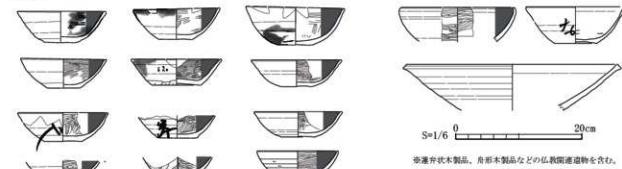


第82図 S X3623出土遺物数量表・法量分布図

第1節



第2節



第83図 S X3623池状遺構出土土器

第4節 特殊遺物

(1) 仏教関連遺物

今回調査区からは舟形木製品・蓮弁状木製品や二彩陶器小壺蓋のほか、瓦鉢（土師器鉢）や須恵器水瓶が出土しており、同一地点で行った昭和56・57年度旧調査区（市川橋遺跡第1・2次調査）からは二彩陶器瓶類、瓦鉢（須恵器鉢）が出土している。以下、旧調査区のものも含め、伏石地区における仏教関連遺物について検討する。（註1）

舟形木製品・蓮弁状木製品はS X3623池状遺構堆積層のうち、灰白色火山灰自然堆積層下層にあたる第2層に覆われ、遺構底面からまとまって出土した（巻頭写真図版3下段、巻末写真図版2下段）。内訳は舟形木製品2点（第84図1・2）、蓮弁状木製品4点（第84図3～6）である。S X3623池状遺構第2層出土土器類の特徴や、灰白色火山灰との層位関係から、9世紀後半頃を中心とした年代が与えられる。

舟形木製品のうち第84図1は板部の外面に1.5cm前後の鑿状工具による加工痕跡が明瞭に認められ、柄部付近に穿孔が施されている。内外面は概ね平坦であるが、外面側周縁部は斜方向にケズリが施され、両肩部はやや細く、なで肩に仕上げられている。対して第84図2は腐食が著しく、板部・柄部とともに加工痕跡は不明瞭である。

蓮弁状木製品のうち、第84図3は小型の梢円形であり、下半部に1箇所の穿孔が施されている。内外面ともに1cm前後の鑿状工具によって整形されており、先端部は強く外反する。第84図4は矩形気味の梢円形であり、下半部に上下2箇所の穿孔が施されている。内外面ともに1.2cm前後の鑿状工具によって整形されており、先端部の反りはやや緩やかである。第84図5は梢円形であり、下半部に上下2箇所の穿孔が施されている。内外面ともに1.2cm前後の鑿状工具によって整形されており、先端部はやや強く外反する。第84図6は不整形であり、内面は平坦である。下半部側面は被熱を受けて欠損している。（註2）

舟形木製品は如来・菩薩立像に付随する板光背（舟形光背）に、蓮弁状木製品は仏像台座や香炉台座、天蓋などの莊嚴・供養具に用いられる蓮弁に類似している（石田1976・文化庁1974）。樹種は蓮弁状木製品がいずれもカヤ材であるのに対して、舟形木製品は精巧なもの（第84図1）がカヤ材であり、粗雑な作りのもの（第84図2）がミヤキ材である。

ケヤキとカヤは、いずれも仏像雕刻の用材とされる樹種である。舟形木製品の柄部や、蓮弁状木製品の下部穿孔から、紙等を挿入して他の部材と結合させた、複式材の木製品とみられ、樹種の共通性や出土状況の一括性等から、関連する仏教系彫刻の一部と推察される。（註3）

以上のことから、S X3623池状遺構出土の舟形木製品・蓮弁状木製品については、当地区で用いられた仏像や蓮台の一部とも考されるが、詳細については、なお宗教史学・美術史学的な検討を要する。

瓦鉢は3点出土している。内訳は第96次調査で土師器鉢が2点（第84図7・8）、第2次調査で須恵器鉢が1点（第84図9）である。

土師器鉢（第84図7）はS X3623第2層から出土した。内外面にミヤキ、内面に黒色処理が施され、口縁部は緩やかに内折する。前述の舟形木製品や蓮弁状木製品と同一の遺構・層位から出土しており、こちらも9世紀後半頃を中心とした年代が与えられる。

土師器鉢（第84図8）はS X3645側内堆積土から出土した。ロクロ整形土器であり、底部へラ切り後、底部周縁から体部下辺にかけて回転へラケズリ調整される。底部は平底で肩が張り、口縁部はやや強く内折する。内面には黒色処理・放射状ミヤキが施されている。体部外面に「佛□□」の墨書、体部外面から底部にかけて「千万南□□」等の墨書きが見える。井戸側抜き取り穴に灰白色火山灰が自然堆積している

こと、共伴する土師器坏で底部の切り離しが判別可能なものについては、全て回転糸切り・底部内面放射状ヘラミガキであることから、概ね9世紀後半頃の年代が与えられる。

須恵器鉢(第84図-9)は第2次調査IV区1号土壙から出土した(多賀城市教育委員会1983)。第96次調査では1号土壙を確認することは出来なかったものの、他の遺構との位置関係等から、第96次調査A区西端部、S X3623坑状遺構南西付近に存在した遺構とみられる(第81図)。共伴する土師器坏は、クロ整形で体部外面にヘラケズリ調整を、底部内面に放射状ミガキを施す。須恵器坏はヘラ切りのものが1点と回転糸切無調整のものが2点あり、多賀城跡大烟地区SK2167(宮城県多賀城跡調査研究所1993)等と共通することから、概ね9世紀中頃の資料と考えられる。

須恵器水瓶は3点出土した。いずれも別個体である。第84図-10は頸部から口縁部にかけてのもので、3本の沈線を有し、口縁部はラババ状に外反する。第84図-11は肩部から口縁部にかけてのもので、頭部中央に沈線が巡り、口縁部は受口状である。第84図-12が台部から頸部にかけてのもので、体部は卵形に整形されている。

二彩陶器小壺(84図-13)は、SD3697検出面から1点出土した。軟質の胎土に淡緑色の縁釉及び透明釉を施している。県内では県道泉一塩釜線建設工事に関わる市川橋遺跡発掘調査(宮城県教育委員会2000)、仙台市郡山麻寺跡(仙台市教育委員会1987)等に類例が認められる。

二彩陶器瓶類(多口瓶?)、第84図-14・15・16)は旧調査区(昭和56年度第1次調査III区、多賀城市教育委員会1982)から3点出土した。胎土や輪軸から、いずれも同一個体とみられる。軟質の胎土に淡緑色の縁釉及び透明釉を施している。三彩・二彩陶器小壺については、神事・仏事に際して用いられた祭儀具であり、仏教儀礼に限定されるものではないが、三彩・二彩陶器瓶類の用途については仏器とされる(高橋1994)。

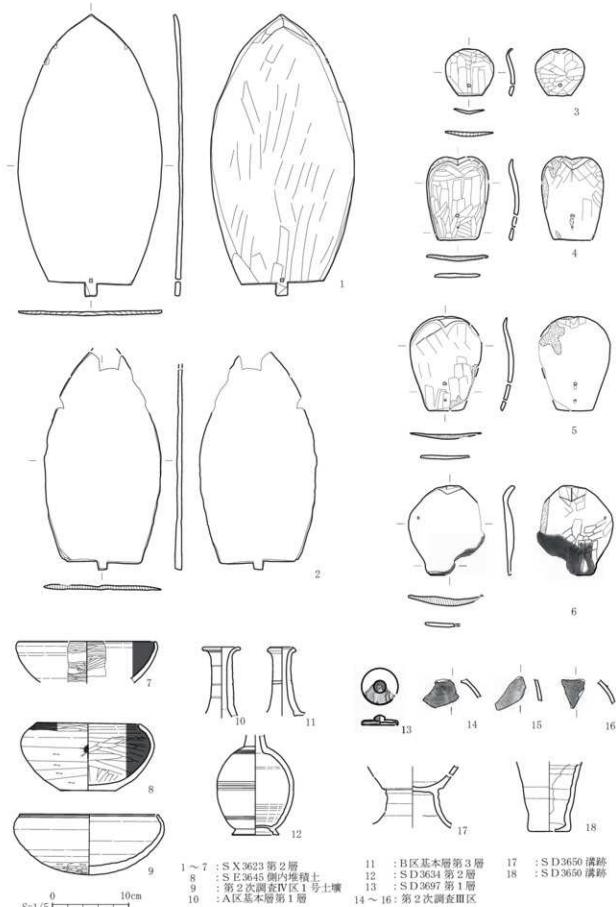
他に今回調査区出土遺物の中で、仏教系遺物の可能性があるものに、花瓶説(佐野1998)が提唱される壺G(第84図-18)、土師器高杯(高杯形香炉?)、第84図-17)、基本層第I層から出土した獸脚(第74図-8、第75図-5)等がある。SD3623第2層底面から出土した漆器(第84図-2)についても、舟形木製品・蓮弁状木製品と同一場所で発見されたケヤキ製品であり、関連が窺われる。

以上のように、伏石地区からは仏教系影刻の一部とみられる蓮弁状木製品・舟形木製品のほか、瓦鉢・水瓶・二彩陶器瓶類等の仏具、仏具として用いられた可能性がある二彩陶器小壺等が出土している。特に南半部の北2西3区から集中して出土しており、他区画と比較して仏教的色彩が際立つ。この傾向は9世紀半ば~10世紀前半頃にかけて顕著であり、区画内に仏堂等の宗教施設が存在した可能性が高い。

註1) 多賀城外における瓦鉢(鉄鉢形土器)は、市川橋遺跡伏石地区で3例(多賀城市教育委員会1983、本書)、同城南地区で1例(多賀城市教育委員会2003)、高崎遺跡で1例(多賀城市教育委員会1999)、多賀城麻寺で4例(宮城県教育委員会・多賀町1970)の出土が報告されている。

註2) 蓼弁状木製品については、方格地割西西部に当たる山王遺跡第214次調査SE3125から類例が出土している(多賀城市教育委員会2022)。9世紀後半の資料9点(カヤ材)であり、年代・樹種とともにSX3623例と共通点が見られる。同調査区で出土した9点は未製品とみられ、蓼弁状木製品製作工程についての検討材料となる。

註3) 平安期における東北地方の仏像では、一般的にケヤキが用いられたものに対し、仙台市十八夜御室音堂菩薩立像は、畿内で好まれたカヤが例外的に選択されたことなどから、陸奥国府との関わりが指摘されている(長岡2014)。



第84図 伏石地区出土の仏教関連遺物

(2) 施釉陶器・磁器

第96次調査区内からは二彩陶器・綠釉・灰釉陶器及び青磁が出土している。二彩陶器は小壺蓋・綠釉陶器・灰釉陶器の器種は壺皿・瓶類・青磁は楕皿類と水注である。さらに旧調査区からは二彩陶器瓶類や白磁碗も出土している。

第86図-1～11は綠釉陶器である。破片資料が多いが、それぞれ別個体である。第86図-2は96次調査S E 3651B井戸跡の側内堆積土から出土した。尾野編年(尾野2003・2008)ではVI期古段階(830～860)に位置付けられる。第86図-4・8は内面の陰刻花文に細かい刷毛状工具が用いられ、尾野編年VI期古～中段階(830～890)の範疇に収まる。いずれも尾張産ないし東海西部産とみられる。

第86図-12～33は灰釉陶器である。破片資料が多いが、それぞれ別個体である。第86図-14は緩い形状に広がる角高台を持ち、尾野編年VI期古(830～860)に位置付けられる。第86図-15は見込みに重ね焼きの痕跡を持ち、鈍い稜を持つ三日月高台であり、尾野編年VI期中(860～890)に位置づけられる。

第86図-34～37は越州窯系青磁である。第86図-35は碗の口縁部であり、淡青緑色の釉を施す。第86図-34・36・37は水注であり、第86図-36は把手部分とみられる。いずれも濃緑色の釉を施しており、釉調等から同一個体とみられる。

第86図-39～42は二彩陶器である。小壺蓋(第86図-39)は今回調査で、瓶類(第86図-40～42)は第1次調査で出土したものである。

伏石地区で出土した施釉陶器・初期貿易陶器について、旧調査区(第1次調査:約1500m², 第2次調査:約1200m², 第10次調査488m², 第95次調査:460m²)と今回調査区(第96次調査:2700m²)を合わせると、計131点が出土している。各調査次数ごとの内訳は下表第85図のとおりである。第96次調査出土のものは綠釉・灰釉ともに尾張産・東海西部産のみであり、旧調査区のものについても山城・近江産のものは認められない。

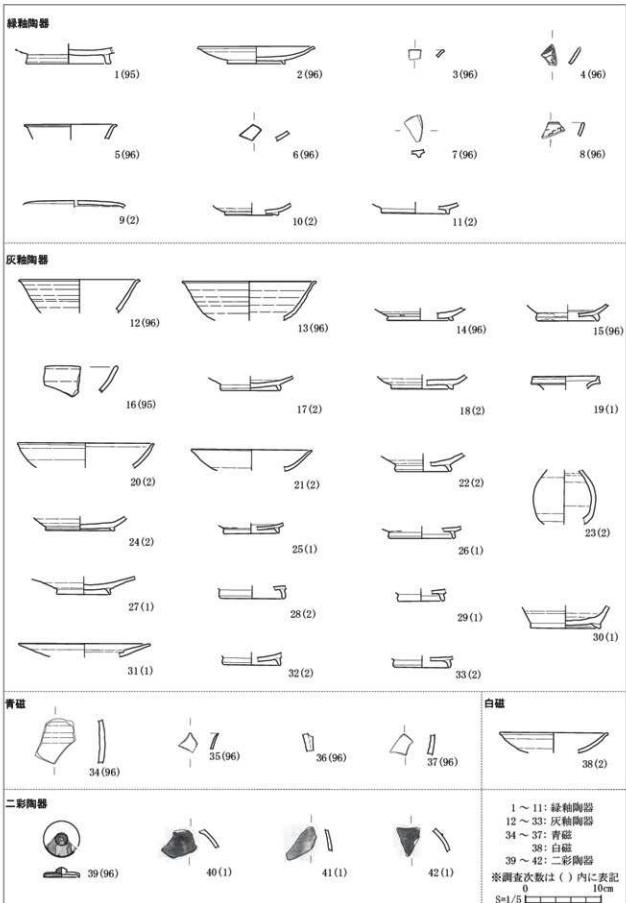
調査面積100m²あたりの破片出土点数は1.20であり、国司館が所在したと考えられる山王遺跡千刈田地区及び多賀前地区に比べると少ないものの、その他の地区と比較すれば、施釉陶器類の出土数自体はやや多い傾向である(宮城県教育委員会1996b)。綠釉陶器が全体の20%以上を占める点は、国府やその関連遺跡に認められる特徴であり、多賀城跡・多賀城廬跡における組成と共通している(高橋1994, 宮城県多賀城跡調査研究会2020)。城外の遺跡としては、綠釉陶器の比率が多い傾向が窺える。

また、城内においても出土が稀な越州窯系青磁の水注や、二彩陶器が出土している点は注目される。青磁はいずれもF区南半部やB区付近からの出土である。二彩陶器瓶類については、本節前項記載のとおり、仮具と考えられる。

产地・時期等の詳細な検討については今後の課題であるが、綠釉陶器の占める割合の高さや、類例の少ない特殊製品の出土は、9世紀から10世紀にかけての当地区的性格を反映している可能性がある。

	緑釉陶器	反釉陶器	二彩陶器	青磁	白磁	総計
楕皿類	壺皿類	楕皿類	小壺・瓶	楕皿類	楕皿類	
0	0	16	6	0	3	0
17	1	12	2	0	0	0
4	0	45	3	0	0	0
1	0	2	0	0	0	0
7	1	4	1	1	0	0
29	2	79	12	1	3	1
						131

第85図 伏石地区出土施釉陶器・磁器数量表



第86図 伏石地区出土の施釉陶器・磁器

(3) 陶硯

昭和56・57年度旧調査区、平成29年度第95次調査(確認調査)、今次調査区から円面硯や風字硯等の陶硯類が出土している(第87図)。

円面硯は全て脚部に線刻や透かしを施す圓足円面硯であり、内堤を有するものと有さないものに分かれる。前者はさらに硯面が溝あるものと水平なものがある。風字硯は全体形状が分かるものは少ないが、残存部分で内堤が確認できるものはない。

第87図-1は圓足円面硯である。脚部はハの字状に開き、縦方向の線刻と方形ないし十字形の透かしを施す。透かしは対角線上に合計4箇所あり、透かしと透かしの間の線刻は15条である。硯面は強く渋曲し、直立気味の内堤と、外に向かって開く外堤が貼り付けられている。焼成は堅密であり、精良な胎土を用いて灰白色に仕上げられている。側面部裏側にヘラ描き「占口」が確認できる。墨痕及び摩耗痕は確認できず、磨墨頻度は比較的少なかったと考えられる。

第87図-2は圓足円面硯である。脚部に横方向と斜格子状の線刻を施す。透かしの形状は不明である。硯面の渋曲は頗著でなく、直立気味の内堤・外堤が貼り付けられている。水平方向の線刻を2条施して区画を作り、斜格子線刻を配置している。線刻の断面は薬研状である。硯面の一部に墨痕・摩耗痕が確認できる。

第87図-3は圓足円面硯である。脚部は寸胴形であり、直立気味に立ち上がる。十字形の透かしと縦方向の線刻を施す。透かしは末広があり、クローバー状を呈する。線刻の断面は薬研状であり、1~2mm程度の比較的深い掘り込みが確認できる。硯面は水平であり、直立気味の内堤と、外に向かって開く外堤が貼り付けられている。墨痕は肉眼で観察できないが、頗著な摩耗痕を持ち、光沢が肉眼で確認できる。

第87図-6は第2次調査で発見された円面硯である。破片ではあるが、径20cm以上に復元される大型品であり、脚部はハの字状に開く。

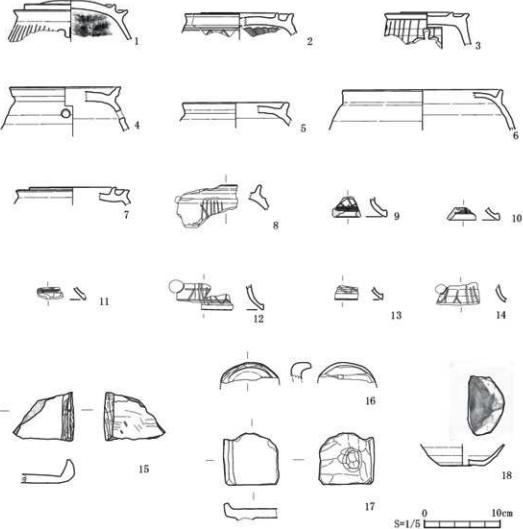
第87図-8~14は圓足円面硯の脚部片である。径を復元できるものは少ない。いずれも斜格子・縦・曲線による線刻を施しており、円形の透かしが確認できる(第87図-8・12・14)。

第87図-15~17は風字硯である。粘土板外縁を立ち上げて堤とし、ヘラ状工具によるケズリで整形している。このうち第87図-15~17は硯頭部、第87図-16は硯尻部の一部のみが残存する。第87図-15・16は肉眼で摩耗痕が確認できる。

第87図-18は須恵器坏の内面を利用した転用硯である。墨痕は頗著であるが摩耗痕は認められない。墨液を濁え、パレットとして利用したものとみられるが、当個体を用いた磨墨頻度は比較的少ないとみられる。回転糸切り無調整の須恵器坏であり、9世紀中頃以降のものと考えられる。

以上のように、破片資料が大部分ではあるものの、当地区からは古代の陶硯類が複数出土している。抽出できた資料は定型硯17点・転用硯1点であり、定型硯の内訳は円面硯が14点、風字硯が3点である。区画内における出土量の偏差は頗著でない。これらは多くが遺構外からの出土であり、直接的に年代が分かれる資料は少ないが、S-13669出土資料など一部8世紀代に遡る資料が認められ、官人や僧侶等の識字層による活動が行われていたとみられる。

古代の陶硯のうち、円面硯が7世紀頃から用いられたのにに対し、風字硯は長岡京期前後に出現する硯とされる。陸奥中部においては、8世紀前葉から円面硯が、8世紀末~9世紀初頭頃に風字硯の生産が開始され、9世紀前葉頃には円面硯の生産が終了する(村田2018)。当地区で出土した陶硯についても、形態的に7世紀代に遡るものは見出せず、概ね8~9世紀代のものと考えられる。



	種類	調査次数	遺構	層位	墨痕	摩耗痕
1	円面硯	第96次	S13669	I層	△	△
2	円面硯	第96次	SD3655	I層	○	○
3	円面硯	第96次	-	B区第III層	○	◎
4	円面硯	第1次	-	-	-	-
5	円面硯	第1次	-	-	-	-
6	円面硯	第2次	-	-	-	-
7	円面硯	第2次	-	-	-	-
8	円面硯	第95次	-	Ⅰ層	-	-
9	円面硯	第96次	-	B区第III層	-	-
10	円面硯	第96次	-	B区第III層	-	-
11	円面硯	第2次	-	-	-	-
12	円面硯	第1次	-	Ⅱ区第Ⅱ層	-	-
13	円面硯	第1次	-	Ⅱ区第Ⅱ層	-	-
14	円面硯	第1次	-	Ⅱ区第III層	-	-
15	風字硯	第95次	-	遺構検出面	○	◎
16	風字硯	第96次	-	A区第I層	△	○
17	風字硯	第2次	-	V区第V層	△	△
18	転用硯	第96次	SE3638B	4層	◎	△

【墨痕・摩耗痕】 △ 騒動できないもの ○ 騒動できるもののないもの ◎ 騒動するもの

第87図 伏石地区出土の陶硯

第5節まとめ

宅地造成工事に伴う市川橋遺跡第96次調査（宮城県多賀城市市川字伏石）は、平成29年度から31年度にかけて行った本発掘調査であり、面積約7,200m²が調査対象となった。

出土遺物は平箱総数で478箱、大部分が奈良・平安時代に帰属する須恵器・土師器類である。近接地で樹形圓式期の遺物包含層を確認していることから、數か所に試掘トレンチを設けて深掘りをかけたものの、当該期の遺物包含層や弥生土器を発見することはできなかつた。堆積層及び表土中を含めると、古墳時代及び近世の遺物が少量出土しているが、中世陶器は出土していない。

調査では古墳時代中期・奈良・平安時代の遺構を発見した。奈良時代には区画溝SD180のほか、小区画溝や掘立柱建物、堅穴建物が構築される。平安時代以降、北2・西3道路が構築されると、掘立柱建物や側を持つ井戸等が主体となり、大きく景観が変化したものと考えられる。9世紀後半頃には北2西3区で園池を有する施設が成立し、10世紀末頃まで存続する。特に9世紀中葉から10世紀前葉頃にかけては、北2西3区で仏教系遺物の出土が顕著であり、区画内に仏堂等の宗教施設が所在した可能性が高い。古代の遺構は概ね11世紀前葉頃までに廃絶したとみられる。

参考文献

- 石田作也他1976『新版仏教考古学講座』第5巻 仏具
- 上野透之2012「古代の貴族住宅と宗教—居住空間における信仰と儀礼—」『平安京と貴族の住まい』京都大学学術出版会, pp. 327-361
- 宇野浩夫1982『井戸考』史林 65-5, pp. 623-661
- 尾野善裕2003「古代の手張・美濃における縦軸陶器生産」『古代の土器研究 平安時代の縦軸陶器・生産地の様相を中心にして』, 古代の土器研究会第7回シンポジウム, pp. 20-37
- 尾野善裕2008「古代の縦軸陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集, pp. 79-92
- 神奈川県教育委員会2014『発掘された御舟と仏具—神奈川の古代・中世の仏教信仰—』
- 考古学から古代を考える会2000『古代仏教遺物集錦 開闢』
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2002『平安京右京三条二歩十五・十六町—「睿宮」の邸宅跡—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21号
- 財团法人京都市埋蔵文化財研究所2013『平安京右京三条一坊六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所収集調査報告2011-9
- 佐野五十三1998「須恵器花瓶の成立—仏の世界から安婆の世界へ—」『静岡県考古学研究』30, pp. 253-273
- 白鳥島一1980『多賀城跡出土土器の変遷』『研究紀要』VII 宮城県多賀城跡調査研究所, pp. 1-38
- 鈴木季行2000『多賀城外の方格地帯』『第32回城壁官衙遺跡検討会資料集』, pp. 86-97
- 仙台市教育委員会1987『都山遺跡Ⅰ-昭和61年度発掘調査概報-』仙台市文化財調査報告書第96集
- 多賀城市教育委員会1982『高崎・市川橋遺跡調査報告書—昭和56年度発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第3集
- 多賀城市教育委員会1983『市川橋遺跡調査報告書—昭和57年度発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第4集
- 多賀城市教育委員会1995『高崎遺跡 第11次調査』多賀城市文化財調査報告書第37集
- 多賀城市教育委員会1999『小沢原遺跡・高崎遺跡—史跡連絡線開通記念発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第44集
- 多賀城市教育委員会2001『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ—』多賀城市文化財調査報告書第60集
- 多賀城市教育委員会2003『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ—』多賀城市文化財調査報告書第70集
- 多賀城市教育委員会2004『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ—』多賀城市文化財調査報告書第75集
- 多賀城市教育委員会2010『山王遺跡—第66・68次発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第100集
- 多賀城市教育委員会2018『XIII 市川橋遺跡第95次調査』『多賀城市内の遺跡2—平成29年度ほか発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第138集, pp. 98-114
- 多賀城市教育委員会2022『山王遺跡第214次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第150集
- 多賀城市史編さん委員会1991『多賀城市史』第4巻 考古資料
- 多賀城市史編さん委員会1997『多賀城市史』第1巻 原始・古代・中世
- 高橋照彦1994『東国の施釉陶器』『古代の土器研究—施釉陶器—』古代の土器研究会第3回シンポジウム, pp. 19-26
- 高橋照彦2018『陰奥国府城における10世紀の土器様相』『宮城考古学』第20号, pp. 187-206
- 武田健士2020『陰奥国府 東北支配の拠点』『季刊考古学』152, pp. 60-62
- 栃木県教育委員会1987『下野府跡Ⅷ 木簡・漆紙文書調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告第74集
- 長岡龍作2014『丘像・折竹と風景』散文館
- 奈良文化財研究所2006『古代庭園研究Ⅰ』奈良文化財研究所学報第74号
- 奈良文化財研究所2011『研究論集17 平安時代庭園の研究—古代庭園研究Ⅱ—』奈良文化財研究所学報第86号
- 平川剛1999『古代地方都市論—多賀城とその周辺』『国立歴史民俗博物館研究報告』78, pp. 1-30
- 古川一明2007『多賀城跡の11世紀・12世紀の土器について』『宮城県多賀城跡調査研究所年報2006』, pp. 72-79
- 文化庁1974『重要文化財 五重塔V』毎日新聞社
- 宮城県教育委員会1994『山王遺跡八幡地地区的調査—県道泉塩釜線開通調査報告書Ⅰ—』宮城県文化財調査報告書第162集
- 宮城県教育委員会1995『山王遺跡Ⅱ—多賀前地区遺構編—』宮城県文化財調査報告書第167集
- 宮城県教育委員会1996a『山王遺跡Ⅲ—多賀前地区遺物編—』宮城県文化財調査報告書第170集
- 宮城県教育委員会1996b『山王遺跡Ⅳ—多賀前地区考察編—』宮城県文化財調査報告書第171集
- 宮城県教育委員会1997『山王遺跡Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第174集
- 宮城県教育委員会1998『山王遺跡Ⅵ—八幡地地区的調査—県道泉塩釜線開通調査報告書Ⅱ—』宮城県文化財調査報告書第175集
- 宮城県教育委員会2000『市川橋遺跡—県道「泉—塩釜線」開通調査報告書Ⅲ—』宮城県文化財調査報告書第184集
- 宮城県教育委員会2009『市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地地区—県道「泉—塩釜線」開通調査報告書Ⅳ—』宮城県文化財調査報告書第218集
- 宮城県教育委員会2018『山王遺跡Ⅸ—三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書—』宮城県文化財調査報告書第246集
- 宮城県教育委員会・多賀町役場1970『多賀城跡調査報告Ⅰ—多賀城廢寺跡—』
- 宮城県多賀城跡調査研究会1978『多賀城跡調査研究会年報1977』
- 宮城県多賀城跡調査研究会1981『多賀城跡調査研究会年報1980』
- 宮城県多賀城跡調査研究会1986『多賀城跡調査研究会年報1985』
- 宮城県多賀城跡調査研究会1991『多賀城跡調査研究会年報1990』
- 宮城県多賀城跡調査研究会1992『多賀城跡調査研究会年報1991』
- 宮城県多賀城跡調査研究会1993『多賀城跡調査研究会年報1992』
- 宮城県多賀城跡調査研究会1998『多賀城跡調査研究会年報1997』
- 宮城県多賀城跡調査研究会2002『多賀城跡調査研究会年報2001』
- 宮城県多賀城跡調査研究会2020『多賀城施釉陶器』宮城県多賀城跡調査研究所資料V
- 村田晃一2018『陰奥中部における陶器の生産と消費（1）』『宮城考古学』第20号, pp. 165-186
- 謝辞
本書執筆の上で、下記の方々よりご助言・ご指導頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。(五十音順、敬称略)
佐藤信 高橋透 武井紀子 千葉孝介 長岡龍作 平川剛



写真図版 1

写真図版 2



写真図版3



写真図版4



写真図版 5

写真図版 6



写真図版7

写真図版8



写真図版 9

写真図版 10



写真図版 11



写真図版 11



写真図版 11



写真図版 12



写真図版 12



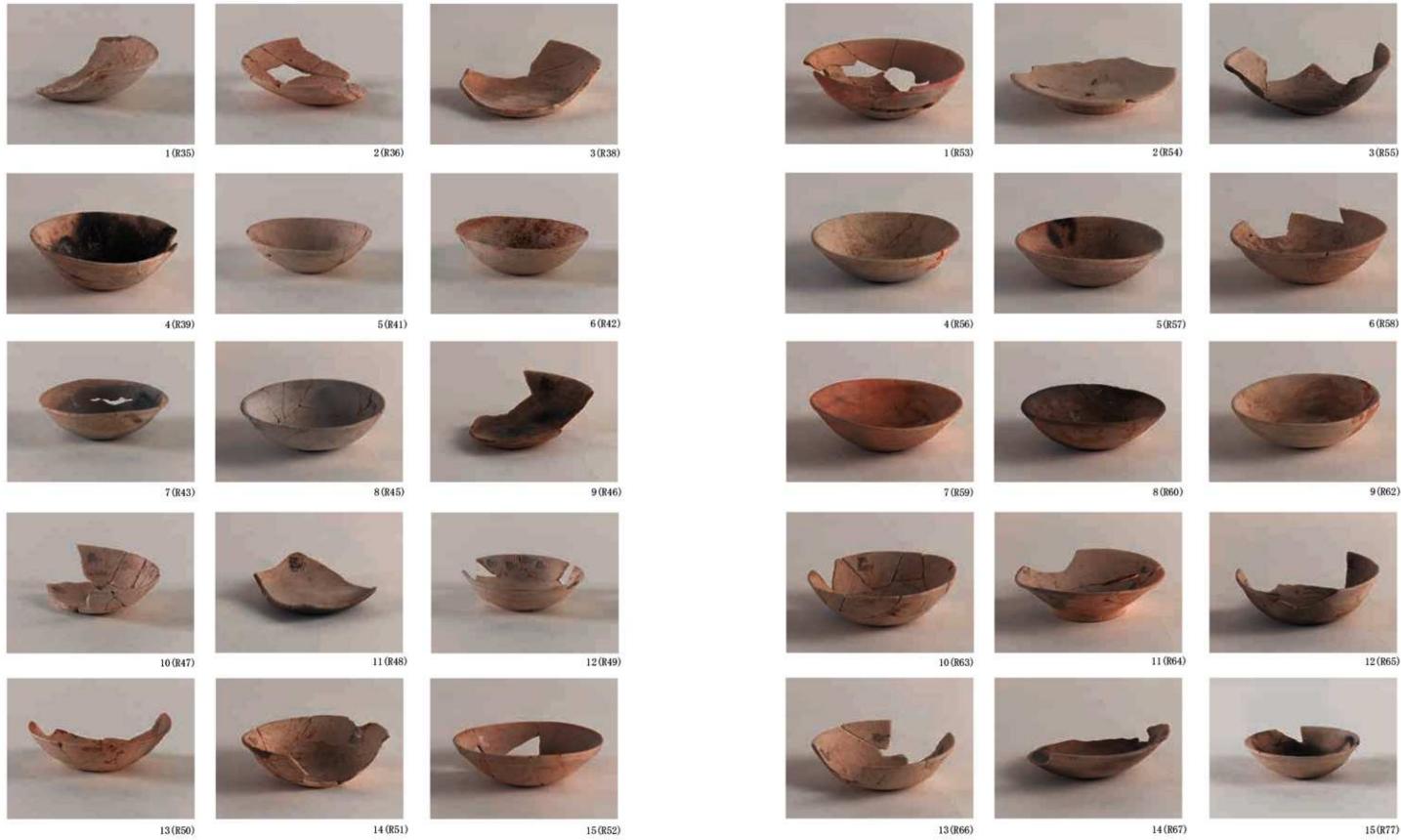
1 ~ 15: S X 3623 第 1 層

写真図版 13



1 ~ 15: S X 3623 第 1 層

写真図版 14

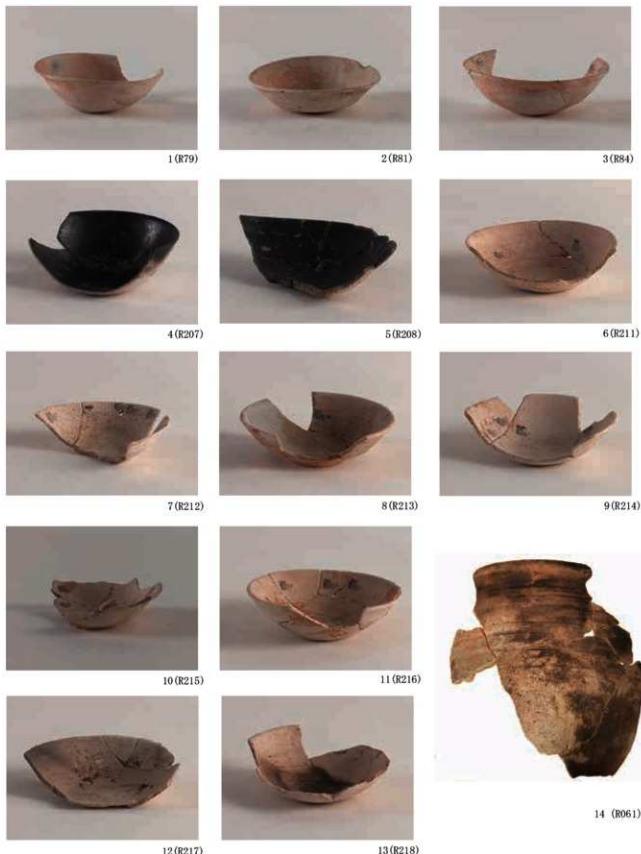


写真図版15

1 ~ 15: S X 3623 第1層

写真図版16

1 ~ 15: S X 3623 第1層



1 ~ 14: S X 3623 第 1 層

写真図版17



1 ~ 12: S X 3623 第 2 層

写真図版18



写真図版19

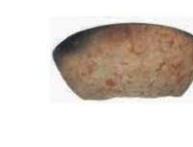


写真図版20



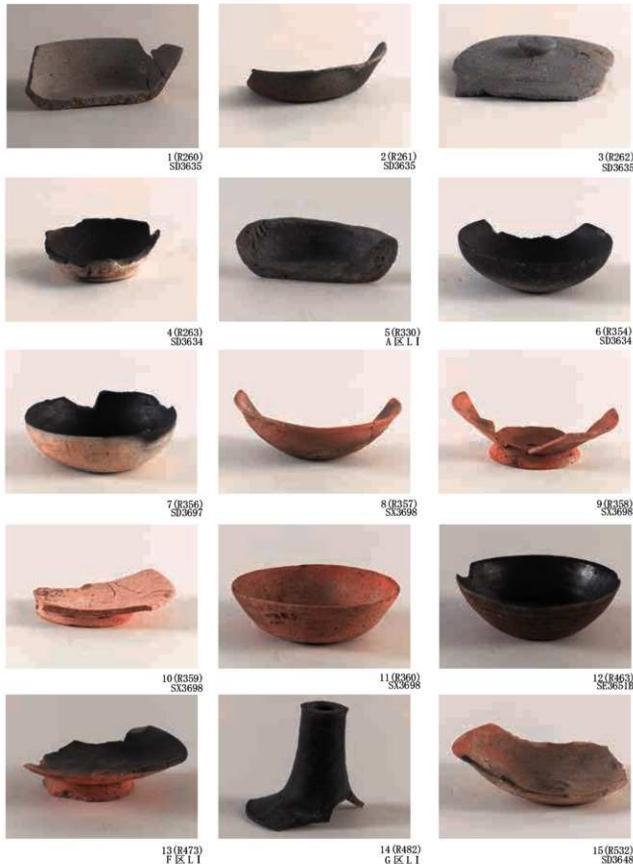
1 ~ 9 : SE3638A 側内堆積土 出土

写真図版21



1 ~ 7 : SE3638B 側内堆積土 出土
8 : SE3638B 抜取穴出土

写真図版22



写真図版 23



写真図版 24

報告書抄録

ふりがな	いちかわばしいせきだい96じちょうさはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	市川橋遺跡第96次調査 発掘調査報告書							
副書名	伏石地区の調査成果							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第151集							
編著者名	小原毅平							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134							
発行年月日	西暦2022年3月							
所収道路	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市川橋遺跡 (第96次)	宮城県多賀城市市川字伏石10番地19号	042099	18008	38度18分3秒	140度59分3秒	20180226 ～ 20190809	7,200 m ²	宅地造成
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市川橋遺跡 (第96次)	集落・都市 中世	古墳・古代・ 中世	道路跡、区画溝、池状遺構、井戸跡、樹立柱建物跡、堅穴建物跡、塼跡	土師器・須恵器・須恵系土器・青磁・絆輪陶器・灰陶・陶器・二彩陶器・盞串・甕・辛子状木製品等、豊富な仏教関連遺物が出土した。	瓦・水瓶・二彩陶器・舟形木製品・運舟状木製品等、豊富な仏教関連遺物が出土した。			
要約	市川橋遺跡第96次調査では、多賀城南面に広がる方格地割のうち、北2・西3区及び北2西4区に当たる街区を調査し、道路跡の変遷や区画内の様相の一端が明らかとなった。園池を有する邸宅の発見や、高級陶磁器類・仏教関連遺物の出土等が注目される。							

多賀城市文化財調査報告書第151集

市川橋遺跡第96次調査 発掘調査報告書

— 伏石地区的調査成果 —

令和4年3月26日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

宮城県多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

宮城県多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

この印刷は、環境にやさしい
(植物油インク)を使用しています。